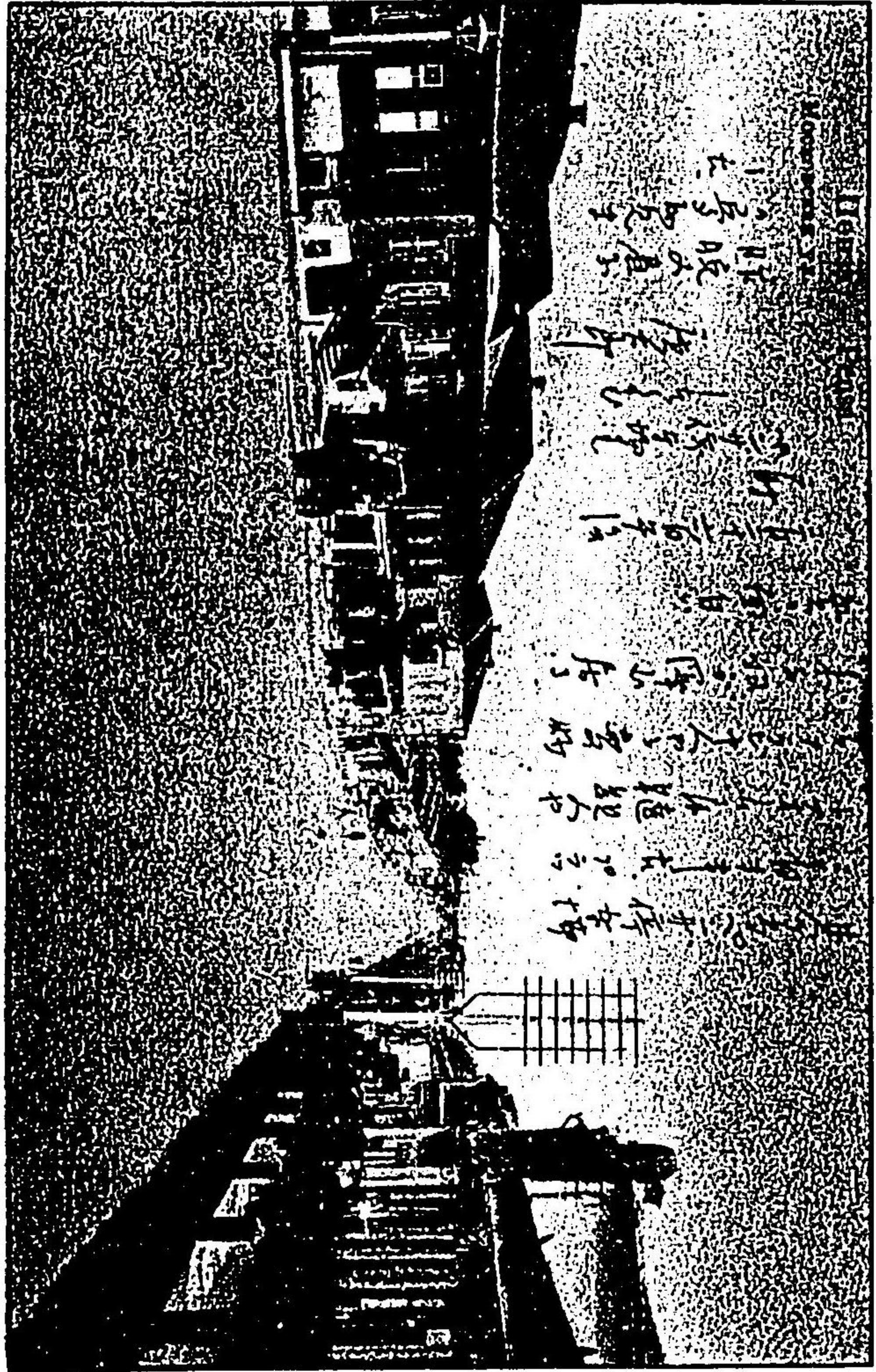


楚人冠著

大英遊記

班車停ガソノ



此の電車は
 昭和十一年
 十一月一日
 開設された
 ものである
 現在では
 最も重要な
 交通手段と
 なっている
 ことである
 である

63
9

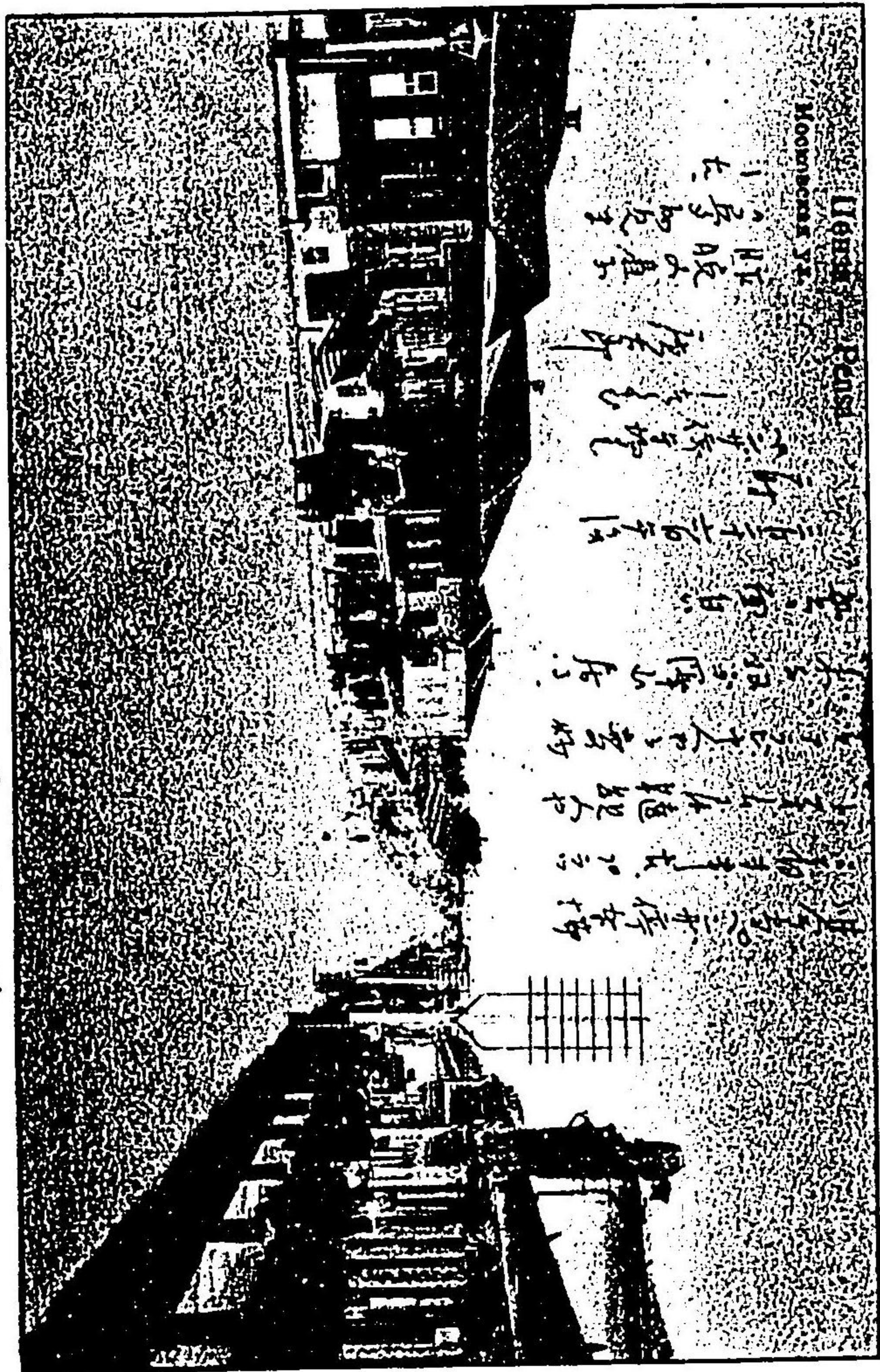


佳友齋氏寄贈書

683860

63

9-



場車停ザン



佐友務氏寄贈書

683860

自序に代ふる序

著者は、此書の序にと、數日の推敲を経て、一長篇を草し、會心の作だ、痛快の文だらう、と言ひつゝ、予に示した。著者一家の筆鋒、銳利を極めて痛快實に其自贊する所に負かないが、併し此は罷たしたまへと、遂に著者が折角の苦辛を水泡に歸せしめた。予は其の痛快を愛するの餘、痛快に過ぎたるを惡んだのである。予は酒を愛して、酔を厭ふものである。無理である。此の無理を聽いて、會心の文を爐火に投じた著者の雅量は、甚だ嬉しい。去れど、此の卷頭より痛快會心の大文字を奪つて、此の含糊の囁語を陳ぬるのは、讀者に對して寔に氣の毒。蓋し予が婆心も亦た過ぎた。

四十年十二月

澁川玄耳

大英遊記目次

小引.....一

前記——露獨佛

日本海.....二

浦潮斯德.....四

浦潮より露都.....(七一) 二八

一(七) 二(七) 三(八) 四(九) 五(一〇) 六(一一) 七(一二) 八(一三) 九(一四) 十(一五)

十一(一六) 十二(一七) 十三(一八) 十四(一九)

滿洲里停車場.....二八

露國議會を見る.....三三

客舎閑話.....二七

目次

目次

二

露國より伯林……………三二

伯林警見記……………三七

伯林より巴里……………四三

巴里日記……………四七

本記—英

隨興記……………(五一—七四)

大使宮を迎ふ……………五一

倫敦市の歓迎……………五五

觀兵式を觀る記……………六四

ボーツマン……………(六八—七四)

一(六八)ニ(七一)ニ(七三)ニ

倫敦小品……………(七五—一七五)

夜會の歸り……………七五

カート、ホース、ショー……………七九

ムーア、ゲートの敗墟……………八三

下院の議場……………八五

三等客車……………八九

「トリビューン」の編輯局……………九三

記者俱樂部……………九六

午前三時の朝飯……………九九

「メール」の社長室……………一〇三

汽車中の原稿……………一〇六

ライシナム座……………一〇九

目次……………一一

無名の投書……………七三

瀬山壽君……………一七

汽車の乗替難……………一三

デビス老人……………一五

アボンの流……………一八

ケニルウラース……………三三

ナイチンゲール……………三七

日本人倶楽部……………四一

晚餐とシガー……………四四

「タイムス」の索引部……………四八

「タイムス」の編輯局……………五三

婚禮とブレイン君……………五七

日本語の「君が代」……………六〇

アールスコートの日本村……………六七

倫敦の下宿……………七六—七八

一、下宿さがし……………七六

二、下宿の一日……………八〇

三、女のお客……………八四

四、向ひ合せのお客……………八八

五、箸と酒と福神漬……………九三

六、ペイン夫婦……………九六

七、獨人ミンク……………一〇〇

八、若い細君……………一〇四

九、わが同業……………一〇九

十、宿の一家……………二二五

大名屋敷……………(二一九—二五〇)

一、サットン、ブレース……………二一九

二、ストーンレー、アム……………(二七一—三三三)

上(三三三) 下(三三三)

三、ウリック、カッスル……………二三五

四、ガイヌ、クリッフ……………二四〇

五、ヒンチンブルック城……………二四八

不心得なる心得……………二五一

後記——白濁地蔵……………(二五五—二七二)

ブラツセル……………(二五五—二七二)

一、倫敦出發……………二五五

二、ウワータール……………二六〇

三、ブラツセル出發……………二六七

白耳義一啓……………二七一

南獨の三日……………二七六

わが観たる霧人……………二八〇

露國横斷記……………(二八五—三五二)

一、維也納の旅行券裏書……………二八五

二、維也納出發……………二九三

三、グラニツア驛……………二九七

四、フルシヤウ……………三〇五

五、莫斯科……………三二二

六、シベリヤ……………三二五—三三〇

△シベリヤ鐵道……………三二五

△車中の日露交渉事件……………三三〇

△ウラル……………三三〇

△入浴……………三三〇

△オムスクーック……………三三〇

△バイカル湖岸……………三四一

△車中の日露談判……………三四五

△シベリア終る……………三四八

目次終

挿畫目錄

著者游歴地圖……………口繪

ボガワ夫人……………口繪

ブラッセルの噴水像……………口繪

露獨の國境……………口繪

レミントン・シネマ・公園……………口繪

同……………口繪

ワトキ河……………口繪

アトクヌエトの日本村……………口繪

ウツリツク城の温室及花壇……………口繪

ワルシヤウ……………口繪

バイカル湖畔の疎林……………一〇

タイガ停車場……………一三

ウラルの二奇峯……………一五

ウラル山上の湖水……………一六

ウラルガの大鐵橋……………一七

伯林フリードリッヒ街停車場……………二五

伯林ウンテル・デン・リシデン……………三八

伯林チアガルテン……………四一

伯林ポツダム・プラッツ……………四四

ノールダム塔様の裝飾……………四八―四九

ブレイン君……………五一

倫敦ギルド・ホール……………五六

倫敦マシジョン・ハウス……………六三

英國の國會議事堂……………八六

英國下院議場……………八九

倫敦ピカデリー・サーカス……………一〇一

沙翁の生家……………一二九

ストラトフヤードのトリニチー會堂……………一三三

ケニルウワース城の敗墟……………一三四

アートルスコート博覽會の庭……………一六七

ウエストミンスター・アベ……………一七六

リッチモンド公園よりテームス上流を見下す……………二〇八

サットン・プレース……………二二三

ノースクリップ卿……………二三五

目次

ウヲリック城の本丸の正面……………二三四—二三五

ウヲリック城の入口……………二三六

ウヲリック城の大皿……………二三八—二三九

ウヲリック城……………二三九

ガイヌ、クリツネ……………二四四

ブヲツセルの公園の入口……………二五七

ウヲトターリーの戦役記念碑……………二六六—二六七

パレ、ゾ、ジュヌナス……………二六八

アルサス風俗……………二七七

旅行券の裏書……………二八八—二八九

維也納市中……………二九〇

パネカド湖岸……………二九三

大英遊記

楚人冠杉村廣太郎著

小引

三月十日敦賀を發し、十二日浦潮着、留まること三日にして、十五日浦潮を發し、二十八日彼得堡に着す。四月七日彼得堡を發して伯林に至り、十四日伯林を發して巴里に至り、二十二日巴里を發して倫敦に入る。

倫敦に留まること約二箇月。六月二十一日を以て此處を發し、同日ブラツセルに出で、二十三日ストラスブルヒに至り、二十五日ウルツブルヒに至り、二十六日維也納着。翌日維也納を發し、ワルシャウを経て、二十九日莫斯科に着す。

六月三十日莫斯科を發し、七月十二日浦潮に着し、翌日浦潮を發す。敦賀に歸着せるは七月十五日。

前記 露獨佛

●日本海

三月十日、午後第一時船敷賀を發して浦潮に向ふ。夜來の微雨敷賀灣を出で、後全く霽る。風靜かに波平かにして、船大地を行くが如し。南越の諸山漸く雲煙の間に消えんとする頃、巨鯨の潮を噴いて波間に出没する者兩三を觀る。甲板の上俄に賑し。

汽船モンゴリアは噸數約三千、我が滿洲丸の姉妹船たり。暖室の設備頗る備はり、室内の溫度常に七十度を下らず。乗合ひの日本人は皆寧ろ其の熱さに苦しむ。一等船客は獨人二、獨人三、日本人五、日本語大に食卓の上に取履し、獨蘭の人も遂に相見て、「お早う」などと挨拶するに至る。

十一日終日無風靜穩。斯くの如きは一年僅に一二回と船員のいふ。午前九時朝餐、正午

午餐、午後四時喫茶、六時晚餐、八時又喫茶。皆一食を逸せず、一菜を餘さず、食堂内靜謐々たり。

午後五時、多少の濃氣を見る。

十二日、起き出づれば、船洋中に假泊して動かす。昨夜二時以來濃霧の爲に進行を停め、今尙東經三十二度二十五分北緯四十二度二十七分の處に在り。浦潮を距ること約四時間の航程なりといふ。衆皆大に閉口す。天明けて後尙霽れず、午に至りて霧益深し。濃々たる海上船外一物を辨せず。

停まること約十二時間。午後二時霧の儘に霽るゝを待つて發す。四時アスコルド島を過ぎ、六時初めて浦潮に入る、灣内一面の流水殆ど水を露はさず。船之をつきのけ突き破りて進むに轟々として聲あり。磊々たる氷塊の一たび舷頭に觸るゝや、前なるは後を押し、後なるは其の又後をつき、水面高くつゝ立ち上るあり、水底深くもぐり込むあり、一塊動いて千塊萬塊皆動き出づると、左ながら名將の一喝に會うて、虜兵の亂れ散るに似たり。

浦潮斯德

四

若し夫れ目に餘る巨塊の行手に塞がれるを突き破りて進むや、鏡の如き一大氷塊は忽ち裂罅を生ずること十餘間、壯觀ならざるにわらず。

斯くて一日を後れて發したる我モンゴリアは、又一日を後れて日暮浦潮埠頭に着したり。

(二月十二日夜浦潮客舎より)

●浦潮斯德

浦潮に留まること三日にして、僕は正しく三年の壽命を縮めたり。見るも聞くも恐ろしきことばかり。進むも退くもいやらしき所ばかり、やれ／＼心細し。

船埠頭に着するや、來り集る者堵の如し。中に滿人の洩汚さわり、韓人の汚穢しさあり。韃靼人のひくつけなるあり、殊に哥薩克の古手と來ては、例の毛冠帽を被り、亂れたる毛皮の外套を着け、ぎろ／＼と四邊を睨め廻す様、先づ新來の旅客が度膽を抜くに足れり。日暮れんとする頃、出迎の八十島兄と馬車を驅つて宿に迎へば、右の方遙に短銃の音兩二

發を聞く。又何かあつたらしいと八十島兄のいふ。何かとは心が／＼の至りなり。宿に入れば、空氣の流通も何もなき露人式の家屋。其の暖かさは結構なれど、其の臭きには閉口せざるを得ず。用終りて愈臥床に入らんとするに、番頭來りて、強盜の恐れあるを以て洋燈を消し呉れよといふ。番頭氏、僕を赤毛布と見てか、強盜殺人を説くこと詳細を極む。

翌朝小林商店を訪ふ。つい其の二日はと前、此の商店の近邊の露人の宅に、強盜侵入し、家内殘らず殺されたりといふ。又杉浦商店の近所にも、石油を打ちかけて、今や燒き拂はんす用意せられたる家ありさといふ。強盜殺人の噂類なれば、日没後は堅く外出すべからずなど戒めらる。

八十島兄と共に日本の神窟を見る。怪しき洋装の日本婦人出沒隠見す。いやらしきと限りなし。とある家の中に入れば、露人四五酒を酌み交しつ、濁聲高くされ歌唄へるあり。其の傍に、人目も恥ぢず一露兵の輕々と一娼婦を膝の上に抱き上げて、何やらん語り合ふあり。そこ／＼にして此處を出づれば、大道の真中にて制服をつけ長劍を帯びたる偉大の男が、

浦潮斯德

五

浦潮新徳

二人の日本婦人を追ひ廻し、抱きつきて、さやツ〜といはせ居るを、誰ぞと問へば、八十高兄の曰ふ、われは露西亞の巡査と。僕嗚然たり。

馬屋原商店といふに入る。客年末チエルニゴフカにて洗濯業を営める日本人の、一家盡く殺されて、僅に生後間もなき赤子の生き残り居たるを、此の家に引取りて養へりとのなれば、就いて之を見る。生後六七月、可愛き女の子なり。此の子を引取りて後、或夜此の家
の妻君の夢に、二人の女枕頭に立ち現はれ、其の中茶縞の衣着たる三十ばかりの女、類に子の行末を頼み聞えたる後、己は此の子の母なるが、此の子の大切なる守袋を棚の上に残し置きたれば、之を收めて此の子に與へ呉れよといへりを見て夢覺めぬといふ、其、後此の子の母が三十位の女なりしことは分明したれど、果して茶縞の衣を着て殺されたりや、又守袋が棚の上に残り居りしやは今取調中なり。

今十五日正午、僕は愈此の恐ろしいやらしき浦潮を後にして、彼得堡に急行せんとす。道中の光景は途中より報する時あるべし。三月十五日前浦潮にて

浦潮より露都

(一)

三月十五日正午、萬國彩票車輛會社の急行列車に乗じて浦潮を發す。同社の車輛は思ひしほどに備はらず、遂に東清鐵道會社のに劣れりと知れる人はいふ。

十六日、哈爾濱に近づくに及び、此の附近に馬賊出沒すとして露兵乗り込みり。乗客總員七八十、中に日本人八九を數ふ。他は盡く獨露の人なり。

車外多く雪を見ず、車室内の温度華氏の八十度に及び、食堂内電氣扇を用ふ。暖爐を焚いて電氣扇を用ふるは、蓋し珍無類なり。

十六日午後三時哈爾濱を通過す。(三月十六日哈爾濱にて)

十六日午後四時、停車一時間の後哈爾濱を發す。哈爾濱以西齊々哈爾附近に至るまで、沃

野千里、一望際涯を知らず。

十七日午後二時半、海拉爾を通過す。此の邊に至りて、初めて處々殘雪を見る。浦潮以來雪を見ること甚だ稀なりしが、海拉爾以西雪漸く多く、見る限り渺茫として雪ならざるはなし。

八時滿洲里停車場に着す。滿洲鐵道此に終り、是れより愈々西伯利亞に入らんとす。此處にて停車一時間、手荷物の検査を受く。(三月十七日滿洲里にて)

(三)

昨夜滿洲里驛税關の荷物検査頗る面倒を極め、約三時間を費して漸く發せり。僕はよく怪しき者と見認められけん、荷物の底の底まで引くり返され、再三行先を尋ねられ、刺さへ旅行券まで調べられたり。同行の加藤ドクトルは、ドクトルといふ廉を以て幸ひに事なきを得たり。

今朝來、道西伯利亞に入りて、氣温高く、車外に出づるに必ずしも外套を須ひす。十一時ア

ドリアノフカ停車場を過ぐ。此の邊の線路、紆餘曲折甚だしく、一進一退時に殆ど8字形をなすことあり。白雪日に映じて鮮麗人目を眩す。
午後四時半列車チタに着す。(三月十八日チタにて)

(四)

十九日正午、ウエルフニウシンク停車場に着す。日麗らかなれど風甚だ寒し。停車一時間餘。

此の日終日氷雪の間を走り、時々荒村寒落を見るのみ。三時セリンガ停車場を過ぐ。驛内頗る雑沓の體なり。

露領に入りてより、浦潮、哈爾濱、チタ皆時間を異にし、何時が何時やら全く滅茶苦茶となる。此のはがきを認むる時、イルクーツク時間にて午後二時四十五分、露都にて午前七時三十分、東京の午後四時なり。

僕等は今夜バイカル湖を通過し終り、明朝未明イルクーツクに着くべし。(三月十九日セリ

浦潮より露國



バ イ カ ル 湖 の 疎 林

シカにて)

(五)

午後四時初めてバイカル湖を見る。列車樺樹の疎林を過ぎ、湖影林間に隠見す。須臾にして列車林を出れば、眼界頓に開けて、湖面萬頃の白氷皓々として一張の白紗を布くに似たり。對岸の諸山恍々として煙の如く、吹かば將に消えんとす。

暮れなんとする頃、タンポイ驛に達す。湖光山影依稀として人に憂かず願みれば、絲の如き緋月西に在り。シベリア原頭の暮色亦愛すべし。停まること甚だ長くして日全く暮る。

八時半ウードリノ驛に着す。此處にて又もや手荷物

の検査を受く。(三月十九日ウードリノにて)

(六)

二十日未明、列車イルクーツクに着し、此處にて露國式列車に乗り替ふ。露國式列車は、其の室内裝飾の外は、設備に於ても、待遇に於ても、食事に於ても、道に今までの萬國豪華車輛會社のに勝れり。殊に車中浴室を備へ、二留にて乗客の入浴に供したるが如きは最も珍とすべし。

乗替に時を費すこと夥しく、四時間の後漸く發す。時に午前八時なり。此處にて浦潮以來室を同じしたる土耳其の俳優マニエフと分る。氏は別室なる露國第一流の名優アデルゲーム一行中の一人なり。快活瀟灑、能く語り能く笑ひ、履滑稽を演じて同室の無聊を慰めたり。一座イルクーツクに一興行すべき筈なりといふ。(三月二十日ツマにて)

(七)

二十日朝イルクーツクを發してより、列車枯木寒林の間を過ぐ。人煙稀少鶏犬の聲を聞

浦潮より露國

浦湖より露風
 十一
 かず、其の荒れさびたる様、誠にシベリアの野たるに恥ぢず途中屢雪に遭ふ。又時に複線工事の準備らしきものを見る。二十一日朝來大に雪ふる。クリチンスカヤ驛に達せる頃最も甚だし。此の邊積雪約三尺。十二時チンカスヤに着す。雪尙已まず、四顧濛々たり。シャルピーシニ驛に至りて、莫斯科發の萬國寢臺車輛會社の急行列車と行き合ふ。此の驛を過ぎて、雪初めて霽る。線に沿うて構、松、落葉松の密林繁茂し、眼界大に塞がる。天然の富源眞に羨むに堪へたり。(三月二十一日午後三時汽車中にて)

(八)

昨日イルククーツクに車を替へてより、僕と加藤ドクトルと臺灣總督府技師の一行と室を同じうする事となり、邦人四人一室を占領す。此に於て食後の茶談大に賑ひを加へ、談笑の聲屢四隣を壓す。長旅の事とて、追々に車中に知り合ひ出來、隣室の獨逸人も遊びに來れば、西伯利亞狙撃隊の士官とやらいふ露人も酔拂つて管を捲きに來る。又なく賑し。午後三時カン河の鐵橋を涉り、カンスク驛を過ぐ。繁盛なる小市街なり。各驛に於て



浦湖より露風

場 取 停 ガ イ タ

行き違ふ列車漸く多きを加へ、停車驛亦其の數を増し來れるが如し。

夕刻より又雪ふる。車外温度列氏零下五度。(三月二十一日夕汽車中にて)

(九)

クラスノヤルスクは昨夜の中に通過し、今日は朝來唯雪中を走る。別の奇なし。午後二時マリーンスクを過ぎ、六時タイガ驛に着す。シベリア鐵道の中央點たり。トムスクに至るの支線は此處より分岐するなり。タイガは密林の義、其の名の如く此の邊に林盡くる所を知らず。氣温列氏五度甚だ暖かし。車中書を讀む。倦み來れば眠る。覺めて同室の武藤

浦潮より露都

翁、藤江技師、加藤ドクトル等と語る。談半にして停車場に着すれば、出で給葉書を求め、又ブラットフォームを歩す。ヤボンスキーとて驛内の男女皆目を囁す。朝九時に起き、十時茶を喫し、一時朝食を喫し、七時晩餐を喫して十時臥床に入る。之を昨今の日課とす。唯今日本の午後十時にして日未だ暮れず。(三月二十三日タイガ驛にて)

(十)

昨、雪中に暮れ、今、雪中に明く。天朝かに氣は清けれど、風いと寒し。十二時カインスク驛に着す。密閉したるまゝ、殆ど全く換氣を行はざる我が列車の空氣は、日を経るに従つて漸く腐敗を加へ、不快いふ可らず。停車場に出づるが何よりの樂みなり。浦潮以來入浴せざること十一日、如何にも不快なりければ、今日は二留を齎發して車中の湯に浴す。浴場は方一坪許り、シャワー、バツスあり、化粧臺あり、甚だ結構。塵垢を一洗して後、紅茶一碗を味ふ。シベリア旅行中第一の快事なり。午後九時オムスクに着す。明夕は愈ウラルにさしかゝるべし。(三月廿二日オムスクにて)

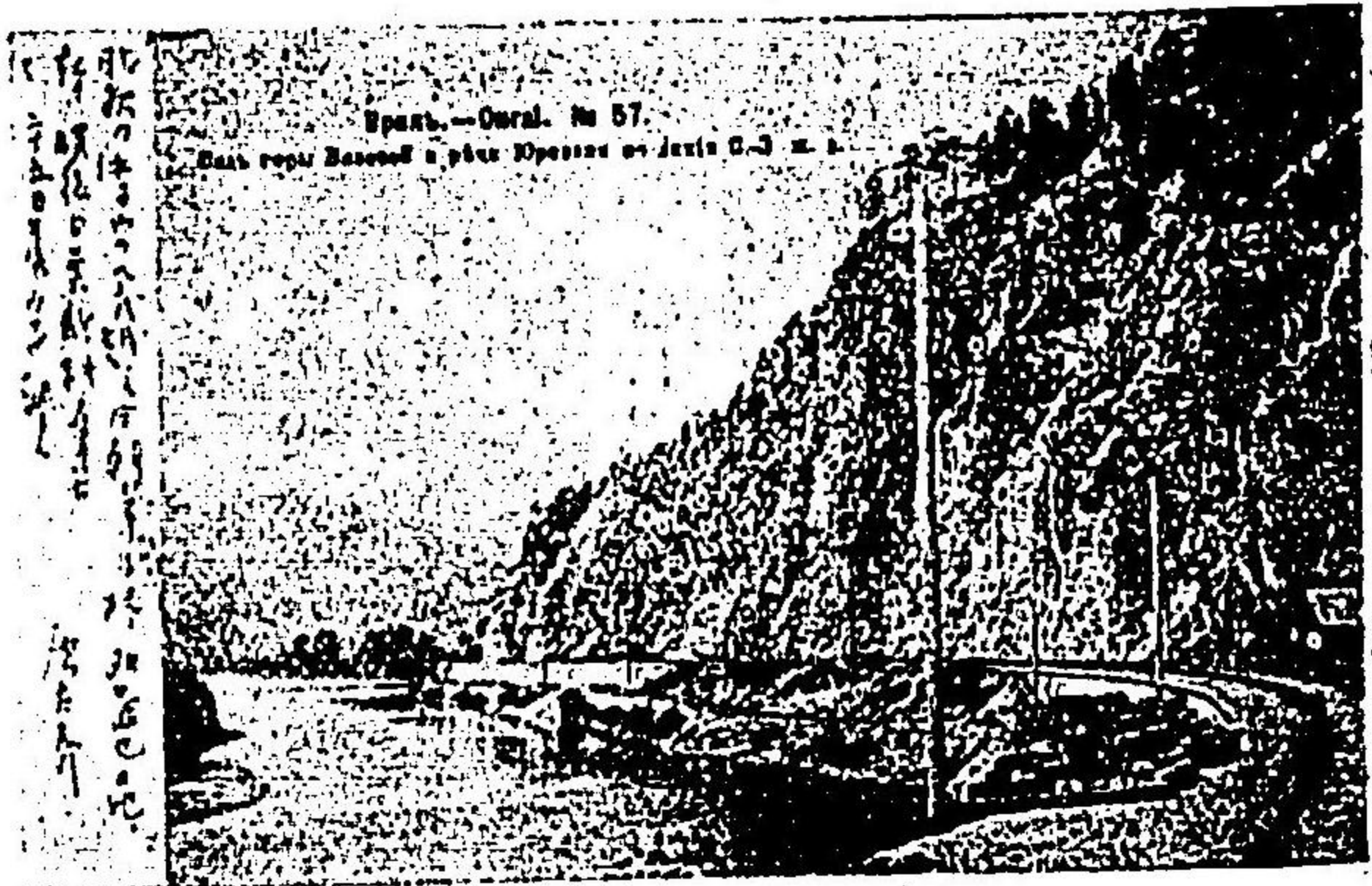
(十一)

三月二十四日、午前六時トロボウロウスク驛を過ぎ、八時半ベツーフ驛に着す。氣温列氏の零下十八度、萬象盡く氷化して、戸壁も樹枝も窓硝子も、苟くも一點の水氣をだに存せん限りは、一物として凍らざるなし。殊に樹枝の凍りて左ながら白珊瑚の立てるが如き、鮮麗いふべからず。積雪深さ凡そ三尺、霜柱高さこと一尺、砂の如き微雪霏々として降る。但し車中は例により華氏七十度以上の暑さ、やれシベリアは暑い處と同室の皆々つぶやく。午後一時クルガン驛に着す。今夜チエリアビンスクに着すべし。(三月廿四日クルガンにて)

浦潮より露都



ウラルの奇峰



浦河より露

(十二)

昨夜月明ウラルを過ぐ。積雪滿地月色流るゝが如し。夜三時絶頂なるズラトウスト驛に着するを待つて、初めて臥床に入る。夢は歐亞の境を辿りて、今朝起き出づれば、身は既に歐羅巴に在り。
正午ウフフ驛に着す。ウラル以西雪漸く深く、時に丈餘に及べるあり。皓々たる萬頃の平野、渺として晴空一碧に連なり、天下の壯觀を極む。列車走ること三五時にして、尙其の觀を改めず。其の廣さを知るに足る。
夜半サマラに着すべし。三月廿五日夕汽車中にて

十六



(十三)

二十六日朝來煙霧濛々たり。皚々たる白雪、大際に至ること、依然として昨の如し。

ウラルの大鐵橋

此の日未明サマラに着す。中央亞細亞に向ふ支線は之より分る、七時ウラルガ河の大鐵橋を過ぐ。長橋長さこと約十八町。試みに車背の窓を開いて之を見るに、過ぐること半にして、橋端既に遠く白雲裡に没するに似たり。工費三百

萬留を投ずといふ。五時ペンザト着。次第に歐羅巴臭くなり來る。明日は愈々莫斯科に着くべしとて、車中一同大に浮かれ上がる。

浦河より露

十七

三月二十六日夕汽車中にて

(十四)

二十七日午前十一時莫斯科着。彼得堡行列車の出發を待ち合す間に、急ぎクレムリン宮を見る。例の巨鐘を初め歴代帝王の遺骸を拜し、玉冠寶衣を見、次手に何とか僧正の爪の垢とか額の皮とかいふ者を見せらる。

午後四時ニコライスカヤ停車場より乗車。一夜を不自由なる普通列車の中に明して、今初めてベチエルブルグに到着せり。僕元氣依然として旺也。

(三月二十八日午前七時卅分彼得堡にて)

●滿洲里停車場

(シベリヤ道中の一節)

滿洲里停車場へ着いたのは丁度午後の八時。高く吊した白熱瓦斯の光が青白くプラントフレームを照して「附け刃」の露兵が三々五々嚴重に夜を替めて居る。

此處の税關で荷物の検査があるといふので、加藤ドクトルや浦潮杉浦商店の近江岸君や其の外三四人連れで列車を出て見る。外は非常に寒い。何處で何う検査をするものかか目分らぬので、兎も角も大きな二重張の戸を押して停車場に入ると、何處に行く積りのものか、旅装した露兵が、廊下にも待合室にも殆ど立錫の餘地を存せぬ程にうぢやうして居る。暖爐の暖まりと人いざれと煙草の煙とで、生温い空氣が濼々として左ながら蒸し返す様な。夫れに忍アな甘ツたるい一種の臭氣がする。眼鏡がばツと曇つて仕舞ふ。

ヤボンスキー〜と呼び交はして、ごろ〜と我等を眺めては何やらんさゝめき合ふ露兵の間を分けて、とある事務室に入ると、此處に憲兵らしい體の小さい恐ろしい早口の男が居た。近江岸君との問答一渡りすんで、我等は列び大名の渡り臺詞といふ體裁で、譯も分らず順々に一寸目禮して出やうとすると、丁度我等を尾けて来たものゝやうに備々と潜ひ寄つた大きな男が後から出て来た。見ればぐじや〜になつた毛冠帽を阿彌陀に被つて、顔は一面に血だらけ、眼の下からはまだだら〜と滴つて居る。我等はぎよつとして思は

す聲を立てやうとしたが、近江岸君の説明で、酔漢が何か憲兵に訴へて出て来た者と分つて、漸く胸を撫で下した。相手の男が憲兵であつたのも憚りながら、我等江戸ッ子には此時初めて分つたのである。

此處を出て又待合室に來ると、露兵が又もやヂロ〜と見やがる。足を踏み延ばして土間に腰を下した儘、薄氣味の悪い顔で見上げるのあれば、荷物を枕に踏反り返つて寝たのもある。我等小六の類ではないが、うつかりして飛んでもない藤吉郎を飛び出させては大變と、殆ど拾ひ足で通り過ぎやうとする途端、立ち話をして居た露兵は我等を見て、諧謔半分に其の中の一人を我等の方へ突き飛ばした。突き飛ばされた一人はよろ〜と加藤君に突き當つたので、此上喧嘩でも吹きかけられてはと、ほう〜の體でプラットフォームに立ち歸つた。

此處で彼此二三十分も待合すと、貨車から荷物が運ばれて、續々プラットフォーム脇の税關に持ち込まれる。時分を見計つて税關に入ると、結界の上に大分荷物が列んで居る。僕の

荷物は幸ひ二番目に在つたが、一番目の陸軍將校の荷物から絹織物が出て、目方を量つたり代金を見積つたり、大分手間が掛つて漸くのこと僕番になつた。税關吏が大な手をトランクに差し入れて、中の品々を一々引張り出して來る。堪まつたものでない。後で聞いた話だが、僕の露都行のことが浦潮の革命黨の新聞に出て居たので、豫め驛々へ注意が回つたとかで、僕の荷物は大分手厳しく調られた。中にも諸方から貰つて來た日本文の紹介状は、餘程變な者と見えたら、検査官が小首を捻つて、同僚と密々何やら囁き合つて、却々通過しさうになつたのを、側に居合せた元元山領事の武藤君が辯明して呉れたので漸く助かつた。夫れから僕の行先を執念深く問ひ糺した上、更に旅券を出させて何處へか持つて行つたさう急に返して呉れぬ。やつさもつさで漸く此の難關は通過したものゝ、日本を出る時折角と考へに考へて詰め込んだ荷物を、底の底まででんぐり返されて、之を片付ける手数は容易のことではなかつた。

自分のが濟んだ後、外の連中は何かと見て居ると、哈爾濱から乗り合せた佛蘭西の藝妓

露國議會を見る
 二人、之も大きなトランクを三四箇拾くり廻されて、大こぼしにこぼして居る。露國の名優
 アデルゲームの一行中の荷物の中から、芝居用の劔が五六本出て来て、之れも大分やかま
 しかつた。若し夫れ加藤ドクトルの荷物検査に至つては、天下の滑稽を極めたもので、先生
 初からドクトルで済して居ると、荷物の一番上から日本文の書物が出た。之は何だと言ふ。
 解剖學の書だといふ。聞くが早いか、税關吏が何心なく其の中を開くと、所もわらうに、出
 たも出たり、一頁大の婦人生殖器の圖。流石の税關吏も満面に苦笑を湛へて好矣。
 斯て税關の検査が済んで、荷物が貨車へ送り返された後、更に車室内の手荷物が一寸調
 べられた。列車が再び滿洲里を發したのは午後第十一時、丁度此處で三時間かゝつた譯に
 なる。露國にて

●露國議會を見る

四月二日午前九時、大阪毎日のマツカラ君に案内せられ、露國議會の見物にと志す。

議事堂は舊王宮の一を借用したるものとして結構頗る壯麗なり。馬車を車寄に捨て、内に入
 れば、早や華々と詰めかけたる傍聴人の外套帽子、所せきまで掛け列べられたり。今日
 は重要な豫算案の議事に大蔵大臣の演説あるべく、ようせずば解散の非運を見るべしと
 て斯くは詰め掛くるもの、多きなりと、マツカラ君は語る。田舎者の京見物、譯も分らず
 暗雲に其の後に随ひ行けば、兩側に居列ぶ守衛受付使丁の類、例の金光燦爛たる制服に、
 目ざむるばかり色さやかなる勳章佩劔の業々しきに似げなく、一々丁寧で脱帽して我等を
 見送る。丁寧なるは嬉しけれど、外套の脱がせ賃十文、上靴の取り揃へ賃十文と、一々に
 金欲しげなるは全く以てうるさし。

休憩室とも見ゆる大廣間を横ざりて議場に入れば、今しも振鈴の響盛に聞えて、議員は
 夫々着席の最中なり。一番に僕の目につきたるは、例の此の程墜落したりといふ天井にて、
 之は新に張り替へて間もなければにや、塗りもやらす白木の儘なり。議長席の右側は政府
 委員席にて、其の前面の前列に諸大臣居列べり。右端に頭髮の黒く若やかなるは首相スト

露國議會を見る

ルイピン、胡麻鹽の鬚生たる小柄の人は大蔵大臣コ、ウヅフ、禿げたるはスワニパツハ
禿げざるは誰と、マツカラ君一々致へ呉る。我等新聞記者席は、政府委員席の直隣に在りて、
此處には廿餘名の記者既に夫々に陣取りたるを見る。主としては露英米、次には獨伊の記
者なりといふ。中に三五名の婦人立ち交れり。マツカラ君其一の兩名を指して僕に囁いて
曰ふ、おれは御亭主の代理に來りて傍聴するなりと。我が邦にて斯ることあらば、嗚かし
記者俱樂部の大問題となるべしと我知らずはゝる。

議長席の眞下が演壇、其の又眞下が速記者席なること我が邦のと同じ。但し速記者の半
數が婦人なると、其の交替時間が殆ど五分間位宛なることが、聊か異様に感ぜらる。議員は
議長席より見て右黨左黨中央黨の配置何處も變らず。一般傍聴席は左側の二階を之に宛て
たるが、ぎしと押詰りたる傍聴人の殆ど過半は婦人なるを面白き。正面より右側にかけて
は外交官高等官の席、流石に此の席ばかりは人疎なり。そが中に、とある圓柱の脇に手を
額にして坐せる藍色の軍服着たる一將軍あり。さて、見たとのあるやうなとマツカラ君

に囁けば、マ君の曰ふ、見たこともわらう等、おれはクロバトキン大將なりと。

更に眼を轉じて議員席の方如何にと見ておれば、之は又何等の珍無類ぞや。議員の總數
約四百、何さま二十條の八種を集めたる露西亞のことにて、其の服装より面がまへ思ひ切
つて天下の奇觀をぞ極めたる。コスメチック香やかに分目正しく髪を梳りたる當世風の紳
士はいはすもがな、頭に總髪を垂れ法衣の袈裟かに曳きて、胸に十字架儼かにひけらした
る僧侶の八九名ばかり右黨の中に立交れる、先は我が邦にて見られざる所なり。左黨の中
には百姓議員と唱ふる者あり。ハイカラぶりをのみ是れ事とせる我が邦の夫とは變りて蓬
頭亂髮、顔は鬚に覆はれ手はむくつけく節くれ立ち、我が邦ならば筒袖股引の姿とも見る
べき赤又は黒のシャツを胸露はに着し、短衣もつけず襟もつけず、大手を振つて議席の間
を往來する様、可憐しななどいふ許りなし。十餘の鞭鞭議員が帽子を被れるまゝ議席に着
ける亦珍らし。彼等の俗、脱帽を以て禮とせず、敬意を表するには靴を脱ぐを法とすとい
ふ。彼等が演壇に立たん折、果して能く其俗に従ふべきや否やを知らず。中央黨の中央に

露國議會を見る

二十六

亞刺比亞式の白布くるくと頭に捲きつけて、高く群を抜ける一人あり。曰く是れ露國の回々教徒と。其の少し左に、我が邦の厚衣に似たる白色の長衫を被り、其の下より幅廣き帯様のものを捲たるが見ゆる男あり。何處の米屋の番頭にかと怪しめば、曰く是波蘭人の正装したるものと。左黨議員の中、白襟をつけたるもの凡そ半分、つけざるもの亦半分、熱誠なる拍手の聲は必ず先づ此の無襟の一隊より出で来る。

議事は大藏大臣の豫算案に對する説明演説に始まり、官吏兩黨交々立つて論戰頗る盛なり。二時一先休憩したる後、更に議事を繼續して夕刻に及べり。其の間に首相ストルイビン氏も演説し、藏相コ、ウヅフ氏も二回各一時間餘の長演説を試み、肥大なる右黨の領袖ポプリンスキー伯も演壇に立ち、社會民主黨の首領たるアレキシンスキー氏も、瘦癯を提げて兩三回演壇に現れたり。ア氏は脊丈低く顔色蒼白く、頭に小ざさ髯を蓄へ一見風采頗る揚らず、ボ氏と相對して好個の對照を見る。議論の内容は總じて我等田舎者に分らず、唯此の日某なる百姓議員が皺枯れ聲を振り上げて、頻に經費節減論を唱へたる中に、『クロバ

トキン將軍は年俸十三萬何千留、マカロフは十何萬留、日本の東郷大將は僅に六千餘留のみ。而も負ける者は矢張り負け、勝つ者は依然として勝つに非ずや。云々の語ありしと加にて、人の笑ひ合へるを見たり。惜むらくは此の時樓上既にクロバトキンの影を見ず。議事未だ全く終らねど、今日は解散さるべくも見えねば、マツカラ氏に依つて英米の同業者に紹介せられたる後、日暮此處を去りて宿に歸る。チワ河岸の人通、風は寒けれど流石に春めきて見ゆ(露都イギリス、ホテルにて)

● 客 舍 閑 語

大なるは露國の特色なるべし。小ざさは紙巻煙草ばかり。町の名前へらぼうに長く、料理の一人前は逆も我等に食ひ盡し難し。佛蘭西河岸十四號「ガ」フランツースカヤ、ナーベルチナヤ、ノーメル、チエテレーナツアツイとわつては、豈に夫れ發句にも都々逸にもなる

客舍閑語

二十七

客舎閉鎖
ものならんや。

ウラルを越えたる後何とか言へる停車場に停車中、餘りの蒸暑さに試みに二重張りの窓を開きて頭を外に出せば、村の百姓達我等を珍らしと見てか追々に窓の下に群がり至り、老若總勢三十餘名口々に支那人だらう、朝鮮人だらう、いやキルギースだらうなどと、嘖々合ふが聞ゆ。請ふに任せて巻烟草二三本窓より投げ與ふれば、形勢忽ち一變して「日本人。日本人」と呼交して一同哄と打笑ふ。百姓と雖もなかく以て侮るべからず。

夜更けてチウスキー、プロスペクトの邊を歩けば、賣女の往來頗る繁きに驚くべし。或者はわざとすれすれに後より我を追越して過ぐ。或者は後より歩み來る人ありと尻目に見て、故らにぶらり〜と歩きて道を塞がんとす。或者は行違ひさま早口に何やらん物言ひかく。或者は人の顔を見て、さも馴々しげににたりと笑ふ。薄氣味の悪きこと甚だし。或夜我等

とシベリアを同行せる某君、宿に歸らんとて途を急ぐ折しも、彼方より夫とおぼしき三人連の女ひた〜と近づき來りたるが、おはや摺れ違はんとする刹那、ちろと某君の顔を見やりて、言ひも言ひたり、日本語にて「今晚は！」

西歐羅巴の旅券に、單に歐羅巴諸國とのみありては露國を含まず。若し露國に行かんとする時は、旅券の表に「歐洲及露國」と書き入るゝ由、某米人語りき。露國は歐羅巴の中に入らずと見ゆと其の人笑ふ。

冬宮の中を拜觀したる時、アレキサンドル二世が臨終の間といふがありき。室内の調度孰れも帝が臨終の折の儘に存しつとて、帝弒殺さるゝ時喫し居たる巻烟草の半ば吸ひさしたるをさへ、小さな硝子筒の中に保存しあり。室内の時計は恰も刺客の手に罹られたる時、はたと止りたるを其の儘にしつといふといふに、さては何時なりけんと思やれば、恰も三時

三十三分なり、成程之は運の悪い數なりけりと可笑し。

客舎閉册

ツアルヌコエ、セロを見に行さける時、汽車中にてヘーデカーの案内記を讀めるに、同所の名勝を擧げて、山林池沼宮殿堂宇など列へ立てたるが中に「廢墟」といふがあり。巡覽中就いて何の廢墟ぞと問へば、同行したる聯合通信社のツアノフ氏説明して曰ふ、廢墟とは自然の風致を添へんとて、故らに石垣や小屋の崩れかけたるものを作れるなりと。作るものに事を缺いて、わざ／＼破屋崩れ垣を作るとは物ずさにも程がある。

彼得堡に日露戰爭油畫展覽會といふがあり。さしたる名畫はなけれど、品の數はなかく多し。戦ひに勝ちたる日本には却つて之あるを聞かず。

彼得堡ばかり小うるさく酒手を取らるゝ所はなし。外套をぬがせ上靴を取り揃へ呉るゝ

にも、一椀の茶を茶店に啜らん折にも、博覽會などにて二つ三つ説明を求めても、宮城の内殿を案内せられても、必ず相當の酒手を握らすを法とす。我等が公使館を訪へる時、短劍を佩び勳章七八個を吊し、金光燦爛たる制服を着したる大の男、門内に立ち居たり。はつと驚いて恭しく脱帽すれば、側なる人打笑ひて、彼は公使の御者、歸りしなには十文か二十文かを取らせ玉へといふ。(四月七日露都イギリス、ホテル樓上にて)

露都より伯林

四月七日午後十時十五分、仙風兄及浦潮以來行を共にしたる武藤藤江勝野の三君に見送られて、ワルシヤウ停車場出發、伯林に向ふ。

僕と車室を同うしたるは三十ばかりの露西亞人。彼れ日本語を知らず我は露語を解せず、相對して黙坐するもの少時。彼れ僅に佛語を解す、此方も聊かながら之を知れり。乃ち談緒は手まね身ぶりを加へて先づ彼より開かる。其の語る所に據れば、彼の名はラルフソン、

露都より伯林

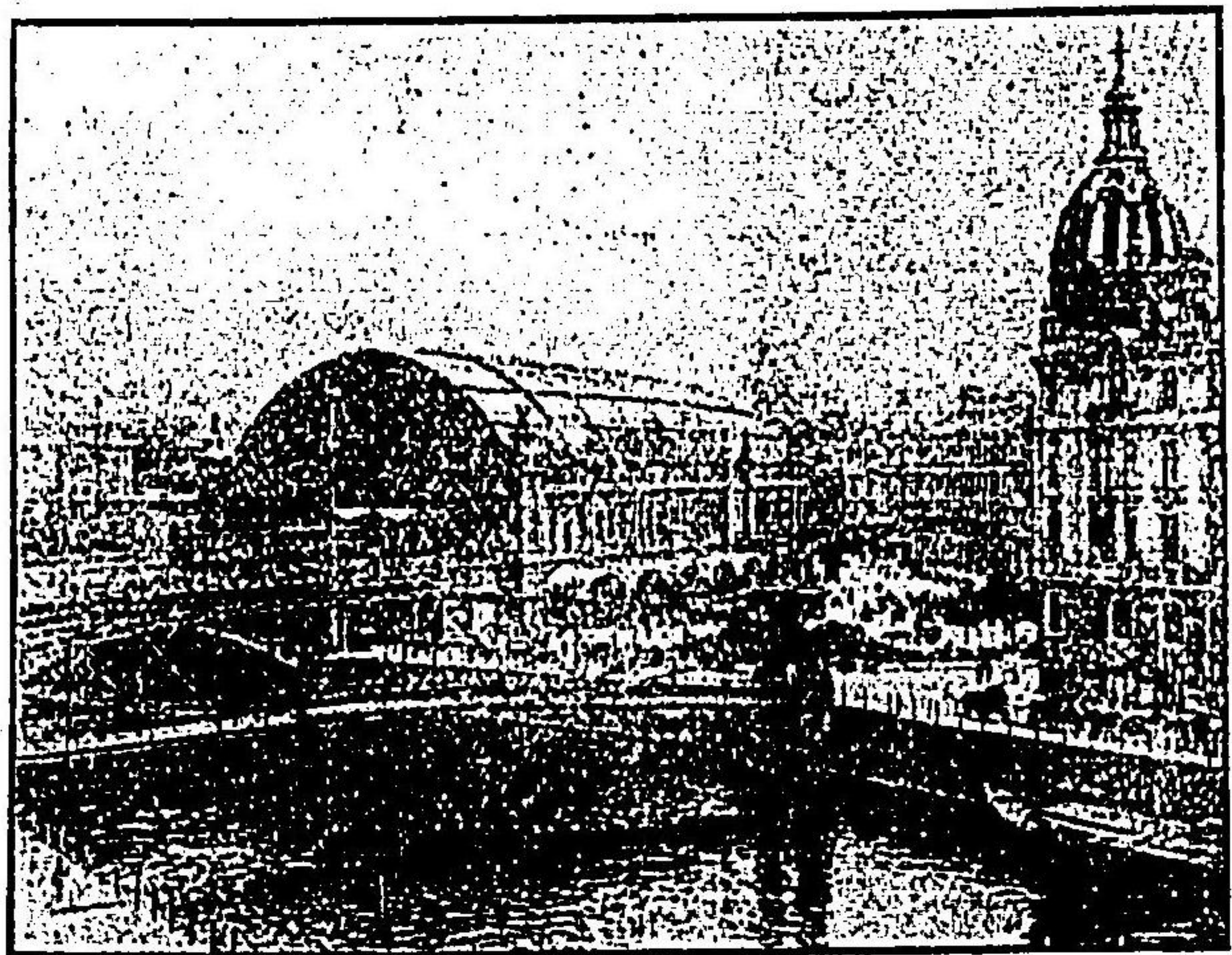
露都より伯林
彼得堡大學の一學生にして、兼ねて皮革の取引を業とす。今商用を帯びてライブチツヒに向ふといふ。

さて其の相識るに至りし迄の道中こそ可笑しかりけれ。彼れ初め突如として學生なりといふ。之れは苦もなく僕に通じたり。次で又突如としてボーといふ。僕は早速エドガー、ポーのこと、心得て、詩人かと問ひ返せば、彼れ腹を抱へて笑ふ。今度は彼れフォックスといふ。僕はジョン、フォックスなるべしと合點して、政治家なるべしといへば、彼又呵として笑ふ。彼れ沈思や、久しうして後、今度は手の甲の皮を少し摘み上げて、ラ、ボーといふ。成程之にて初めてボーは皮のことと分り、次で彼がネゴシヤンといふに及びて、初めて皮革商なること分明したり。彼が先づフォックスといへるは、故に英語を用ひて狐の皮や何かを賣買すとの意を示さんとしたるなり。之を詩人や政治家と心得て、したり顔に應答したりければこそ、彼は腹を抱へて笑ひつるなれ。側に人が見て居たらば如何に可笑しかりけんと思ひ出す毎に吹き出さる。

兎角の話に夜は深けて、臥床に入りしは十二時過なりき。其の夜はぐつすりとは寝込みて、翌八日目を覺せば早九時なり。昨夜仙風兄に急ぎ立てられて、夕餐の代りに茶一碗を喫したるのみなれば、空腹殆ど堪へ難し。食堂車はなし、さりとて無暗に停車場に出で、乗り後れては大變なり。ラルフソン君が起き出づるを待つて、スウエンチャヤニ停車場といふに下り立つ。停車場に十分。サンドウキツチ二片を頬張れば、早三四分は過ぎたり。茶を喫せんとするに、熱くして飲まされず。ヲ君斯くして飲めよと教ふるを見れば、茶を少しづつ皿に明けて飲むなり。成程と合點して、急ぎ飲み干して車に歸れば、入るが早いとする。と動き出づ。ヲ君は僕の荷物はしげなるを氣の毒とや見けん、脇詰やら、握飯のやうなガンモドキのやうな變な物やら、棗の砂糖漬やらを取り出して頻に侷め呉る。我輩戰勝國の民がと濟しても居られず、我を折つて頻に之を頂戴す。

十二時ウキルナ停車場に着す。プラットフォームにて六十許りのお婆さんに逢ふ。此の人ヲ君を介して僕を彼得堡にて識れりといふ。僕は一向知らぬといへど、お婆さん固く執つて

露都より伯林
 助かず。何でもかんでも知つて居るとて、其の以來僕の顔を見る毎に馴々しく物を言ひかけ、時には何やら冗々と辯じ立つ。僕には何の事やら一切分らず。君は此處にて茶を喫したる後、悠然として斬髮屋に入りて髪を剃る。僕雖氣となつて急ぎ立つれども、先生落ち着き拂つて、「余は露國の商事を知れり」とて肯かず。遂に危く乗り後れんとして助かる。四時半國境停車場に着して旅券の取調を受く。君は此處にて露貨の兩替にさんく手間取りたる後、又悠然として茶を喫すること例の如し。お婆さん追つかけて來りて話しかくることも亦例の如し。五時過此處を發し、五時十五分愈國境を通過して、獨領の國境停車場アイトクローネンに至る。此處にて獨逸の列車に乗り替ふ。露國のに比して車甚だ美なり。給仕と覺しきが間もなく入り來りて、何やらん言ふ。解らず。彼、佛語英語獨語露語其の外何語が分るかと問ふ。僕いまゝくして堪らず。日本語支那語朝鮮語亞刺比亞語及英語皆分ると答へてやる。乃ち其及び英語がお役に立つて、彼れ「食事が御入用ならば、何時にても御用に應ずべし」といひて去る。六時アイトクローネンを發す。道獨逸に入



伯林フリドリヒツ街停車場

りて、四圍の光景全く一變し、雪の地に布けるを見ず、地の耕さるるを見ず。而して一美人を見ず。流石に露西亞は美人の多き國なりき。之をヲ君に語れば、ヲ君も亦常に然思へりといふ。九日午前六時伯林に入る。青草滿地春雨蕭條たり。日本を出で、以來、斯く春めかしきを見ること之を初とす。フリードリツヒ、ストラツセに車を下り、ラルフソン君と例のお婆さんとに分れて、急ぎポツダム、ブラツツなる當ヘルビユー、ホテル樓上の一室に搭す。但し樓上の一室とのみにて、エレベートルで盲滅法界に案内せられたることゝ、未だ其の三階に居るのだから四階

露都より伯林

に居るのだから知らず(九日午前九時半伯林ベルビエー、ホテルにて)

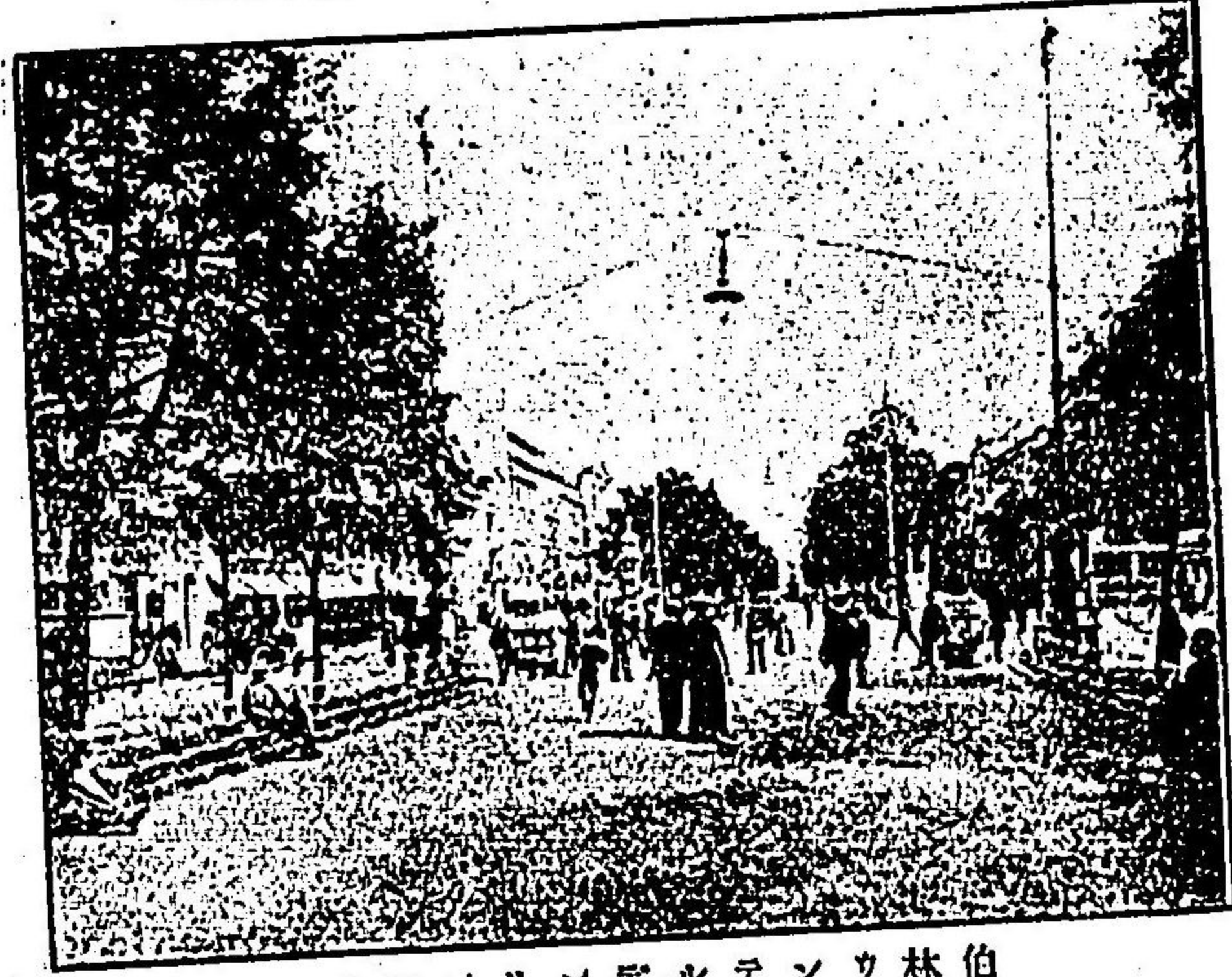
螢一つ蜘蛛の巣にかゝれり。かゝれるま
いに光れり。一日経て螢は死せり。死にた
るまゝに燐光れり。――七花八裂

● 伯林瞥見記

露都より伯林に來れば、次第にメソヂカルなる西歐羅巴の特色を見る。獨逸の汽車に乗れば、月の開閉は兎せよ、暖室機の調節は角せよと一々揭示しあり。停車場に下れば、何處をどう出て、何處で馬車を雇ふべきかといふと迄、細々と書き記しあり。若し夫れ停車場より馬車を驅らんとするに、客待中のものならば、必ず「フライ」と書きたる立札を掲ぐ。行先を斯くくと命すれば、其の命せられたる所に送り届けずんば已まず。賃金は例い自働装置に依りて、車輪の回転數に従ひ何馬克何片と乗客の目前に現はれ来る。賃金を支拂うて些の餘剩もあらば、車夫必ず釣銭を出す。之を、露國の馬車が確と行先も究めずして盲滅法界に驅け出し、賃金の受け渡し滅茶苦茶なるに比して、如何にも西洋らしきを覺ゆ。

伯林瞥見記

伯林暫見記



ンテソリソテルソウ林伯

皇居の拜觀の具合を見るに、自ら露西亞の塵揚なると獨逸の細きとは明瞭すべし。冬宮の貝物には、泥靴の儘にて板の間敷物の上を歩き回りて咎められず、案内者には人の代る毎に、見物人の手心次第にて如何程かの金を取らす。獨逸の皇居にありては、初めより拜觀料(?)として一人五十片宛を徴し、城内にては、一々羅紗製の上靴を貸し與ふ。見物終りて愈辭し去らんとする時、出口の壁に一宮城の吏員は訪客より一厘錢を受くるとを得ず。犯す者は解職すべし。『獨英佛の諸語にて揭示せられたるを見る。』

露獨の皇居の拜觀の手輕なると同じく、議會の傍聴も亦極めて手輕なり。露國にては、新聞記者として最上の傍聴席に入るを得たるも、門衛に旨を通ずるのみにて、傍聴券をも入場料をも要せずして傍聴するを得たり。僕が入れる時は、恰も保守黨のノルマン氏が演説中にて、引續き内務大臣の演説あり。ノ氏は演壇より聴衆を見下して、破鐘の如き聲を振ふ。大臣は大臣席より斜に向直り、肅々として語る。彼は猛烈に、此は森殿に、兩々互に劣らぬ快辯を闘はす。演説の態度音調、露西亞にも我邦にも一寸見られぬ所なり。

○ 一時間餘の傍聴にて僕の氣につきたると三つあり。一は速記者が床の下から出入することなり。之は日本の如くざわくと議席の脇を往來するよりも遙に優れり。二は議員や政府委員が他の演説を聞かんとて、次第に演壇の近邊に押しかけ行くことなり。之が爲後方の議席の如き全く人影を見ず、演壇の前後左右は黒山の如く人立圍むに至る。三は他人の

伯林暫見記

伯林管見記

演説に對し拍手すること殆どなき是なり。演説中評語を放ち、演説終りて後手を握りて其勞を憐み如きことはあれど、僕が傍聴中は、一回も拍手の聲を聞きたることなかりき。

四十

市中を歩するに、到る處現カイゼルの意氣の發露するを見る。曰く、チアガルテンの大道は陛下の御設計。曰く、フリードリッヒと街路の改築は陛下の御宿望。曰く、此の運河は陛下によりて何とかせられんとし、彼の鐵道は陛下によりて彼とかせられんとす。曰く、此は陛下の思召。彼は陛下のお好み。曰く何、曰く何。多能にして精勤なる現獨帝は、殆ど一切を維廉化せずんば已まざらんとするものに似たり。

一日宮城前をぶらつき歩けるに、恰も陛下が三五の騎兵と遠乗より還御せられんとするに會す。路傍觀る者堵の如し。陛下一々此に御會釋せられらる。城門に近づきたる頃、一輛の自動車疾風の如く駆け來る。おはや摺れ違はんとせる時、御者帽を脱して禮すれば、陛

下亦之に答禮せらる。念門に入らんとせる時、門脇に客待し居たる一馬車の御者、御者登の上より鞭を唇にあて、敬禮すれば、陛下顧みて、之にも丁寧に擧手の禮を施し玉ふ。

某の日之を某甲君に語る。某甲君の曰く、夫程のとは一向珍らしからず。余は夫にもましたる逸話を知れり。陛下は毎朝九時必ずチアガルテンを散歩せられらる。時には皇子達と共にし、時には皇后陛下と共にせらる。一日騎馬にて此處を通御ありしに、某家に召し使へる日本の女中、怪しき身扮して乳母車押しつゝ行き會ひ參

伯林ガアテナル



伯林管見記

伯林見聞記
四十二
らせ。我國ぶりに頭を下げしに、陛下馬上より打見やりて、快く之にも御答禮遊ばされぬ。
畏れ多きことなりきと、其の女の語りつ云々。

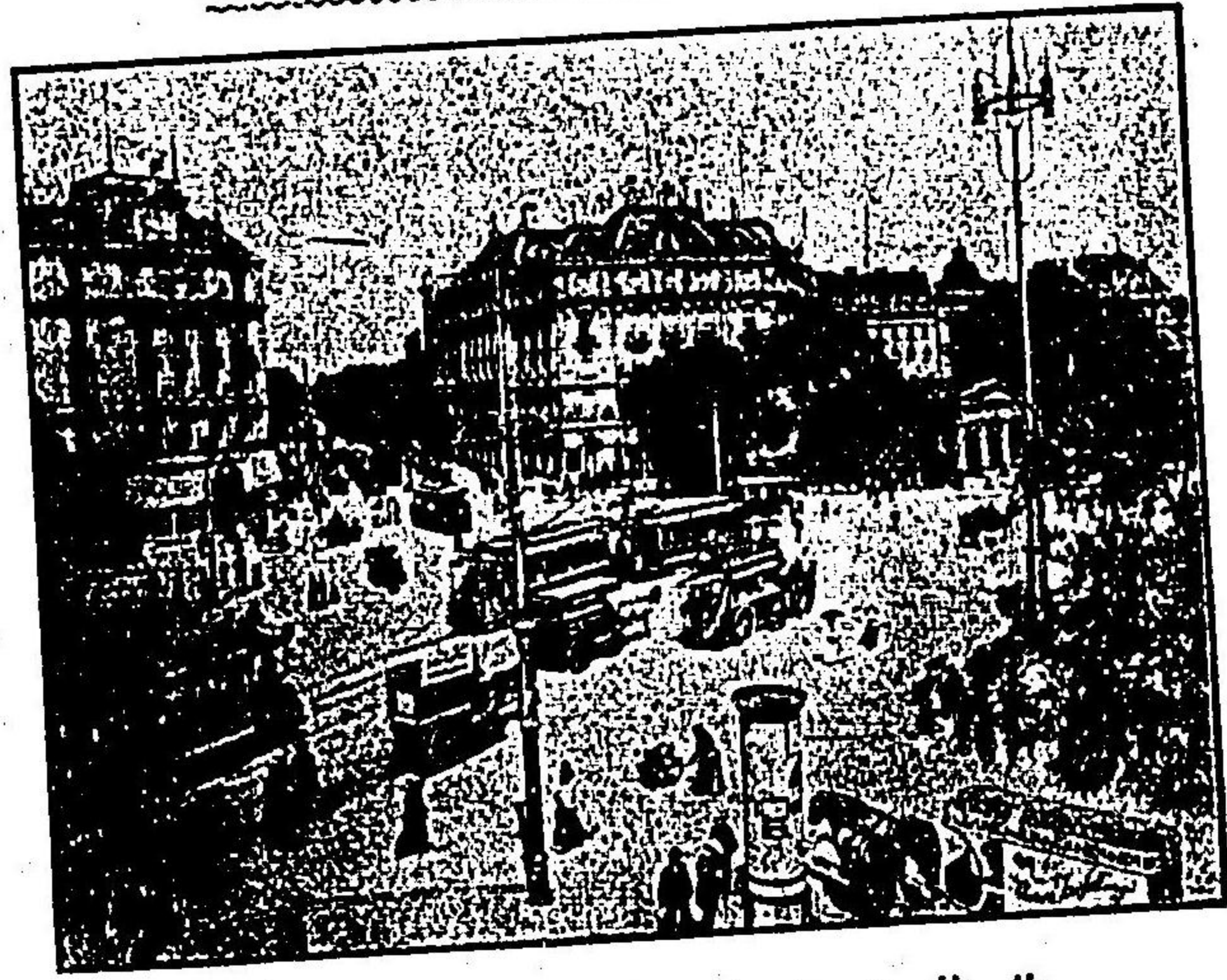
某乙君之を聞いて、笑つて曰く、斯く迄にし玉ひて、初めて民心を收めさせらるゝのみ。
我邦の様とは比ぶべくもあらずと。僕服せず。更に之を某丙君に語る。某丙君亦笑つて曰く、
知らずや、獨逸の法律には、不敬罪の規定苛細を極め、年々の犯人五六百に上れるをとと。

○
一日某とウンテル、デン、リンデンに歩いて、道行く人に道を問ふ。其人、君は日本人な
らずやとて、さも親しげに右手を某の肩にかけて、丁寧に道を教へ呉る。又一日チアガルテ
ンにてのとよりき。遊び居たる子供の、我等を見て支那人なりと囁き合へるがわりしが、
側に居たる一人の老女、叱りつくるやうに之に目加せして、さて何を語り出づるかと思立
つれば、曰く彼等は支那人に非ず。彼の勇敢なる日本人と(四月十三日伯林ベルビュー、ホテルにて)

● 伯林より巴里

伯林に日本俱樂部といふものあり。シエーターヘル河岸にさゝやかなる家を賃して會館
とし、圖書室 食堂 及 球突場を備ふ。會員 凡そ七十餘名。其の他荷も邦人の伯林に入
るものは、其の學生たると軍人たると商人たるとを問はず、必ず一たびは來りて此處に牛鍋
をつき、味噌汁を平らげざるなし。相見る十年の友の如く。談柄盡く我邦の事に係る。
僕の伯林に在るや、僕も亦履行いて、此に語り且つ食ふを樂みとせり。

四月十三日夕、僕伯林を發せんとするに先ち、行きて暇を相識れる諸兄に告ぐ。偶北
海道セメント會社の篠崎君、赤十字病院の吉本君、逓信省の廣部君、高等師範の佐々木君
柔道の大家大野君、伯林大學の東君等在り。皆留學生森竹某氏病危篤に陥り、命旦夕に迫
れるを語りて、悵然として憂色あり。森竹氏は八代海軍大佐の義弟にして、當年僅に廿二
歳、腸肺及喉頭の結核に罹り、今や到底救治の道なしといふ。八代大佐其の竟に救ふべから



伯林より巴里

伯 林 博 士 之 見 達

四十四

ざるを知りて、而かも看護扶養す時も之を忽緒に附せず。食餌は自り之を鹽梅し、便利盡く自ら之を司とる。其の勞を厭はず、費を吝せず。危きを恐れざることを、誰とて敬服せざるはなし。去る日斯道の大家某博士を招きて診を乞ふ。博士一診して後入院を勸む。大佐、入院せば治癒の見込あらんかと問ふ。博士曰く、治癒の見込に至つては全くなし。唯之を家に留めて、病を貴下に傳へんことを恐るゝのみと。大佐艶然色を作して曰く、余既に一たび誓つて看護の任に當る、唯其任を盡さざらんことを恐れて、未だ曾て死を怖れずと。遂に應

せず。

午後九時半、敦賀以來一たび分れて又會したる加藤ドクトル、「東亞」の老川君及東君に送られて、ポツダム停車場より發車す。室を同じうせるは一獨逸人。彼れ始めより終りまで一語を交へずして寝ぬ。翌旦七時コールン驛にて車を代へ、午前九時五十分國境に出でて白耳義に入る。白耳義に入れば、時計は逆に引つくり返つて九時十分となる。日本の時計はと見れば、正に午後五時二十分也。白耳義に入りてより、沿道の光景頗に春めかしきを加へ、汽車は青山清泉の間を縫うて走る。細流に釣を垂るゝあり。芝生にはらばふあり。馬に飲かふあり。羊を牧するあり。間々桃花の盛に開けるを見る。十二時四十分佛蘭西に入り、ジューモン停車場にて手荷物の検査を受くるに、田舎の小役人は、何處も變らぬ小面倒を申して、僕が露西亞より貰ひ來れる一斤餘の茶に、二フラン六十文の税を課せんとす。僕大に怒りて、茶を床上に抛ち去れば、税關の使丁あたふた拾ひ集めて、之を持ち歸る。

伯林より巴里

伯林より巴里
佛國に入りて、汽車疾きこと矢の如し。國境より巴里までの間、停車僅に一回。午後四時巴里に着す。馬車を驅つてホテルに向へば、細雨霏々として、路傍の樹木綠葉萎々たり。嬉し、甚だ嬉し(四月十四日夜巴里ノルマンサー、ホテルにて)

元日の朝門を出でしに、行き逢ひし乞食一人、今日は新しき襦袢をぞかぶりたる。此處にし春はありけらし、——七花八裂

●巴里日記

四月十四日夕巴里に入る。夜オペラ通りを歩けば、人を赤毛布と見てか、云々の所に案内せんといふもの、頻りにうるさく附纏ひ来る。巴里ならでは世界中何處に行かるとも見るとを得ざるもの、候ふぞと申す。何處にもあらんほどのものを見比べんぞこそ思へ、此處のみにて見得べきものを見るの要ありなんやとて断わる。

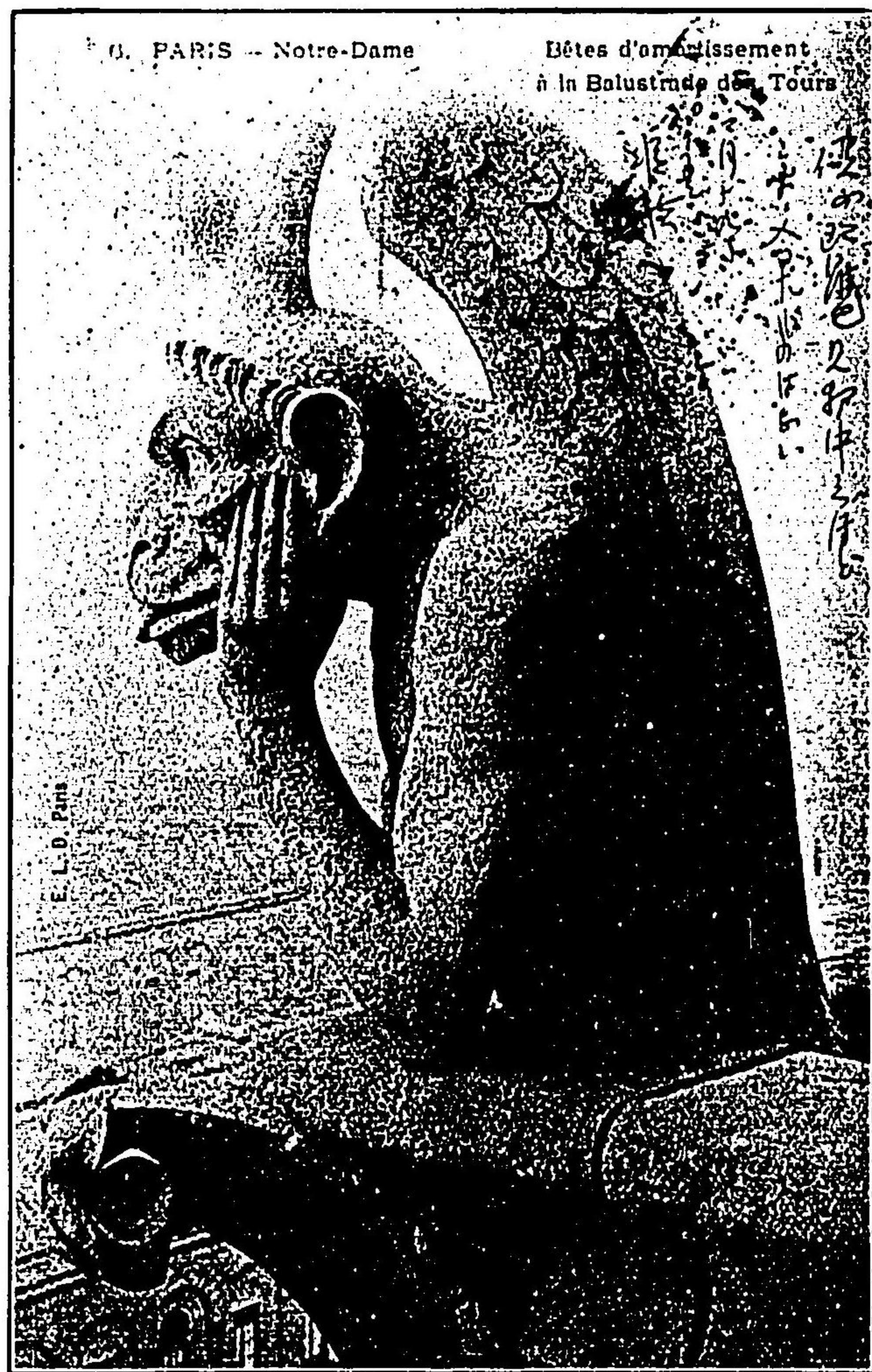
十五日夕、日佛協會の晩餐會に列すべき時刻迫れるに、昨日火災につかはしたる夜會服未だ着せず。疾くせよと宿の男を促せば、やがて洋服屋の女なるべし、年頃二十ばかりの、鄙びたるながらに美はしきが、急ぎ入り來りて頻りに打訖ぶ。見れば五階の梯子を駆け上りたることとて、息もたえなくなり。其の時は、ふと二千年前羅馬の尙盛なりし頃を想ひ出で、試みに其の頃の羅馬人の身になつて、此の場の様を畫き見る。——わだめきたる羅甸の美人が首を伏して打訖ぶるところ、黄色の日本人が、眼を瞋らして其の側に突ッ立ちたる

姿の嗚呼何等見當のつかぬ取り合せなりけん。

十六日の夕、凱旋門の邊を歩し、ぐるりと門を一回りして、元の道に歸らんとするに、行けども、元のシャンゼリゼーに出でず。程經て、一回りしたりと思ひしは半分回りし間違なりしを知りて、再び凱旋門に立ち歸りて、此度は、能く、門の正面を見極めて、大通りに下る。斯くて行くこと二哩ばかりにして人に問へば、飛でもない、夫は門の後より正面に來玉ひしなるべしとのことに、又悄悄と元の道に引き返す。兎角の往復に時を費すこと約四時間、宿に歸れば食堂は既に閉ぢたり。

十七日、エッフェル塔に登る。何さま一千尺の高さにするくと釣り上げられ行く心地、いはん方なく變なものなり。お菊や高尾や乃至鮎鯉を、こんな所で釣り斬りにしたならば奇抜なるべしなど思ひつく。

十八日、ノートル、ダムを觀る。何よりも我が氣に入りたるは、例のバルコニーの裝飾に使へる奇怪の動物の彫刻なり。大猿の如き奴が、頬杖をつきてペロリと舌を出したる



飾装の椽塔のムダルトーノ

姿。嗚呼何等見當のつかぬ取り合せなりけん。

十六日の夕、凱旋門の邊を歩し、ぐるりと門を一回りして、元の道に歸らんとするに、行けども元のシャンゼリゼーに出でず。程經て、一回りしたりと思ひしは半分回りし間違なりしを知りて、再び凱旋門に立ち歸りて、此度は、能く門の正面を見極めて、大通りに下る。斯くて行くこと二哩ばかりにして人に問へば、飛でもない、夫は門の後より正面に來玉ひしなるべしとのことに、又悄悄と元の道に引き返す。兎角の往復に時を費すこと約四時間、宿に歸れば食堂は既に閉ぢたり。

十七日、エツフェール塔に登る。何さ一千里の高さにするくと釣り上げられ行く心地、いはん方なく變なものなり。お菊や高尾や乃至鯨鯨を、こんな所で釣り斬りにしたならば奇抜なるべしなど思ひつく。

十八日、ノートル、ダムを觀る。何よりも我が氣に入りたるは、例のバルコニーの裝飾に使へる奇怪の動物の彫刻なり。大猿の如き奴が、杖をつきてペロリと舌を出したる



飾装の椽塔のムダルトーノ

最もよし。斯いふ人を馬鹿にしたる面つきの者が、高さ何百尺といふところから、巴里の全市を見下し居るといふは、如何にも僕の理想に合へり。

十九日の夜、グランド、オペラを見る。或人問うて曰く、君は筋も知らず、言葉も分らずに居て、夫でオペラが面白かるべきかと。僕答へて曰く、筋も言葉も分らねばこそ、耳目の樂みはわれ。何もかも理屈が分つては、面白からんやうなし。僕は成程と感心せんとして、オペラには行き申さずと。

二十日、伏見宮御附の岩井ドクトルと語る。ドクトルは、豫て婦人の副乳に關して專攻したる人なり。副乳を有する婦人は、概して妊娠すること多く、殊に三十歳前後、屢雙生兒を生むことあり、一體に精神痴鈍にして、且つ肺結核に罹りて死ぬる者多しなど、縁喜でもないことを、さんく聞かせらる。僕の奥様も亦憚りながら副乳を有し居るなり。

二十一日ナポレオンの墓に詣つ。杖を預けよといふ。預けに行けば、老女受け取りて、有り難しと禮をいふ。金ならば知らず、人の物を預かりて禮をいはんこと、我邦にはなき

所なるべし。

二十二日、巴里の用も終りたればとて、正午此處を出立して、倫敦に向ふ。沿道櫻花咲き亂れて雪の如し。八時ビクトリア停車場に着す。(四月廿三日倫敦ホテル、ビクトリアにて)

飢ゑずんば食はず。渴せずんば飲まず。思はずんば行はず。信ぜずんば語らず。憤らずんば打たず。懣ひずんば萎らず。悲しむらずんば泣かず。おかしからずんば笑はず。我は我が性に従ふを知る、人の性を迎ふるを知らず。——七花八裂

本
記
英

露 國 佛

巴里日記

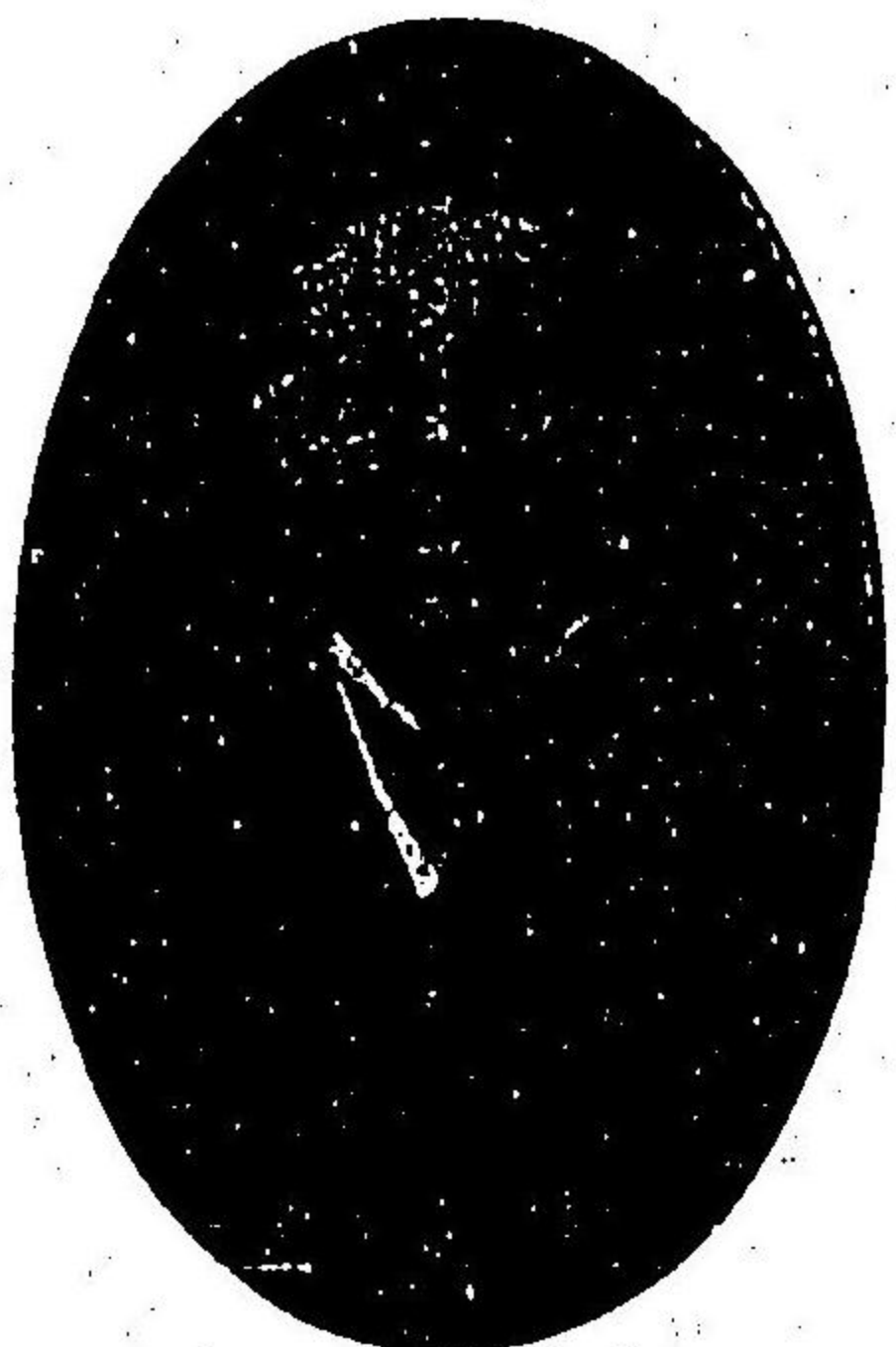
所なるべし。

二十二日、巴里の用も終りたればとて、正午此處を出立して、倫敦に向ふ。沿道櫻花咲き亂れて雪の如し。八時ビクトリア停車場に着す。(四月廿三日倫敦ホテル、ビクトリアにて)

飢ゑすんば食はず。渴せすんば飲まず。思はずんば行はず。借ぜすんば請らず。慣らずんば打たず。感ひずんば契らず。悲しからずんば泣かず。おかしからずんば笑はず。我は我が性に従ふを知る、人の性を迎ふるを知らず。——七花八裂

隨輿記

●大使宮を迎ふ



ブレイン君

「タイムス」のブレイン君に伴はれて、五月六日午後五時我遺英大使宮殿下の御來着を迎へまつらんとて、ピクトリア停車場に向ふ。さしも慍せく降り續きたる五月雨の、今日ばかりは僅かに霽れて、往きかふ人の面ざしや、春めきて見ゆるぞ目出度き。同盟國の貴賓を迎へんする思は同じ人

人の、皆同じ方へと指し急げは、左なきだに忙しきピクトリア街の人通り、雲霞の如しといはんもなかく愚なり。

大使宮を迎ふ

やう／＼に人をかき分けて停車場に入れば、御召の列車が着くべきプラットホームには、燃ゆるばかりの猩々緋の毛氈を敷き詰め、それが中央に之も同じく猩々緋の色さやかなるを一面に打覆ひて埒を作り、此處を殿下が御少憩の場に充てたり。向つて右の方を内外貴賓の席とし、左の方には、近衛歩兵の愛蘭聯隊第一大隊立てり。例の目さむるばかりの緋羅紗の軍服美はしく、天目の大きやかなるを戴きたらん如き毛冠帽、列を正して長幹轟然矢の如く突ツ立ちたる様、莊麗いふべくもあらず。應て御出迎の人々追々に走せ參じて、埒の内外は燦爛たる金銀の光紅紫の色に充ち満ち、皇族方には、コンノート大公、及前年我邦に渡らせられし同若宮を始め、クリスチアン親王、アーガイル公、フワイフ公など、或は元帥服のいかめしき、或はガーター勳章の鮮かなる、何れを何れとも見分かず。名ある高官には、首相バナマン氏を初め、元帥ロバーツ、提督シーモア、内相グラッドストーン、外相グレイ、其外我邦の大使館員、陸海軍將校、今日を晴と装ひて控へたる中に、駐日大使マクドナルド氏の長軀の頻りに奔走せるを見たるは、何とやらん近々しく親し

げに見られぬ。

程なく嚙曉たる樂聲「わが大君に幸われかし」の英國々歌を奏で出づ。ブレイン君、こは英國皇帝の御代理として、皇太子殿下の臨ませらるゝを迎ふるなりといふ。伸び上れども見えず。ブ君埒の外に出でよといふ。埒の邊には、警吏立ち添ひて、一人々々を誰何せり。ブ君囁きていふ、警吏が立てる間を、傲然として胸目もふらず通り抜けて出でよと。斯くして漸く埒の外に出づれば、皇太子殿下の、今しも首相と手を握らせらるゝを見上げ參らす。海軍服に身を固めて、此日は特に紅藍の色相交りたる我菊花大綬章を佩ばせ玉へる、痛く人目をひきて見えたり。

午後五時五十分「君が代」の奏樂朗々として吹き起ると等しく、我大使宮殿下が御召の列車は、肅々としてプラットホームに入り来る。殿下の列車を出でさせらるゝや、英國皇太子殿下、先づ之を迎へられ、次で列み居たる各皇族に御引合せあり。引續きて、各國高等官は夫々殿下の前に紹介せらる。殿下は、陸軍大將服に菊花大綬章を佩ばせられ、莞爾やかに

大使官の迎ふ

五十四

一々御會釋あり。一同との御挨拶終りて後、長崎宮中顧問官、山本、西兩大將其他の隨員を従へて、儀仗の兵員が立てる周圍を一巡せられ、直ちに此處を出で、皇太子と御同乘にて、バツキングダム宮に英國皇帝を訪はせ玉ふ。

プ君又もや余が手を把りて、さも心得顔に宛ある事務室を小安げに通じ抜けて、停車場の入口に出づ。此處には、親衛騎兵の一隊、銀光まばゆき胸甲を帯び、白毛のクリニエール長く垂れたる金甲を戴き、三尺餘の長劔を引抜きたるまゝ、肩にして、色列正しき粟毛の馬に手綱を控へて立てるを見る。前驅先走り出づ。第一の馬車には、わが殿下と皇太子コンノ一ト兩宮御同乘あり。次の馬車には、小村大使、山本大將、ロバーツ元帥同乘し、其次には西大將、長崎宮中顧問官、シーチア提督と同乘し、隨行の各員は、夫々四輛の馬車に分乗す。やがて輻輳たる轡の音と共に、一同停車場を軋り出づれば、路傍觀る者堵の如く、フーレーの聲に打交りて、「バンザイ」の歡聲を唱ふるものさへあるを聞さつ。

プレンイン君、又余が手を曳きて、群衆を押し分けて、殿下が殿后に充てたるヨーク、ハ

ウスの前に出づ。ヨーク、ハウスは、ヨーク公の舊居。今の皇太子の尙ヨーク公と稱せられし頃住はせ玉ひし所なり。待つこと半時ばかりにして、殿下の御一行バツキングダム宮の御對面を了りて、此處に入らせらる、又待つこと半時ばかりにして、英國國歌の吹奏に迎へられて、英國皇帝エドワード七世陛下御答禮にとて此處に臨ませらる。寫し繪にのみ見上げさせたるを、今日はしも目のあたりに見上げまひらすれば、陛下大元帥の御装ひゆたかに着なして、莞爾やかに打笑ませ玉ひ、一々手を舉げて、兩側に居列ぶ人草の歡呼に答へさせらる、様、誠に温平として玉の如し。斯くて待つこと又半時にして、御答訪事なく終りて立ち出で玉ふに、我等も何時までありなんやと、厚くプレンイン君に謝して、分れて歸りぬ。——平和の神の御子達の、遠く西東に分れ居玉ひたるが、今しも、めぐり合ひて手を握らせ玉ひつ。(五月六日倫敦南ケンシントンの客會にて)

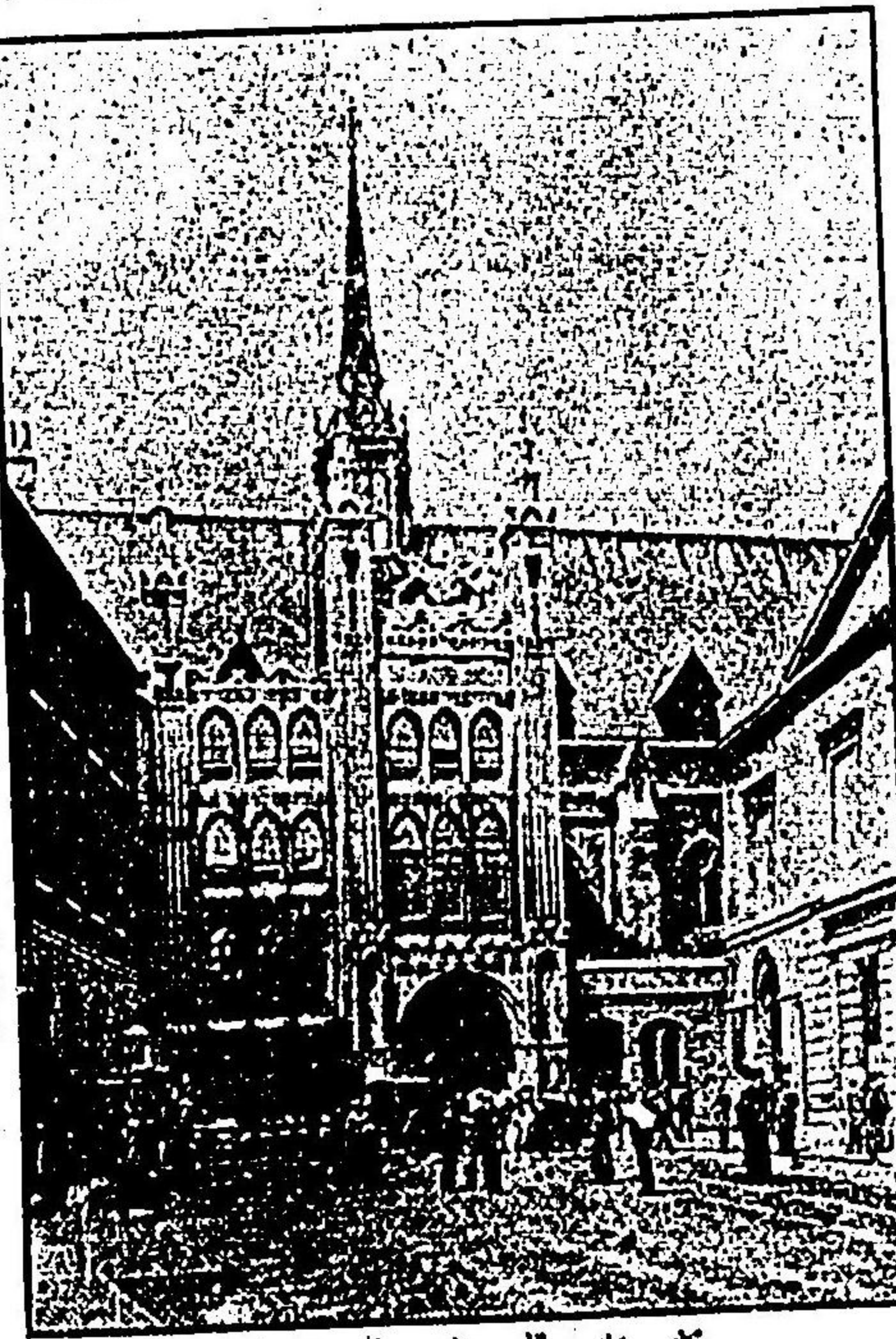
●倫敦市の歡迎

倫敦市の歡迎

五十五

倫敦市の歡迎

今日は倫敦市が我伏見宮殿下を招じて、歡迎の辭を捧呈すべき日なればとて、又もや「タイムス」のブレイン君を案内に煩らはして、共に式場なるギルドホールに向ふ。チープサイドより、キング、ストリート



ギルドホール

の椅子儼かに安せられ、古風なる毛皮裏のマザリン、ガウン着たる市會議員の、細長き

ワンドを杖つきて、彼方此方に奔走するを見る。追々に走せ參する來賓、彼方に一席を占め、此方に二席を塞ぎて、十二時過ぐる頃には、はや薙々と階上階下に遍ねし。

十二時二十分、數聲の喇叭唳々として響き渡れば、樂手を先頭として、市會議長及市參事會員之に次ぎ、市長及市長夫人、徐に列を正して入り來る。市長の前には、メースを持てるものと、長劔を捧ぐる者と立てり。正義と權威とを表するなりと、ブレイン君語る。市長は金色燦爛たる大のガウンを被り、菱形したる黒毛の帽子を戴けり。其様いとゆゝし。市長が設けの席に就くと同時に、主なる内外の來賓が名を讀み上げぬ。讀み上げられたるものは、一人く、市長の側に進みて、之と手を握りたる後其側に立つ。兩側に居列ぶ者は、拍手して過ぎ行く人々を見送る。

嗚呼、其の肅々として、市長の前に歩み寄る人々の装ひの、目ぐるしき迄に様々なるを見ずや。さらびやかなるは、金銀の光燦として人の目を射り、わざわざけさは、紅紫の色とり五彩も管ならず。長劔憂々として、地に曳くあり。高冠兀として、天に沖するあり。昂

倫敦市の歡迎

々然たるあり。懽々焉たるあり。英姿颯爽たるノーエル大將來ると見れば、温容重顔仙に似たる美術家アルマタデマ君至り、伊集院大使館參事官の金モール美はしき我大禮服を送れば、瀟洒たる貴公子ソールズベリー侯爵を迎へ、キネアド卿が天鵝絨のガウンに白色の髪、外務大臣サー、エドワード、グレーが僅に金色を彩どりたる黒の上着に細身の劔、坂田總領事の色白く若やかなる、アームストロング卿の顔赤らかに足の艱める、市書記が眞紅のは杉、クキンス、ウエストミンスター義勇隊隊長が金銀を飾れる鼠色の軍服、敵や百花研を競ひ、日月光を争ふとは、斯る事にもやと見てある程に、我東京駐劄英國大使サー、クロード、マクドナルドの名高らかに讀み上げらる。偕こそとふり返れば、之は又思ひ切つたるものかな、先生此日の扮装は、其昔勤めたりける蘇格蘭隊大佐の軍装とて、膝にも達すべき毛織のタータンを、左の肩よりすらりとぶら下げ、凡そ二寸四方もあるべき大格子縞の模様ついたる暗緑色のズボンを穿ち、目さむる許り色さやかなる我旭日大綬章をを佩びたりける。引續いて、カンタベリーの大僧正、地を這ふばかりの狸々排の大ガウ

ンに、純白雪の如き兩袖ついたるを着なして、徐々と入り来る。之より後、尙幾多の人の入り來りけん、今一々には記えず。兎角するほどに、件の上段の一區は、市長を中にして金銀紅白、十重二十重に取り圍み、見上ぐる穹隆形の天井を脊にして、左ながら一幕の活人畫を見るに似たり。デオシー君、ひた／＼と近づき來て、余に囁きて曰ふ、見よ、是れ全く生きたる人名辭書の口畫と。

一時十五分、市長以下市吏員に迎へられて、英國皇太子殿下、コンノート大公及アーサー親王と共に臨ませらる。程なく、樂隊の「君が代」を奏するを聞く。一同すはとばかりに立ち上れば、市長、市會議長、參事會員其他市吏員、皆ホールの玄關に出で、我大使宮殿下を出で迎ふ。斯くて喇叭手を先頭として、市吏員一同之に次ぎ、殿下の隨員を中に、皇太子殿下、コンノート兩親王を次に、例の長劔とメースとを左右にして倫敦市長、之に導かれて、伏見宮殿下御入りあり。殿下は陸軍大將の正装に、バスの大十字章をぞ召されたる。此行列の高壇に進み行く間、ホールの左隅に屯し居たるヨーク公陸軍幼年學校の少年

倫敦市の歡迎

一齊に日本語にて「君が代」を唱ふ。律呂相諧ひて、外人の聲とも覺えず。行列盡く高壇の上は登りて、夫々の席に立てる頃を見計らひ、市書記歡迎の辭捧呈の決議を朗讀し、記録長、尺餘の黄金の函に收めたる歡迎の辭を朗讀す。其全文左の如し。

伏見宮殿下に白す。

我等倫敦市長、助役及市會議員は、殿下が我が敬愛せる君主の最も顯貴なる同盟國たる日本天皇陛下の代表者として、當國に來朝せられたるを機とし、此に誠實なる歡迎の意を殿下に表す。

貴國の勢力が、迅速に増進して、僅々一代の間に能く世界列國の間に第一流の地位を占むるに至りたるを見たるは、倫敦市民の均しく快とする所なり。

貴國の帝室は、二千五百餘年一系の帝統を繼ぎ、貴國の人民は、今日科學文學美術及武道に於て、天下に秀でたり。

我等は、強大なる文化遍き、一帝國の代表者として、殿下を歡迎す。世界の商業的首府

の市民として、我等は、我等が敬愛せる國君と、殿下の顯貴なる皇帝との間に締結せられたる同盟が、亞細亞の文明と世界の平和とを進むるに足るべきを思ひて、歡喜に堪へず。今の此古きギルドホールは、從來幾多の莊嚴なる式典を擧げたりと雖も、未だ曾て東西の結合を表し、文明の勝利及二大國民の政治家の賢明と明察とを證すると、今回の如く重大なるを見ず。

終りに臨み、殿下の大なる、高尚なる、國民の勇氣と忠愛とに對して、滿腔の敬意を有せる倫敦市民は、日本皇帝が長へに幸福繁榮に在さんことを切望せる旨を、明かにせんと欲す。

余が譯文は拙しと雖も、大要其の意に於て誤りなきを信す。斯くて、殿下は此の歡迎の辭を納められて後、陸奧大使館書記官をして、左の英文答辭を朗讀せしめらる。曰く、

市長及諸君。余及余が齎せる使命に對して、然く鄭重なる歡待を受くるは、余の深

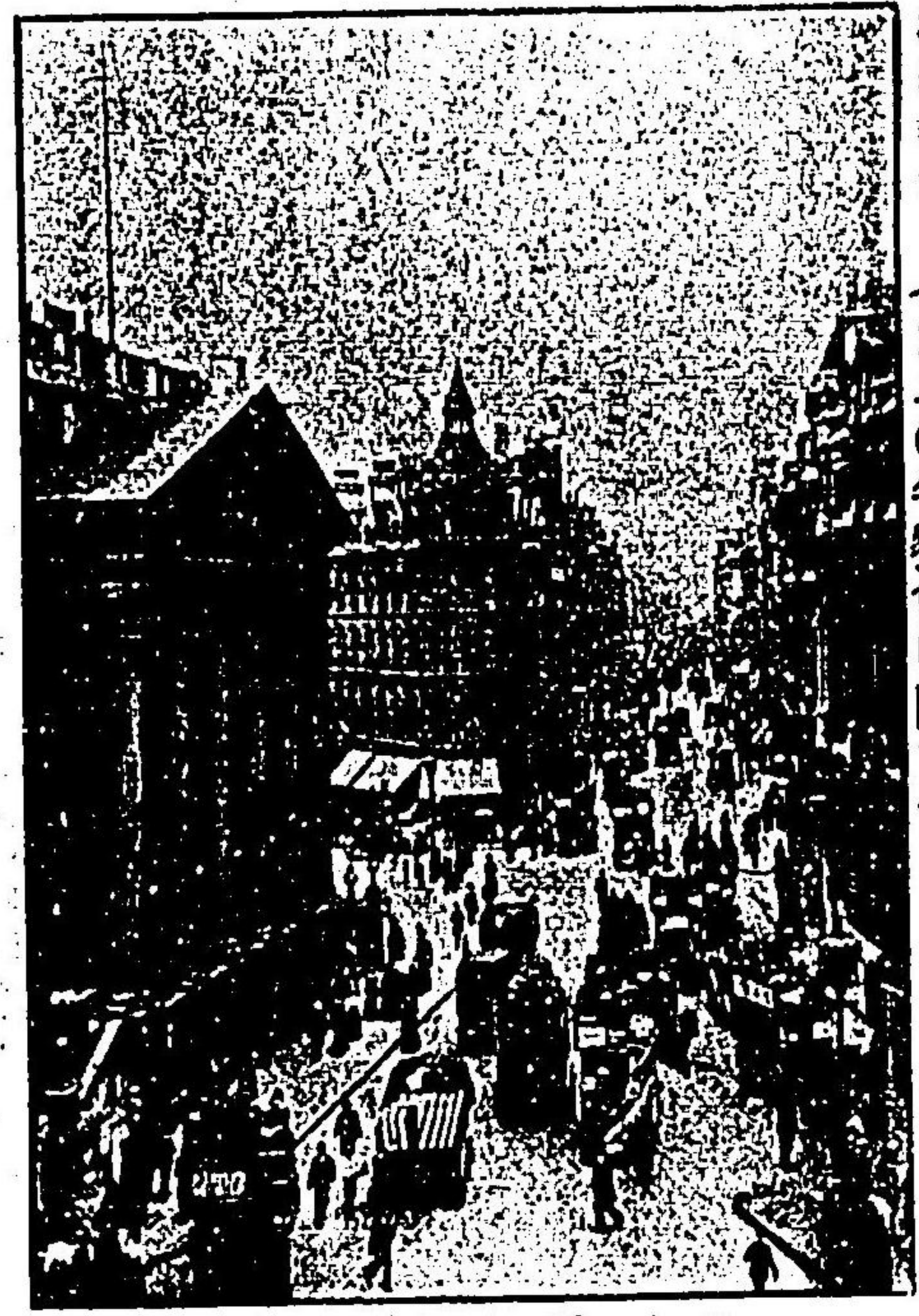
倫敦市の歡迎

市長及諸君に謝せざるべからざる所なり。
 又余は、然く幸に此の強大なる國民と同盟を結ぶに至れる余が本國に對して、歡迎辭中に表せられたる深厚寛温の情に、余が謝意を表せざるべからず。
 過去幾歲、此の崇高なる式場が、屢々著名なる外客歡迎の場たりし由は、余の今聞くを得たる所。而して、余が實に日本の使節中、初めて此と同一の名譽を得たる者なることを誇らんとす。

余が、此の宏大なる都市の大を證しつべき此大首府の中心に来れるは、余の特に快とする所にして、美なる金匱、及之が收めたる高貴の品は、實に余が來朝の好紀念物たるのみならず、又永く我家の珍寶たるべし。

此に、再び、諸君が余に加へたる光榮を謝するに當り、希くは、余をして、更に之に、倫敦市の福祉及長久の繁榮を切望するの意を附加せしめよ。(大喝采)
 右終りて後、歡迎の辭の發議より、決議に至れる迄の形式を演じ、之にて式全く結了し

殿下は、隨員と共に、前の行列に送られて、肅々として此處を出で、更に市長官舎なるマンション、ハウスの午餐會に臨ませらる。



マンション、ハウスは、ギルドホールと相距ると一丁許、辛く其間の雜沓を切り抜けて之に入れば、宴會場は、卓子を八列にして、二百七十餘の客席を設けたり。珍珠山の如く、美酒泉に似たり。宴は二時に初まり、四時に至る。宴中、市長の發聲にて、日英

兩國皇帝の爲に祝杯を擧ぐ。宴終りて、殿下隨員と共に此處を辭せられたる後、人皆ラウ

觀兵式を観ざる記
六十四
ンヂに集りて、快談湧くが如し。久々にて、ノーニル大將と相見て、手を握りて、前年の
ダイアデム艦上の會見を語る。デオシー君、様々の人に、余を紹介して、一々「有名なる」
を浴せかく。「大阪毎日」のモリス君と初めて相見しに、「公には勁敵なる由なれど私には
何分宜しく」など戯る。ブレイン君に紹介せられて、前市長ヂムスデル卿と見る。卿に
紹介せられて、又現市長と挨拶す。市長は今日の盛式の滞りなかりしを語りて、喜色面に
溢れたり。

五時ブレイン君と共に「タイムス」社に歸る。行人皆目を時て、余が顔を見て、何やらん
囁き合ふ。今日といふ今日、日本人の珍重せらるゝこと一通りならず。快甚だし。

(五月十日夜倫敦客舎にて)

●觀兵式を観ざる記

起き出で、見れば、細雨簌々として、烟の如し。今日は、わが伏見宮殿下の爲に、英國
皇帝親ら兵をオルダーショットに觀玉ふべき日なり。僕は實に如何にすべきかに迷へり。

謂ふこと勿れ、是れ私事を語るものとの。僕はわが同盟國の同業及官憲が、如何に一介
の記者を無禮優待しなすかを、廣く我が國民に報せんが爲に、姑らく其の僕が迷へる所以
を略敘せざるべからず。初めオスターショット觀兵式の舉るるを聞くと、僕は再三其參列
券を得んことを、我が大使館に懇請したり。不幸にして、わが大使館は、「一切の野馬馬」
を拒絶せざる考へとかにて、一向取り合ひ呉るゝ様子なし。僕乃ち、一日、之を「メンダラ
ス」のロートン君に語る。ロ君又「トリビニーシ」の大席主筆なる其の兄に語る。兄なるロー
トン君、之を以て、以ての外のこととして、僕に知らせずして、直に書を陸軍省に送り、
直接に僕が爲に式の參列券を求め呉れたり。越えて數日、陸軍大臣秘書官クワイデー氏
は僕に宛て、懇到なる案内状を送り、單に僕の爲に特別の拜觀席を設けられたるのみな
らず、何時何處發の特發汽車に乗らば、僕の爲に一席を作りおくべく、何處に下りて、何
の切符を示せば、僕は滞りなく馬車にて式場を送らるべく、而して式場に至らば、何某大

觀兵式を見ざる記

六十五

佐僕を出迎へて、一切の世話を焼くべしなど、細々しき注意を與へ、之に添ふるに、汽車の時間表、式場の圖面、注意事項の印刷物、其の他の必要なる敷葉の切符を封送せられたり。僕は、其の注意の至れり盡せるに殆ど感泣せり。然るに、昨日に至り、わが親愛なる「タイムス」の主筆は、急使を飛ばして、僕に一書を寄せ、今日の觀兵式には、「タイムス」より例の有名なるジエームス大尉特派員として出張し、僕の爲に一切の面倒を見るべき手筈を整へおきたれば、午前十時迄に、オルダーショットなる常置通信員フーパー大尉の宅に落ち合ふべしとあり。尙、實は、倫敦より大尉を同行せしむべき筈なりしを、誤つて大尉の先發したるは、遺憾なれど、フーパー大尉の宅は、極めて分り易き所なれば、格別見出し難きとはおらざるべしと書き添へ、其の停車場よりの道順及距離を示し、能々町名の發音をまで之に加へあり。劇務匆忙の際、此の注意を加へ来るを見るに至りては、僕豈に再び感泣せざるを得んや。僕は實に、何れの道を取るべきかに迷へり。

僕遂に意を決して、陸軍省の九時十八分發特發列車を棄て、八時半の普通列車に乗じて、

オルダーショットに向へり。若後、直にフーパー大尉を訪へば、ジエームス大尉待構へて、今しも停車場迄出迎へに行くべき相談中なりといふ。さりとて、僕の汽車の到着時間を、如何して知り玉へると問へば、大尉は、昨夜二通の電報を接手したるに由るといふ。僕は實に、此の電報を見るに及びて、感泣といふよりも、寧ろ吃驚したり。一通は陸軍大臣秘書官より「タイムス」社に宛てたるものにして、其の文に曰く、當省にては、貴社の特派員が、明日オルダーショットに、日本特派員杉村氏を同行すべき由、聞知せり。余は同特派員の爲に、一切の手筈を整へおきたれば、貴社の特派員にも、同一の待遇を與ふべきか云云。今一通は「タイムス」社よりジエームス大尉に宛てたるものにして、其の文に曰く、東京朝日新聞特派通信員杉村氏の爲めに、凡そ貴下の力に能ふべき限りの好意を表せらるべし。同氏の倫敦宿所は、某々の地と。陸軍省が、如何にして、僕のジエームス大尉と同行すべきを聞知したるか。誠に吃驚の外なくんばあらず。

斯くて、此處にて朝餐を喫し、三人打連れて、觀兵式場に向ふ。細雨尙霏々たり。停

六十八

車場前にて、陸軍省の馬車に搭せんとすれば「殿下が「朝日」の特派員なりや」とて、係りの士官懇切に世話せらる。豫め内訓の届き居たるものに似たり。馬車式場に近づくに従ひ、雨全く霽れて、來觀の士女絡繹として續るが如し。式場に入るに及びて、僕の所謂特別席はと見れば、玉座の真下なる廣場に、一脚の卓子を、わざ／＼僕一人の爲に備へ呉れたるなり。斯くして、僕は英國の新聞記者ども、享受し得ざる特權を付與せられたるなり。不幸にして、此の日の觀兵式は中止となりたれど、僕は此の手厚き待遇に満足して、聊かも失望することなくして、此處を引上げたり。歸途兩大尉と午餐を共にして、日暮れなんとする頃、倫敦に歸る。(五月九日夜倫敦客舎にて)

● ポーツマス

余は、合戦艦ドレッドノートの甲板に在り。

六十九

宮殿下ポーツマス御成の日に先づこと二日、余は頼み難き人を頼まんよりはと、直接に二番を海軍大臣に致して、參觀の許可を求めたり。越えて一日、ポーツマス司令長官より電報あり。曰く、明日午前十二時、一將校と馬車二輛とを、停車場迄出迎に出しおくべしと。「タイムズ」の特派員フレッチヤー中佐、亦本社の特電に接したりとて、書を飛ばして、停車場前の某ホテルに會見せんと申し來らる。五月二十四日、豫期の如くポーツマスに至れば、果然グールドン大尉の待てるあり。フレッチヤー中佐、亦ホテルの門前に立てり。乃ち三人相携へて、鐵守府の馬車に搭じて、今しも當ドレッドノートへと來れる也。待つこと時餘、宮殿下の二行を載せたる特發列車は、軍港停車場を過ぎて、霧直にドレッドノートを横附にせる棧橋の上に進み來る。是より先、棧橋の上には、海軍海兵隊の緋紗羅の二列を先頭に、水兵を中に同じく海兵砲隊の音楽手を右にして、孰れも威儀儼かに控へ、艦上には、滿艦飾を施し、橋頭高く日章旗を掲げ、水兵の、一部は舷に立ち、一部は甲板に列びて、御迎へ申し上げ。殿下の御着車と同時に、樂隊が「君が代」の奏樂あり。

殿下は、随員と共に車を出でられて後、儀仗の水兵海兵を巡覽せられ、終りて、軍港の高級武官及市吏員に謁を賜ふ。此間、棧橋に控へたる寫真師の一族は、脚立やうのものに登りて、八方に目を配りて、寫真機をばちつかすること甚忙しげなり。フレッチャー中佐笑つて曰く、今夜若し倫敦に歸りて、パレースなどの寄席に行かば、必ず君や僕の顔が、活動寫真の中より現はれ出づるなるべしと。

殿下は、設けの階段を上りて、ロバーツ元帥小村大使山本西兩大將其他と共に、艦上に入らせ玉ひ、艦内隈なく御巡覽ありて後、此の度は海に向ひたる左舷の上甲板に出でさせらる。今朝よりの雨は、早く霽れたれど、尙いぶせく打ち曇りてありし空の、此時に至りて、初めて日の光を洩し來る。見れば前面には、近くヨット二隻と水雷母艦一隻、其の右には山の如き給炭船が、赤子の乳を含める如く寄り添ひたる巡洋艦一隻と立ち列び、左の方遙に前世紀初の艦型いと珍らしき、ネルソンの坐乗艦ビクトリーを見る。其外の大小艦船、雲に入り霞に隠るゝ限り、滿艦飾を施し、日章旗を掲げざるはなし。

須臾にして、艦尾の方より、怪しき形したる船の、一隻二隻相續いて、殆ど半打沈めるが、追々に走せ來る。新舊各型の潜航艇を、殿下の御覽に供せんとてなり。初に來れるは、四隻、船體半水に在り。海波を斬つて突進し來る。次に來れるは、やゝ舊型の四隻、僅に司令塔のみを水面に露はして、順序正しく徐々と走せ近づく。之に次いで、一隻又一隻、皆ドレッドノートの前面、殆ど艦側を掠めんばかりの所を、すれゝに過ぎて行く。其の一隻も全く沈み終らざりしは、沈むべき筈なりし船の機關に故障ありて、沈み損ねたるなりといふ。潜航艇の御覽終りて後、殿下は随員と共に、棧橋に出でさせられ、此處より馬車に搭じて、海軍兵舎の方に赴かせらる。御見送りは、御出迎の時と同じ。フレッチャー中佐は、本社へ電報せんとて、そこへ去りぬ。余等も亦去るべきか。

グールデン大尉と、馬車を驅つて、海軍兵舎に午餐を喫し、殿下の後を追ひて、暹く軍

港内を巡り見るに、凡そ港内の艦船、其の水に浮べると、船渠の中に在るとを問はず、幾
 百千盡く満艦飾を施し、日章旗を掲げざるなく、快観いふべからず。三時頃、一漁艇に乗じ
 て、ピクトリーに至る。古き型とて、中甲板以下天井低くして、直立すべからず。上甲板
 に上れば、當年トランプルガー戦役の當時用ひたりて、帆木綿を延べたり。舷頭には、ネル
 ソンの遺骸を運びたる短艇を安じ、其の少し後の方に、長さ七八寸の真鍮板を、甲板に打
 まつげて「千八百五十年十月二十五日、ネルソン提督此に休る。」と記しおき。當時の様目
 見るが如し。下りて、中甲板に至れば、兩舷側には其昔のまゝの大砲を列べ、どおる一間
 には、其の頃の新聞紙繪畫など陳列したり。百年前の「タイムズ」(其時は「コーリア」)が四
 號活字にて。

「我等は、吉報と凶報とを併せて、此に公にせざるべからず。昨日トランプルガーに於て
 得たる我軍の奇捷と、同時にネルソン提督の戦死したること、是なり。」と云々
 と報じたる原紙、其まゝを存したる、殊に面白し。我等が此處に入れる時、恰も宮殿下の

七十二

此船を去らるゝ時に會し、身禮砲の響き、小き艦内に轟き渡りて、一發毎に艦體の打ゆ
 るぐを覺えたり。禮砲終りて、樂手の「君が代」を奏するが引續いて聞ゆ。耳を聳せんする
 砲聲、一たび已んで、嚙腕たる樂聲直に之に次いで至るは、雷雨一過して、新月を晴空に
 望むにも似たらんか。「君が代」の奏樂中は、側に立てるグ大尉、肅然として舉手の禮を行
 ひ、樂終るまで改めず。見る人なしとて、荷もせざることを、誠に飲するに堪へたり。
 更に下りて、下甲板に至れば、黑暗の中に、蠟燭所々に灯し列ねたり。グ大尉と暗中を
 摸索して、右舷の方に至れば、此處に綱張り渡して、花輪を手向けたるを見る。曰ふ、是
 れネルソン卿終焉の所と。卿が痛手を負ひて、此處に運ばれ、小暗き蠟燭の火の下に、醫
 官の看護を受けたる様の、如何に懐愴なりけん。愴然として立つこと少時。時移りてはと
 促されて、此處を去る。

三

七十三

七十三

ホーツマン
今正に午後九時半。

ピクトリーを出で、後、ホエール島の砲壘を巡視し、七時發の汽車にて、今しも初めて倫敦に着けるなり。今更宿に歸ればとて、食事の時間はとくに過ぎたり。已んぬるかな、之より日本俱樂部に行きて、一盞を舉げて後、球を突かんには如かじ。(五月二十四日)

鎌倉にありし時、夜深けて虫の羽叩く音しきりなりければ、何事やらんと出て、見しに、蟬一羽、蟻に捕へられたるなりけり。其蟬、啞なりしかば、聲を得立て、唯、唯、羽音のみして救を求めたるなりき。——七花八裂

倫敦小品

○夜會の歸り

ハイド、パーク、ホテルで催された小村大使のリセプションで、いざ歸らうといふ時、元「クロナクル」新聞の従軍記者であつたリンチ君が、無理に僕を食堂へ引ッ張り込んで、是非日英同盟の萬歳を祝しやうといふので、うかと釣り込まれて、三鞭を三杯續けざまに傾けた。之が恐ろしく頭に答へて、いつになく酔拂つて、殆ど夢中で戶外へ出る。居合せた辻待馬車に飛び乗る。御者が何やらくどくどと行先を尋ねるのを、宜加減に挨拶して、ナイツブリツチの通から南に向ふ。車の揺れる度に、シルクハットが、釣り上げた車の雨戸に觸つて、誠に氣がおける。今日折角火駈しにやつたものを、又しても一夜の中に危犬のやうにしては、宿に歸つて主婦と同宿の客に冷やかされるが、聊か面目ない。

成るべく居すまひを正して、頭を戸に當てまいとやつて見ても、例の日英同盟が何時まで
も崇つて、直ぐら〜と来る。成程、夜會の帽子を、クラッシェ、オペラに限るのは、此
處の道理に基くのだなと、思ひついで、大に感心する。

車中のお客が、斯やうに日英同盟の崇りから、クラッシェ、オペラの原理に至るまでの
外交的人類學的の研究を、是れ事として居る間に、馬車は、どん〜とアスファルトの滑
滑した大道を、蹄鐵の音勇ましく進んで行く。街道には、街燈が、うすら淋しく、ざら〜
と光つて、往來は殆んど絶えて居る。此の往來の殆んど絶えた真夜中でも、御者は左側左
側と道を取つて、とある曲り角には、真直に横ぎつたどて、誰一人見て居る者もなすのに、
矢張り、左側から熊々一つ大曲りに車を曲げて通つた。一馬丁に至る迄、此の通り、英吉
利人の英吉利人たる所を存して居ると、僕は深く感心した。日英同盟は、外交上の問題
ばかりでない。——無論三鞭ぢやない。

宿の前で車を下りる。無論前以て賃錢は定めなかつたが、一志拂ふ。夜深だからとか

何とか増賃を求めると思つたら、彼は二寸帽子に手をあて、「サンキマシー、サー」と、丁
寧に挨拶して行く。何處迄も英吉利人だ。戸を明けて入らうとすると、門に巡査が立つて
居る。僕を見て、つか〜と歩み寄つて、軽く一禮した後、横側の窓が二つ明いて居るか
ら、一寸御注意申し上げる、とのことであつた。世に倫敦の巡査ほど、可愛らしいものば
ない。孰れも雲突くばかりの大男で、ヘルメットに入字髭頗る儼しいが、其の優しさと、丁
寧なことは、迎も我が東京の巡査も及ばぬ。此の前にも、或る日本の畫王が、サーラスの
岸で、頻りにスケッチをやつて居たり、そんな低い處では景色が能く見えまらと言つて、輕
輕と兩手で此畫工をさし上げて、とある水難救濟所の屋根へ載せて呉れたのだ。昨日も
アールネエートの停車場で、新聞賣の小僧が、一寸手を舉げて敬禮すると、巡査は満面に
笑を湛へて、「ハッ、アー、ニー、サー」と来たものだ。

巡査は注意された窓を閉めて、自分の部屋へ手さぐりで入る。電燈は消えて、黒白も分
かぬ暗だ。此の時丁度十二時半。

留守の間に、部屋はちやんと片づいて、一物の引き散したるものもない。僕の部屋附の女中は、頗るの美人で、馬鹿にさちやうめんな女だ。此の宿へ来た日、毎朝八時に起せと言つておいたら、一分も違へずに、八時には必ず起しに来る。衣物を疊む。寢床をしまふ。部屋を掃除する。暖爐を焚きつける。凡そ定つた用事は、言はれぬ前にさちんとして仕舞つて、殆ど全く口を利いたことはない。聞けば、英吉利の女中は、皆さうださうな。此の宿へ初めて来た時、呼鈴の備へがないと苦情を言つたら、居合せた友人が打笑つて、當地では、下女の方で何れもかも心得て、ちやんとして呉れるから、殆ど呼鈴の必要はあるまいと言つた。成程其の通りだ。矢張り英吉利だ。

窮屈な燕尾服を脱いで、寢衣に着かへると、初めて我に歸つた心地。白キッドの手袋一つ、大事に箆笥の中に仕舞ふ。之はさる所の夜會で、片方を失つた以來、何處へでも片方だけて済まして居るのだ。之を或る交際通に話したら、夫はなかく通だと頻りに感心して居やがつた。感心するに事を缺いて、片方の手袋に感心するとは其愚や及ぶからずだ。

兎角して、臥床に入つたは、彼此一時過。外には、まだ時々馬車の音が聞える。

(五月十五日サウス、ケンツントンの夜會にて)

○、カート、ホース、シヨ

今日は、リゼント公園で、カート、ホース、シヨがあるから、見に行きませぬかと、十三になる可愛い隣の部屋の人娘が誘ひに来る。いや隣の部屋の人娘の十三になる可愛い娘が誘ひに来たのだ。一體、其の喘息やみが痰を吐きかけて已めたやうなカート、ホース、シヨとは、何だらうかと聞くと、之は倫敦中の荷馬車の馬の共進會見たやうなもので、優れてよい馬には、賞金賞牌を與へるとになつて居る。馬の待遇をよくし、良馬を養はせる習慣を作るのが目的ださうな。格別面白さうにも思はれぬが、折角可愛い十三になる隣の部屋の人娘が誘つて呉れたことだから、早速一所に行くことに承知した。

カート、ホース、シヨ

八十一

同行は、例の娘と、其父と、今一人之も矢張り同宿の英吉利人で、一行四人、地下鐵道でカーン街へ出る。もう此處から一杯の見物人だ。雑沓をから分けて、公園の方へ行くと、威程、荷馬車が續々と来る。馬は靴も違まじい大きな奴ばかりで、之に今日を晴と紙片をらリギンやら金具やら、様々に飾り立ててある。中には、前回のシヨに貰つた賞牌を幾つとなく吊したのもある。車の上には、乾物屋、小間物屋、八百屋、荒物屋、牛乳屋など、夫を其車に關係をもつた労働者が、女房子供を二所に乗り込んで居て、何かは知らず頬はつて、口をもぐぐとせながら、笑ひさいめさ合つて通る。如何にも陽氣だ。

● 兩側は、一面の群集で、殆んど身動きもならぬ位。馬車の通り行く毎に、口々に「宜い馬だ」とか、「何處産だらう」とか「太り過ぎて居る」とか、「足が長過ぎる」とか評し合ふ。賞牌を吊し列べた馬でも来ると、誰初めるとなく喝采の聲を上げる。車上の御者が、得意氣に鞭を上げて、答禮の眞似をするのもある。實をいふと、我輩日本の江戸ッ子は、馬のことは二向分らぬが、此邊の者は、小僧でも女でも、皆能く馬を知り、馬に馴れて居て、いろ

んなことを言ふ。言ふばかりか、いろんなことをする。

● 何した拍子か、雑沓で馬車が數十臺、一度にはたと立ち止つた時、つい僕の前に居た十歳ばかりの男の兒が、ひた／＼と馬の傍へよつて、さも可愛げに馬の顔を撫で、やる。馬も亦可愛げに、小供の顔を見下して居る。丸で書にかいた様だ、其中、二人連の若い娘が来たの道を彼方へ横ぎらうとしたが、生憎馬車がぎツしりと押しつまつて、出る口がない。日本なら、恐々馬の側に立つて待つ所だが、此處らの娘は心得たもので、何やら馬にからかひながら、一寸轡の所を掴んで、其の鼻面を脇に寄せながら、辛く身を入れるだけの空地を作つて、安々と通りぬけた。其様が如何にも態とらしくない。僕は大に感心した。成程之ほどに、一般の人が馬に興味を持って居てこそ、初めて馬匹の改良も行はれる。ガラ札を命とする半博徒を相手として、幾百の競馬場を作つたとて、何になるものかい。

● 感心したのは之ばかりでない。此の身動きもならぬ大群集の中に、混雑といふことが全くない。押しもせぬ、押されもせぬ。急ぎ足で前の人をつきのけて行かうとする者もなければ、

カート、ホース、シヨ

八十二

カート、ホース、シロー

八十二

ば、摺れ違ひさま打つかり合ふ者もない。乳香兒を抱いた妻君が、平氣で人ごみの中を歩けば、病人を乳母車の様な車に載せて、徐に之を押して行く者もある。偶少し込み合ふと見ると、巡查が丁寧に車の前に立つて群集を制する。制せられた群集は、たぎりと後に退つて、道を譲る。若し夫れ、査公一たび手を舉げて合圖を傳ふれば、一言を費さずして、百千の車馬、ひたと一時に進行を止めて、徐に次なる合圖の下るを待つ。誰一人苦情をいふ者はない。

賞品の授與は午後だといふので、之は見ずに仕舞つた。歸り途に、同行の獨逸人と英吉利人と例の娘までが一所になつて、頻りに馬の評をやつて居る。僕にも分るかといふから、僕は、鹿なら心得て居るが、馬は一向知らぬといつてやる。娘は目を丸うして、「アラ、そんなに深山日本に鹿が居る?」といふ。今更騎虎の勢、さうだと答へるより仕方がない。此娘が大きくなつて、日本へ来たら、僕は一番に奈良へ案内する積だ。

(五月二十日倫敦客會にて)

○ムーア、ゲートの敗墟

今日は日曜といふので、倫敦市中はぱつたりと火の消えたやうな静かさ。店といふ店は煙草屋位を除くの外、盡く鎖され、仕事といふ仕事、殆ど一として休みならざるはない。随つて、人通りも至つて少く、馬車の音も偶に聞ゆる許り。電車の發着さへ、日曜には其數を少くする。ワシントン、アーピングが倫敦の日曜を叙して、「此の日に限つて、犬も餘り吠えない。」と言つたのは、まんざら偽でもなさうな。僕は今、神戸の「ジャパン、クロニクル」の主筆ヤング君と、倫敦のまん中の、シチーのまん中の、ムーア、ゲートの邊に立つて居る。平生ならば、此邊は車馬絡繹、來往の士女織るが如く、雲を凌ぐ大層高樓軒を列べ苑を接して、繁盛股賑を極めて居る所だが、今日はどんよりと曇つた朝寒の空に、道行く人も稀なれば、馬車の響も、極めて疎らにしか聞えぬ。静かなること、左ながら太古の如く、之が倫敦のまん中とは、何しても思はれぬ位。

ムーア、ゲートの敗墟

八十三

此のムリア、ゲートの大通りの片側に、僅に残つた羅馬時代の倫敦市の城壁の敗墟がある。長さ僅かに五六間。黒色の堅い石で固めたもので、上の方には、丘世になつて築き加へた煉瓦の壁がある。昔の墓地であつたとかで、鐵柵儼かに結び回らして、人を近づけぬやうにしてある。ヤング君の話によると、此邊が即ち羅馬時代の倫敦市の境目で、ムリア、ゲートの名は、之から先、一面の沼池があつて、其側に市の城門があつたから出たのだといふ。

京極のさんざめく賑しい町が、昔は京の極であつたと聞いて、異様の感慨を禁じ得なかつた僕は、此倫敦市の中心が、昔の倫敦の町外れで、其處が一面の沼であつたのだと聞いては、如何にも言ふべからざる一種の感慨に堪へなかつた。羅馬人の占領して居た頃といへば、今から千七八百年の前、英國は未だブロン人時代であつて、今しも、此邊に益々して居るサクソン、ノルマンの流れが、殆んど影も形も見えなかつた頃である。爾來幾變遷、北人の世となり、アングル人サクソン人の領土となり、はては、ノルマン人の天下と

なつて、テムス河畔、蕨草蓬々たりし當年の文字通りのストランドが、今や其名ばかりを留めたストランドの大通となつた倫敦の賑ひのたゞ中に、此の古城壁は、依然として、半ば埋もれ、半ば苦むして、存して居るのである。

脚躰低回、僕は殆ど去るに忍びなかつた。何とやら、此の静かな町の様が、一時倫敦を二千年前の昔に還して見せるのでないかと思つた。嗚呼あの煉瓦の五階作りの家の下には、釣を垂るゝ子供が居たらう。又彼の新聞賣子の立つて居る停車場脇の廣場は、妙な法衣を着たドルイツの坊主がうろついた所かも知れぬ。

雨がぼつくと降つて來た。(五月十九日ロンドンにて)

○下院の議場

僕は今、倫敦「デリー、メール」の社主ノースクリップ卿の紹介で、其の弟に當る下院議員ハイムスフォース君に導かれて、下院の傍聴席に就いた。



堂事議會國の國英

下院の議場

八十六

テームス河畔に聳ゆる、居然たるゴシック風の大建築を見た時は、何な立派な議場が其中に在ることかと思つて居たが、入つて見て、其の存外に小さく狭苦しいのに驚いた。議席はといふと、唯長いベンチを兩側に幾列が列べたばかりで、デスクも、テーブルもない。中央の政府委員席と言つた所が、唯前の方にあるといふ迄で、之も腰掛を列べた切り。演壇と言つて、別に高々と仕つらへたものもなければ、議長席とても、餘り普通の議席より高い所にあるではなし、新聞記者席と速記者席とは、議長席の後の二階にちよんぼりとあるばかり。傍聴席は二階にもあるさうなが、僕の導かれたのは、何でも特別席と

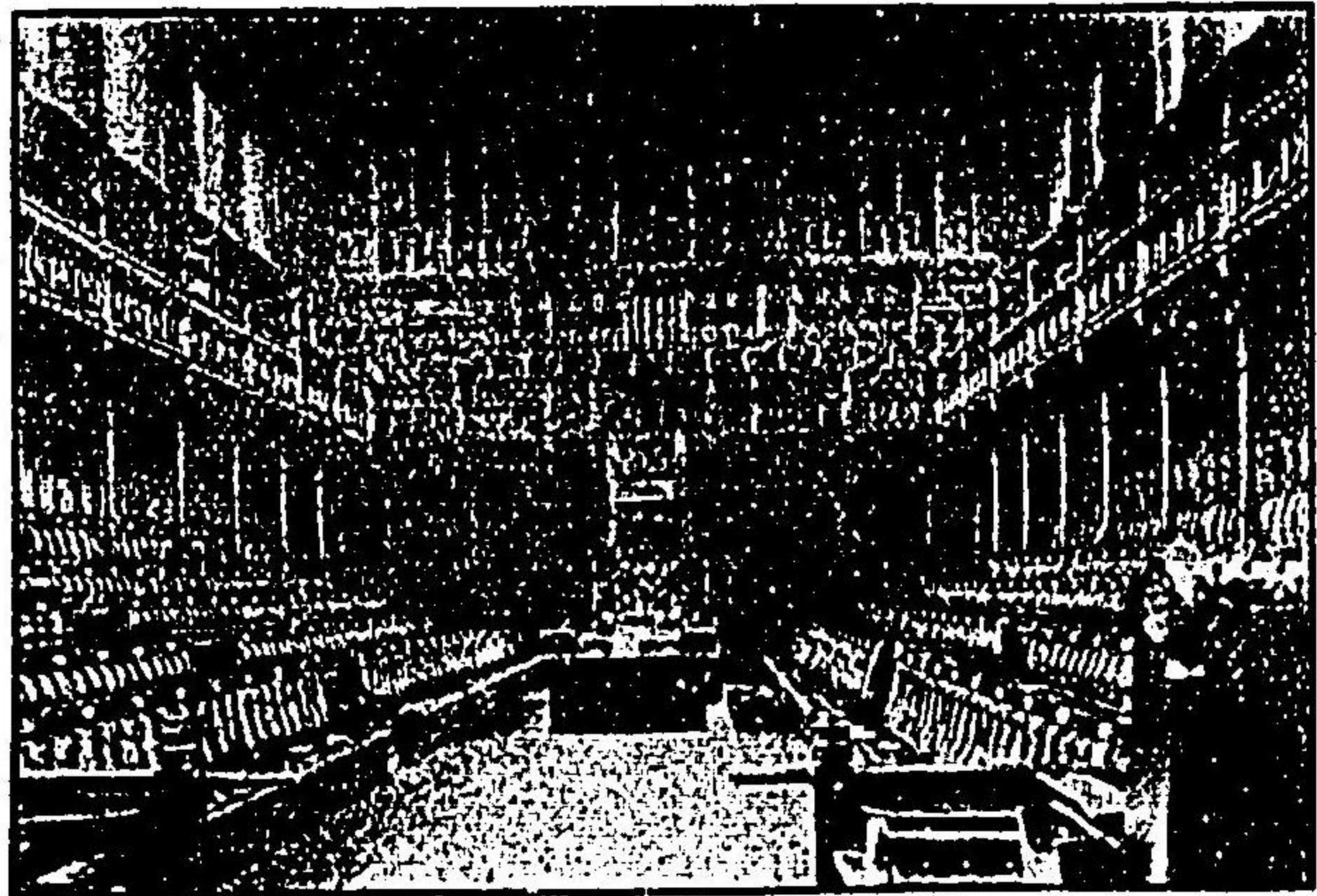
かで、議席の直後に、議席と殆ど相列んだ所に在る。議席に居るホームスミス君が、時其傍へ来て、小さな罫を隔て、何かと議場の模様を説明して呉れた。其無造作なこと、いつたら、氣の利いた日本の村會だつて斯なことはない位僕は面喰はざるを得なかつた。が併し、此の無造作な中にも、流石に英國一流の秩序は、整然として一糸亂れず立つて居る。此の小さい狭苦しい議場に、之ほどの多人數が押し詰つて居ながら、我邦の議會の様になわくした所は一點もない。私語する者は、極めて聲を低うして語る。立ち歩く者は、爪先だけを踏みぬめて拔足で歩く。議場に出入する者は、出入毎に、必ず帽子に軽く手をかけて、議長の方に黙禮する。議員の演説は、盡く議長に向つてすることゝなつて居るので、相手の議員を一人三人稱に置いて、必ず「名譽ある紳士」と呼びかける。他人が演説する間は、肅然として謹聴して、「馬鹿野郎、引込め」などは愚か、咳拂ひ一つする者もない。僕が傍聴中、丁度蘇格蘭の財政に關する討議があつて、反對黨の首領前首相バルフォール君も演説すれば、少チエンバンもやり、アスクキス卿も辯じた。中にも、チエ

下院の議場

八十七

シレン君の演説は、随分手厳しく政府を攻撃したもので、数字を列べて立てゝの長演説である上に、夫が、チ君の例の調子で、時々せき込んで、吃々として言句に塞へることがあつたから、日本なら、面白くもない少数の反対演説、半分も終らぬ内に、無用々々の聲に壓せられたに相違ない。所が、流石に英國の下院は、孰も此の小五月蠅い長演説にも、敬意を表して、黙聴して居るばかり、一言半句の評語をさへ下さぬ。負けるに定つた反対演説を、おめす臆せず辯じ立つる者もえらいが、之を聴いてやる多数の雅量も亦甚だ欽すべきである。總じて議員の態度が、口舌の上の討論を事とするのでなくして、如何にも一國大問題を誠實に討論して居るらしく見える。議員とさへ言へば、酒色に沈湎する者、賄賂を貪る者、高利貸に窘めらるゝ者と、略相場の設定つた何處やらのと比べて、英國のエム、ピトに至る所に推重せらるゝ理屈も、略之で分つた。

やがて此處を辭して出やうとする途中、不圖出口を見失つて、飛でもない方角にまご／＼して居ると、白髪の鬘儼かに戴いた守衛が、徐々と歩み寄つて、「失禮ですが、出口がお



英 國 下 院 議 場

分りにならないのでは御座いますまいか。私が御案内致しませう。」と言つて呉れた。

僕は記憶して居る、一昨年の冬、僕が衆議院の遊樂隊を勤めた頃、議場の入口を間違へて、守衛に小言を食つたことがある。其の時の守衛の仰せられけるやうに曰く、「コラ／＼、そんな所から上つてはいかん。」僕は一縮みに縮み上つた。(五月十三日)

○三等客車

オリバー、クロムウエルの生地、ハンチンドンに用があつて、キングスクロス停車場から、汽車に乗る。例に由つて、先づ三等の切符を求めて、然

るべき客車もがなと捜し廻ると、生憎お客が一杯。やつと、喫煙室に一空席を見つけて腰を下せば、今迄新聞を讀んで居た隣の先生、急に居住ひを正して、席を譲つて呉れる。「有難う」といふ言葉は、我知らず出て来る。車掌が来て、切符に鉄を入れる。僕の顔を見て、にこくと如何にも愛想よく打笑ひながら、「此處は込み合ひますから」と言ひ出したので、僕は「懷中物御用心」と来るかなと思つて居ると、「隣の室にお移り下さい」といふ。隣の室に行けば、品の好い夫婦が一組居るばかり。僕は英國式に一寸帽子を取つて、御免下さいと言ひながら、其側に席を占めると、之はしたり二等だ。一寸驚いて、此處迄送つて来た車掌に注意する。車掌は自分の帽子の徽章に、一寸人差指をあてながら、「私が承知して居ります」といふ。「有り難う」の語が、又もや思はず口を滑り出る。車掌が其職權内の全力を盡して、此の「遠人を懐柔」した譯である。

僕も倫敦に來た當座こそ、汽車は一等に限るものと心得て居たが、或は地下鐵道を乗り過して、ウキンドンに行つた時、圖らず三等の客車に乗つて見ると、乗客の数が少

し多い許で、車内の設備も裝飾も一向一等と變らず、堂々たる紳士も淑女も平氣で乗つて居たので、其以來、汽車は必ず三等と定めたのである。聞けば、獨逸などで、一等客車は「亞米利加の阿呆」の爲に作つたものとさへ言つて居る位。亞米利加の成金黨が、金さへ高く出せば宜いことのやうに思つて、譯もなく一等客車に乗りたがるのを笑つたものだから。三等客車と言つた所が、尻引捲つて毛脛をむき出す不作法者もなければ、人の迷惑も構はず、我面白げに高聲で笑ひ騒ぐ者もない。車の出入に、押し合はず込み合はず。偶過つて人の足か腕に觸れば、振り向いて「御免なさい」と詫びる。窓を開くにも、戸を閉づるにも、同室の客に氣を兼ねて、先づ一寸断つた上でなければ、開けも閉ぢもしない新しく入り來つた客は、大抵帽子を取るか、手を舉げて先客に黙禮する。出る時も、多くは「左様なら」位を言つて行く。人が入つて來ても、寐をべり返つて起きやうとせせず、人が立つて居ても、自分の荷物を腰掛から下さうとせぬやうなお客様は、樂にしたくてもなす。

愈、ハンチンドンに着く一つ手前の停車場で、車掌が切符を集めに来る。英吉利の汽車では、孰れも着驛の手前で切符を集めるが、若し切符を渡した儘、更に次の驛まで過した時は何うなるのだらうか、僕には頼と合點が行かぬ。合點が行かぬといへば、一般に改札口のない英國のプラットホームでは、切符へ鉄を入れるに、車掌が車の中にやつて来て鉄を入れる。無切符で乗つて、車掌が改札に来た時だけ、そつと車を出たら、何するだらうか、之も分らぬ。次に今一つ分らぬのは、小荷物を預けた時だ。預けた儘で、チエツクも何も呉れぬ。能くあれで先方に着いた時、無暗に人の荷物を持って逃げる者がなかつた者だと、僕は不審に堪へぬ。斯なことは英吉利にして初めて行はるべきことで、逆も外では眞似が出来ませぬ。

僕は上野の動物園の外面を通る毎に、何時も感じた、一體動物園の、中が動物園であるか、外が動物園であるかと。成程、園内には數百の動物が、檻の中や網の中に養はれて居るから、之を俗に動物園とはいふのだらうが、外に居る我々人間が、果して餘り動物扱ひ

を受けて居らぬだらうか甚疑はしい。一寸土堤の上に登つても、コラ〜を食ふ。少し芝生に足を踏み入れても、警視廳の立札に追ひ返される。停車場に行つて汽車に乗らうとすると、先づ切符を買つて後、嚴重な柵を結んだ入口で一々改札を受けて、而して後、初めて車の中に乗ることが許される。出る時はといふと、之も同じく牧場に放つた牛を一つ一つ小屋へ追ひ込む様な體裁で、小さな出口から一々切符を調べた上で出すのだ。斯様にしてさへ、尙乗逃げ乗り越しが絶えないといふに至つては、人間も亦随分人間らしくないと言はざるを得ぬ。

僕は英吉利に来て、初めてや、人間らしい取扱を受けたのである。(六月十五日)

○「トリビューン」の編輯局

「睡たいかい」と編輯主任のロートン君が突然問ひかける。居列ぶ編輯の人々、皆僕の顔を見てにたりと笑ふ。「睡たくはないが」と、僕は少し言ひ溢つて、「腹が空つて来て堪ま

らない。』と言ふ。一同は又僕の方に振り向いて笑ふ。『今少し我慢し玉へ、大組が済んでから、俱樂部に行つて、ウキスキーでも飲まうぢやないか』と、副主任の某君が曰ふ。

時は、今午前零時半を過ぎたばかり。僕は日暮から、此の「トリビューン」に来て、編輯の模様を覗いて居るのである。ロートン君といふのは、前年日本に来て居た「テングラフ」の特派員ロートン君の兄で、極めて穏やかな優しい人だ。僕は此人と副主任との間に陣取つて、二人が忙しげに青鉛筆を動かす様を見て居る。副主任は年配の人で、むしやくと顔一面鬚だらけ、之が原稿を書く時は、左の手にペンを取つて、下から上へ書き上げるのだ。夫で居て、人一倍早いのだから、誠に社中の珍品ですと、ロートン君が笑つた。惜むらくは僕は其の名を忘れた。

丁度九時頃から、三四時間、編輯局は左ながらの戦場。電報が着く。卓上電話がかゝる。探訪から上つた材料が續々到来する。何處も變らぬ通信社の容積ばかり大きい通信が山の様に積もる。之を一々振り分け、書き直す。工場からは、卅分毎に空白の面積を報告し

て来る。給仕の小供が、殆ど間断なく原稿を工場に運ぶ。腹立しげにクワン〜とバイブを叩きつける音。コツ〜と廊下を歩く靴の音。其の絶間〜に、ギー〜と紙に走らす寫本の音の合の手が聞える。其處へ又押覆さるやうに、ブーン〜と高く低くエレベーターの上下する響が交つて来る。

「トリビューン」の誇るに足るべき點は、社を擧げて、丸で一家族の様な所に在ると、ロートン君は言つた。實にも編輯部員の打解けて睦しげな所は、餘所目にも羨ましい。主任の一事を下僚に命ずる。一々丁寧に頼み聞える。下僚の主任と語るに、丁度兄弟同士の一家の内事を相談し合つて居るやうな。部員の更迭などは先づ滅多にないさうな。

主筆の某君は、快活な若い人で、僕を社内残る隈なく案内して呉れた上、僕の爲に自ら社の見取圖迄引いて呉れた。工場に行くと、印刷部の外は、活版部鑄造部などに居る何百人といふ職工中、一人として白いカラーを着けて居ない者が無いのに、僕は一方ならず驚かされた。又階下の娛樂室に案内せられたが、此處には、書籍樂器卓子ペン、インキの類

記者俱樂部

九十六

を備へて、何人でも勝手に入つて、勝手に備附品を使用して差支ないことに成つて居る。之は倫敦中で此社にある許ださうだ。何人でも勝手に入れるとわつては、如何はしい身扮の者が來はせぬかと問うたらば、主筆氏打笑つて、室内の裝飾さへ立派にしておけば、決してそんな者は來ないと言つた。流石に英吉利人の其の分を解し序を正うして亂れざる趣は此邊にも見える。冷飯草履に尻ヒン捲つて、汽車の二等室にのさばり込む「金さへ出せばお客」主義の連中とは大分違ふ。

今正に午前一時、愈大組の校正も何もかも済んで、鉛版が盡く地下の印刷工場に下りて仕舞つた。愈ウキスキーだと副主任が言ふ。(五月三十日)

○記者俱樂部

ロートン君と副主任とに伴はれて「トリビュン」社を出ると、昨夜からの小雨が、まだじと〜と降つて居る。とある細い小路を曲つて、記者俱樂部に入れば、バーの前には、「テ

レグラフ」や「メール」の連中が、袴と詰めかけて、快よげに笑ひさめきながら、頻にウイスキーを煽つて居る。見れば「トリビュン」の記者で、先先に失敬して來て居るのも大分ある。就もやつと編輯を卒へて、一盞の酒に一息ついて居る所。外面には、早や馬車の音荷車の響が憂々と聞え初めて、世界は今や寂定の境より起き止らうといふ所。明け暮さ倫敦の夏の夜は、いつしか東から白みかゝる。

僕は、ロートン君から一同に紹介される。異境の同業者と聞いて、一同は愛想よく迎へて呉れる。中にも「レグラフ」の某君は、日本に居たことがあるとかで、日本語で色々話をしかける。其内に酒が出る。煙草が出る。追々と様々の質問が出る。日本字で名を書いて呉れとの注文が、彼處此處から出る。戯れに僕が例の名筆を揮つてやると、斯な字を使つて、日本にどんなライノタイプが出来て居るかとの問が出た。今日に限らず、日本にライノタイプがあるかとの質問は、今迄に幾度受けたか知れぬ。其度毎に、僕、思々しいが、日本にライノタイプ所かタイプライタイもないと答へたが、今夜は、次手のことに、日本

記者俱樂部

九十七

の活版工場には假名と漢字とを加へて、何千といふ異様の文字が日々使用されるので、之を偏と劃とで分類して、幾十幾百のケースの列が出来て居る。其ケースの列の間を、文選職工が端から端まで往來して、一字一字拾つて歩くのだと、言つて聞かせたら、一同は眼を圓うして驚いた。さうすると、日本の職工は餘程の學者でなくちやなるまいと、誰やらが尋ねたので、僕はすまじ返つて、「記者も亦其の通り」と答へて呉れた。

僕は、此種の記者俱樂部が、日本にも出来て欲しい。東京に記者俱樂部といふのはあるが、いづれの新聞社からも程遠い衆議院の一隅に、お粗末極まる會館を持つて居るばかりで、外國のお客は愚か、日本人だつても氣の利いたお客は連れて行けぬ位である。食堂はあつてなし、娯樂の器具とても圓球盤位。其の上開館は晝間に限つて、夜はカツレツ一つ食へもしない。僕等は、三版の編輯を了つて、夜の一時か二時過になると、蕎麥一つ食ふことも出来ぬやうな今日の銀座の近邊に、如何に夜深でも麥酒位は傾けられて、わが同業者と語り合ふことが出来るやうな、一種の記者俱樂部が出来て欲しいと思つた。

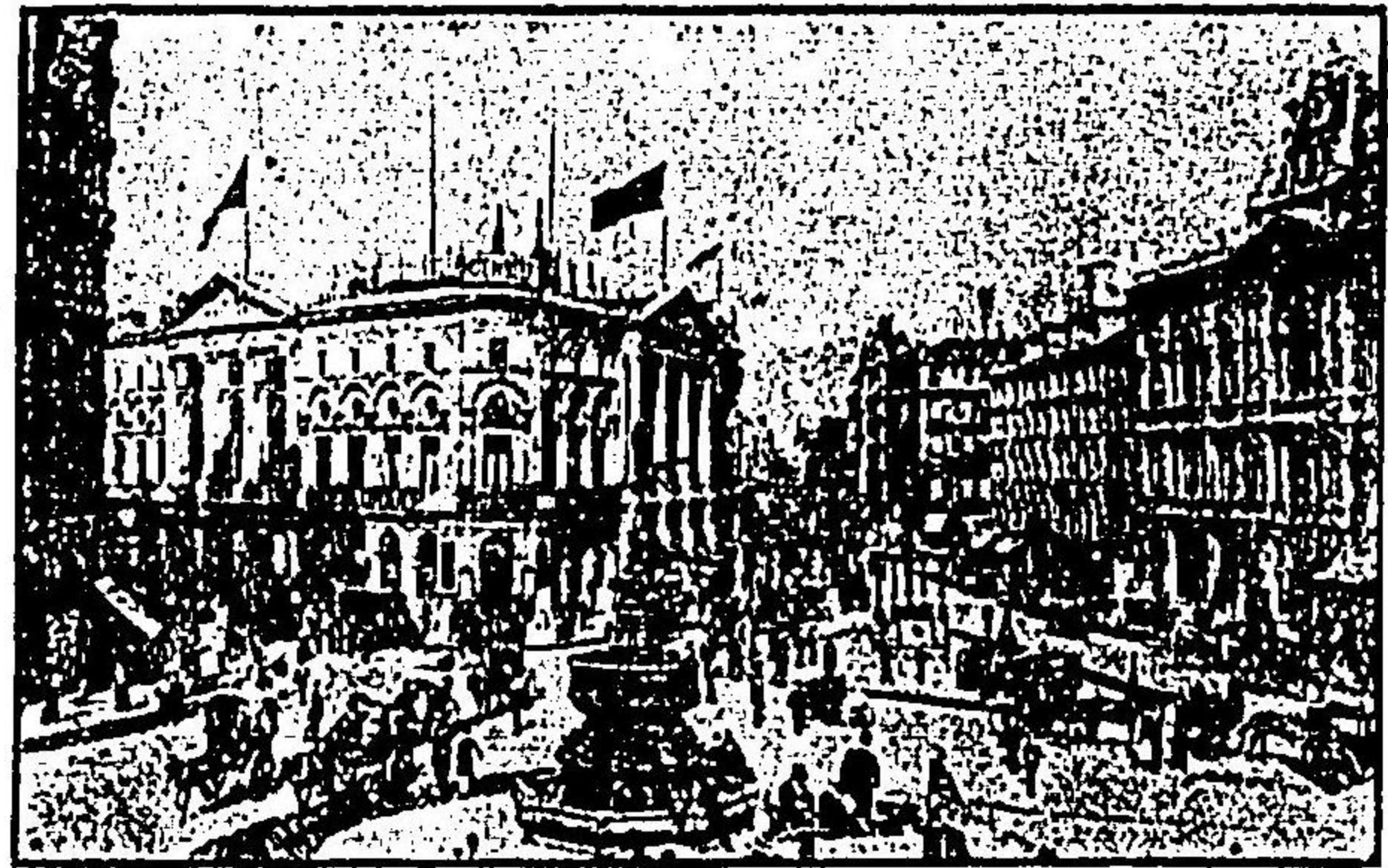
兎角の話に段々遅くなつて、僕がロートン君と此處を出て其家へ向つたのは、彼此二時半であつた。蕭々たる細雨を冒して、明け果てぬ町々の間に、馬車を驅れば、曉氣爽涼、さしも晝間は烟塵濛々たる倫敦の市中も、左ながら——左ながら何とかの如しといふ所だが、一寸氣の利いた句が思ひ浮ばぬ。工場から原稿の催促が厳しいから、之で御免を蒙つて後は明日になつて考へる！

○午前三時の朝飯

「左ながら」の捨置詞で舞臺回はると、今度はロートン住家の段。正面の下端には、一面の書架があつて、其上に何だか二つ三つ油繪がかゝつてゐる。座敷の中央には、小さな丸卓子に、小羊の肉の焼いたのを大皿に盛つて、傍に皿小鉢が四ツ五ツあつて、今しも注いだ麥酒の盃二ツに泡が沸々と立つて居る。ロートン君と僕と向ひ合せて腰をかけて、先づ件のラムを平らげにかゝる。ミントソースの香がきゆうと空腹に答へる。ロ君が盃を舉

午前三時の朝飯
音
げる。僕も舉げる。「ユア、ヘルス」と言ひ交はす。弟のロ君は、大病で病院に居るし、女中はまだ起きて来ない。我等二人の外は、猫の子一疋見えぬので、其の淋しいこと言つたらない。

思へば、一月前僕が初めて此處へ来た時は、弟のロ君がいそごとと出迎へて、兩手で堅く僕の手を握つて、能く来たか、を幾度か繰り返した揚句、何故停車場へ着く時間を前以て報せなかつたか、何でホテルなどへ行かずに真々此處へ来なかつたかと、且つ怒り且つ喜んで呉れて、夫から其兄なるロ君に僕を紹介する、東京で知合になつたカレン大佐を電報で招く、其上來合せて居たポーキス嬢といふのを無理に引き止めて、其夜は打くつろいで、質素ではあるが極めて愉快な晩餐會を此處で開いて呉れたことがある。其後三四日経つて来て見ると、弟のロ君は盲腸炎で入院したといふ。其の以來今に宅には居ない。僕は一應能く分つた積で、自分も使ひ、人にも教へた英語の「ホスピタリティー」の眞の意味を、此處此のロートン君の家で、初めて誠に解し得たのである。



スカーサーリーデカピ

午前三時の朝飯

ロ君は麥酒を傾けながら、頻に弟の事を言ふ。時時「弟が居たらはネー」と、左も心細げに言ふので、僕は氣の毒で堪まらなかつた。世に此人ほどの弟思ひも珍らしい。弟の方でも、東京に居る中から、能く兄のことを噂して居たが、倫敦では兄弟水入らずの二人暮し、何方かといふときやツきやと能く騒ぐ方の弟と、眞面目な落ちついた兄とが、何うして斯んなに相和し得るものかと、不思議に思はれる位だ。僕が時々病院へ見舞に行くと、何時でも、兄の方に出逢はぬとかない。「一體君の兄貴は毎日見舞に来るのか」と聞くと、如何にも毎日やつて来る所か、来る毎に花束を持つて来たり、菓子や呉れたり、書物を届けて呉れるとのこ

とであつた。

午前三時、倫敦の夜は全く明け放れた。強て辭して歸らうとすると、ロ君は態々ビカデリーの角迄送つて来て、馬車を雇つて呉れた。疲れて居る折柄、そんなことをさせては相濟まぬと、僕は途中で幾度か辭したが、ロ君は一向平氣で、今度英吉利の新聞記者が日本へ行つた時は、何分宜しく頼むとのことであつた。

夫で思ひ出したが、或時僕はさる音楽會へ招かれて、オックスフォード街の近邊へ乗合馬車で出かけたとがある。所が僕の隣に居た品の好い老人が、僕の土地不案内らしいのを見て、何かと世話を焼いて呉れた上、愈自分が馬車を下りやうとする時、僕の行先を車掌に告げて、こまぐと間違ひの起らぬやうにと頼んで呉れたので、僕は厚く禮を述べた。すると其老人は莞爾とほく笑みながら、『いや私に御禮は要らぬから、今度日本で英吉利人が道に迷つて居たら、相應な面倒を見てやつて下さい』と言つた。僕は之を聞くといとしく、何とはなしにはらりと涙を落した。其以來、僕は英吉利人の言語不通で困つて居る

者を見たらば、決して知らぬ顔で済ませまいと、固く決心して居る。

此老人のとを、歸つて祖母様に話したら、祖母様も不審さうに、『夫でも耶蘇から』と仰せられた。僕の祖母様は大の法華癡りである。

○「メール」の社長室

「朝日」の露都通信員の紹介で、「デイリー、メール」の外報部長ワットニー君を尋ねると、生憎旅行中とのとで、主筆のマロー君が其代りに會つて呉れた。折節社長のノースクリップ男爵も来て居るから會つて見ぬかとの話に、早速マ君に伴はれて、社長室に出かけた。社長といふのは、小作りなくりと太つた愛嬌のいゝ人で、僕の顔を見るが早い、掛けて居た椅子から飛んで来て、堅く僕の手を握つて、先づ初對面の挨拶をした。同じ初對面の挨拶でも、一問ばかり離れて、恭しく首を下げて、『初めまして』と來るのとは違つて、力を強めて『デイリーライテット』云々と來るのは、何處かに暖か味がある。

「メール」の社長室

ノースクリップ卿は、新聞の経営ばかりで今日迄に仕上げた人で、元は「アンサー」といふ團珍一流の小雑誌を出して、僅に生計の資に供して居た位の人だが、其が段々に成功して、とうとう今日では貴高に於て倫敦第一の「メール」を發行することとなり、夫が大に當つて、當年のホームスウヲース君が勳爵士に叙せられて、サー何がしといふやうになり、間もなく又男爵に進んで、今ではロード、ノースクリップといふやうになつたのである。新聞雑誌の事業が大好きで、「メール」が倫敦と巴里とマンチエスターとで發行せられて居る外に、日刊週刊月刊の新聞雑誌合せて五十三種を経営して居るといふ。中には「デーリー」、ミロア」と云ふ日刊の畫報もあれば、盲人用「メール」として全文印字機で印刷したものもある。刊行物の種類が多い爲、一社の中に一切を纏めることが出来なくなつて、「メール」の本社の外に、夫々に飛び離れた工場や、編輯局が幾何あるか知れぬ。

新聞記者と聞くと他人のやうな氣がせぬとて、卿は酒々と辯じ立て、中々僕を還さうとはせぬ。彼一句我一句の話の末に、此前佛蘭西人の倫敦觀といふのが新聞に出て、非常の

喝采を博したが、日本人のは未だ會て見たことも聞いたこともないから、是非一つ世に出て見て呉れまいかとの相談となつた。打明けて自状すると、僕は毛頭そんな小面倒なことを書く氣はない。先づ、伏見宮殿下の御滯英中は逆も六ヶしいと断ると、宮殿下の御滯英中だから殊に面白く讀まれるのだといふ。併し、其間は逆もそんな時間がないと言ふと、如何に忙しくても、一日に三十分や一時間は都合のつかぬことはないといふ。僕は日本文なら兎に角、英文では、逆もさう手ツ取り早く書けぬと、意氣地のないことをいふ。中々承知して呉れぬ。書けなければ此方で書くから、事實だけ話して呉ればよいといふ。愈々六ヶしくなつて来た。僕は参考書も何もない旅の空で、何が書けるものかといふ。参考書を調べた上で考へたやうなもの、此方でも要らぬ、唯初めて、倫敦へ来て見た當座の感想を、有の儘に書けばよいのだといふ。僕は、憚りながら倫敦に來てからまだ十日にじかならぬ。停車場からホテルに着いて、ホテルから日本の大使館に行つたきりで、まだ何一つ見たものはない。感想などのあらう道理がないぢやないかと答へる。受太刀も受太刀、殆

どしどしとどろた。男爵は嫌さず、『見ないといふなら、之から何でもお見せ申さう』と遮二無二突込んで来る。僕は實の所、全く泣き出したくなつた。此に於て、前に従軍記者として滿洲に来て居たマツケンジー君が呼び出された。マ君は「メール」の特務記者といふので、平生は別に定まつた用のない代りに、何時何な命を受けても差支のないことになつて居る。今晚の船で南亞弗利加へ行けと言はれても、ちやんと用意が出来て居る位ださうな。男爵は此人を僕の案内につけて、僕に倫敦を見せやうといふのである。やれ／＼飛でもない人を呼んで来たものだ。僕も、とう／＼退引ならず、引受けて仕舞つた。(六月一日)

○汽車中の原稿

今一度打明けて申すが、往生際の悪い僕は、此期に及んでも、まだ確と書く氣はなかつた。夫れ、倫敦の見物に少くも四五日はかゝる。其の間に、忙しいとか何とか唱へて、の

んべんくらりと引延ばして置けば、何時しか先方でも催促にあぐんで、其の儘泣き入るに相違ないなどと、宜しく高を括つて居つた。實の所、日本では、此傳で、屢奇功々奏したこともある。所で流石に「メール」は「メール」だけあつて、却々そんな手は食はぬ。マツケンジー君と共に、社長室を出て、昇降機に入ると、今日からは君の接待役だから、先づ倫敦で何々が見たいか、何んなことがして見たいか、遠慮なく言つて呉れと、マ君がいふ。昇降機の下りて仕舞はぬ中に、早や此だ。其處で、僕は先づさし當り、議會を觀て、學校を觀て、裁判所を觀て、教會堂を觀て、倫敦第一のホテルと倫敦第一のクラブで御飯を喰べて、倫敦第一の芝居に行つて、倫敦第一の寄席に行つて、自動車を飛ばして何處か田舎に行つて半日ほど遊んで、而して出来るなら近頃倫敦で禁止になつた樂劇「ミカド」を何處かへ見に行きたいといふ。マ君は打笑つて、快く一々承知して呉れた上、社の寫眞部で、僕の寫眞を取らせて、其日は分れた。

翌日は、約束通りマ君を尋ねると、ちやんと馬車の用意がしてあつて、今日は午前中に

輕罪裁判所を觀て、サボイ、ホテルで晝飯を喫べて、午後は重罪裁判所を觀て、夫から三時何分とかに、セントパンクラス停車場から汽車に乗つて、シエフキールドに下るのだといふ。所謂裁判所と晝飯とは分つて居るが、汽車に乗るとは何するのかと問ひ返すと、君のお望みの「ミカド」が、今晚シエフキールドでお名残り演奏をやるので、昨晚電報を打つてボツクスニーの取つて置いたとのだ。夫にしても、夜の八時に初まるものを、三時の汽車で行くとは、いくら早いのが商賣でも餘りぢやないかといふ。僕はシエフキールドを倫敦の町外れにでもあることとばかり心得て居たのだ。所が其の實シエフキールドはマンチエスターのついで傍で、此處から百五十八哩とかあつて、三時の汽車が最急行で、夫で行つてもヤツと八時十分前に着く位。今晚は無論彼方で泊る筈で、ホテルの方もちやんと電報で部屋を明けさせてあると、マ君が笑ひながらいふ。如何な僕も之を聞いて我を折つた。名も知れぬ僕等の原稿を求むる爲に、之ほどの用意迄して呉れたかと思ふと、僕は嬉しいやら耻かしいやら、何とも言へぬ一種の感に迫つて、此處に初めて何か書かうといふ決心が

ついた。尤も書くにした所が、見物に四五日を費した上、のんびんくらりとやる積であつたことは、勿論である。

斯くて其の日は豫定通りに、裁判所を觀て、御馳走になつて、シエフキールドに下つて、芝居を見て、ホテルに泊つた。翌朝は二番の汽車で倫敦に向つたが、其車の中で、マ君は今から倫敦迄三時間もかゝるから、此處で原稿を書いては何かと言ひ出した。僕はぎよつとした。先づペンがないといふ。鉛筆でよいといふ。紙がないならやらうといふ。字引が入用だといへば、分らぬ字は相談に乗らうといふ。何と言つても逃げさせぬ。仕方がないから、とうとう一枚書き二枚書いた。書く毎に、マ君は讀んで見て、今少しくと側から催促するので、愈倫敦へ着く迄に、第一回は全く出来上つて仕舞つた。

成程、之位に金をかけて、根氣よくつき纏つて催れば、どんな原稿も手に入る筈だと、僕はほとく感心した。

○ライシウム座

汽車をシエフキールドに下るや否や、ホテルに革袋を投り込んで置いて、其儘馬車をライシウム座に飛ばせた。恐らく、今日は「ミカド」の見納めといふので、近郷から態々見物に出かけた者も大分あつて、場内は早く満員となつて居る。僕はマッケンジー君と、豫て注文して置いたボックスに入ると、演藝は今其の第一幕を初めたところ、花やかな友禰縮緬のキモノを着けた美しい娘が、三十人ばかり今しも舞臺の真中で扇子をかざしながら、「アワー、グレート、ミカド」の節の合唱をやつて居る。本場の黄色いのが、態々百五十哩たか六十哩たかの先から見に来て居るとは、よもや知るまい。

一幕が済むと、棧敷一面ぱつと電燈がつく。日本人が居るとて、皆々目を僕の方に注ぐ。上下を舉げて、寄ると觸ると、「ミカド」興行禁止の噂ならざるはない今日、僕の目これるのも無理のない話で、翌日のシエフキールドの新聞には、僕を宮内省のお忍人と間へ

て、何でも興行禁止問題取調の爲に來た者のやうに傳へたのがあつた。幕間が十五分あるので、茶でも喫みに行かうかと相談して居る折柄、座方の方で、一度取締役の部屋迄來て呉れぬかと言つて來た。マ君と一所に行つて見ると、何處の劇場が裏に回れば汚いもので、事務室の中には、紙片やら明瓶やら一杯に引散して、卓子や椅子が幾つか横筋違に立ち列んである。其中で先づ興行權主のサボイ座の取締役といふ、太つた快活な老人が出迎へる。引續いてライシウム座の若い取締役も出て來る。マ君が例に依つて『有名なる』を頭に

つけて僕を紹介する。遠來の珍客に茶菓でも差上げたいからとのこと、茶が出る、炭酸水が出る、ウイスキーが出る。サボイの老人、盃を舉げて又して唱ふる「日英同盟」の萬歳。さて、世の中に「日英同盟」ほど下戸の閉口するものがあらうかい。

後二幕で「ミカド」が無事に演了されて、いざ歸らうとすると、老人又呼びに來た。今度は最後の祝盃を舉げやうといふので、列み居る一同の盃に酒をなみくと一杯注がせ、一杯つがなければなかく飲まうとは言はず。飲んで仕舞へば、又注ぎ又注ぎして、今度は

天皇陛下、今度は伏見宮殿下、今度はエドワード第七世といふ風に、止度なく祝杯を擧げて果しがない。其の中段々酔が回つて、何の話から初まつたか、老人望遠鏡のことから、星の距離を算定する公式とかの講釋をやり出して、滔々と大氣焔を吐き出した。何でも、此老人は、昔し海軍大學校の天文學教授であつたのを已めて、劇場取締になつたのださうだ。何百年目に何といふ星が出て来るなどいふ廻り遠いことを研究するよりは、幾日間の間に何人お客が来るかといふ勘定の方が餘程面白いと、老人は慨然として笑つた。

僕がうツかり口を滑らして、女優の三味のひき方が、飯でも盛るやうな手つきで、如何にも可笑しいといふと、老人、何うひくののだと言ふ。僕も「日英同盟」の大分利いて居る折柄として、口先では説明が出来ぬから、三味を持つて来いといふ。「日英同盟」許りか「エドワード第七世」迄が大分利いて居る老人、三味線と一所に、ヤム／＼に扮した女優迄呼んで来た。僕も今更後へは引かれず、左も心得たやうな顔をして、竿の持ち様から撥の取り方迄説明して聞かせた。愚圖々々して居ると、次手に何か「つやれとでも言ひさうなので、

僕はマ君と共に、早々此處を逃げ出した。

劇場の出口は、孰も皆既に鎖されて居るので、やつと事務所脇の非常口を明けて貰つて外に出る。夕方からの雨は尙小歌なく降つて、風さへひゆう／＼と吹き荒んで居る。

○無名の投書

話頭が下に下つて甚だ相濟まぬが、此前萬國花柳病會議の開かれた時、各國の委員は孰も花柳病豫防の策として檢微強行の法を採るを最上とすることに一致したが、獨り英國の委員ばかりは、何しても此説に賛成しなかつた。段々其の理屈を聞いて見ると、英國では、賣笑婦自身に微毒の怖るべきことを知つて居て、他の注意を待つ迄もなく夫々自ら之が豫防の手段を取るの、なまじひ之を法律の力で強行しやうなどいふと、却つて之に依頼して注意を忘れる虞が起るとのことであつたさうな。英吉利人が賣笑婦の末に至るまで、自治の精神に富んで居ることは、此の一事でも知れる。

凡そ不文法の精神は、英國の至る所に存して居る。命せずして行はれ、令せずして従はるゝは、英國獨得の長所で、法律はなくとも、勅令は出ずとも、萬事萬端さちんと定り切つて、一絲亂るゝ所がない。尤も、中には理屈も何もなくして、唯だ多年の習慣で定つたものも大分あつて、慣れぬ間は随分小面倒なことが多い。僕は日本を出る時、黒色の革蓑を買つて行つたが、英國で黒色の革蓑を使ふのは婦人ばかりで、男子は必ず茶色を用ひる。或朝雨が降つたが、街道を見ると一向傘を持つた人が見えぬので、革蓑の裏に懲りた僕は雨が降つても傘をささぬが英國の習慣かと、飛でもない輪を吹いて笑はれたこともある。朝は何を食ふか定つて居る。夕には何を着るか定つて居る。段階子で人に行き會へば、何方へ避けるか、自轉車に乗つて道を曲る時は、何方の手を擧げるか、皆ちやんと定つて居る。定るべき道理のわつて定つたのはよいが、左もなくして無暗に定つたのは、様子を知らぬ外人を惑はしむること夥し。

僕が「メール」に書いた第一回の感想は、先づ此の「習慣の壓制」に一撃を加へたのであつ

たし所が「メール」で業々しい小引を之に加へたのと、日本字やら僕の寫眞やらを入れたのが人目を惹いたものと見えて、之が案外の評判となつた。之に氣を得て、僕は二回三回と引續いて原稿を送つたが、其の間もマ君は自働車で迎へに来て、ノースクリップ卿の本邸へ連れて行つたり、ヒズ、マゼスター座の沙翁劇を見せた後、トロカデロ樓で三鞭を飲ませたり、僕が初めに注文した通りのことを順々に行つて呉れた。朝の内は、原稿や通信を書く。午後には、校正のゲラ刷と共に、マ君の案内が来る。今日は國民自由俱樂部で晚餐を喫し、アルハムプラの寄席に行くこと。服装はスモーキング、ジャケット、襟飾は黒の蝶形。』などと書いてある。僕の投書中に、英吉利の服装の小むづかしいのを笑つたので、先生冗談に態々服装迄書き入れて來るのである。

兎角して、とうとう約束通り七篇の投書は結了した。此の間に讀者から僕に宛て、批評を送り越した者は幾人だか知れない。中にもメリー、ジョーンズといふ夫人が、小形の野紙十三枚に細かく一杯に書きつめて、僕の婦人論を堂々と攻撃して來たのには、僕も少々驚い

た。其外褒めたのもある、貶したのもある。僕の投書に何等の關係もない様々のことを言つて来たのも有つた。其中には、僕の觀察に對する批評は申す迄もなく、洋服屋の注文取りがある、切抜通信の申込がある、音樂會、展覽會の案内がある、書物を呉れる人がある、書物を書いて呉れといふのがある、雑誌の原稿を頼みに來るのがある、繪端書の御注文がある、病院を見に來いとの案内がある、日本に隱居したいが生活費が何なるのかとの聞き合せがある、講筵を申し込んでくるのがある、日本の友人の安否をさぐりに來る、日本の下女の世話を頼みに來る、プリストル迄遊びに來ぬかとの問ひ合せがある、パーミングムへ來たら寄れといふのがある。「メール」は賣高の多い新聞とて、僕の投書は餘程廣く讀まれたものと見えて、到るところ「メール」で承知した由話しかけられる。僕は大に面目を施した。中にも難有いと思つたのは、レミントンといふ所から、二三日泊りがけに來いとの書面を引續いて四度も受けたのと、倫敦音機及印字機會社から、立派な大聲音機を一臺送つて呉れたのである。新聞の讀者が、之ほど熱心に讀んで之ほど熱心に批評してくる

のは感心の至りながら、僕が殊に、流石は英國と感じたのは、此等の數多い書面中、如何に手烈しい攻撃を寄せた者でも、一として匿名のものはなく、盡く宿所姓名を明に書き入れてある一事であつた。日本なら、新聞の記事を見て、批評を寄せるなどいふことは、好事の骨頂と認められて、偶之を寄せても、十中の九分九厘は匿名である。現に倫敦でも、僕は或日本人からの批評を頂戴したが、之ばかりは匿名で、而かも「八人の同胞を代表して」など、多數を頼んで出られてあつたので、何處迄も國粹を保存せらるゝ哩と、僕は可笑しかつた。僕は日本の新聞にも、歐羅巴風の讀者を得たいものと、切に希望して居る。

○瀬山壽君

倫敦のキングスクロス停車場を八時に發した急行列車は、無二無三に北に走つて、途中一回も停車せず、頓て二時間半も走つた後、列車は尙どんくと北に向つて進行を續けながら、唯僕等の乗つた最後の客車一輛だけを颯と切放して、ハンチンドン停車場で留め

ナ。スリッパ、カーといふのださうな。
 プラットフォームには、年配五十位の日本人が子供を連れて立つて居る。僕の姿を見ると、急ぎ其の側に飛んで来て、僕の革靴を取つて、恭しく僕の手を取つて、車の外に助け出して呉れた。『卿は瀬山さんですか』と尋ねる。相手は口をもぐ／＼させて、何やら言ひ続ける様子。頓て思ひ切つたやうに、『杉村君でせうな』と、はつきりと英語で答へた。斯う英吉利語で出られると、勢ひ手を出さずには居られぬ。互に手を握り合ふ。先生、一寸連れて来た子供の方をふり返つて、『デス、イズ、マイ、サンシー』。さてもえらいことに成つて来た。

「メール」の投書以来、請け取つた様々の書面の中に、一寸見當のつかぬのが二通あつた。一はレミントンのおさる老人から、二三日遊びに来いと言つて来たので、之は後に説く積りだが、今一つはハンチンドンの瀬山何某といふのから、之も矢張り遊びに来て呉れといふのであつた。「何某」と言つて、敢て輕蔑の意を寓したのでない。實は其の書面が英文で

あつて、本名が確と讀めなかつたのである。

此の書面に依ると、瀬山君は、卅年前に横濱から、バーナードといふ船長に連れられて、當地に来て、其以來は、バ氏の家の客となり、バ氏が死んだ後、其の夫人に仕へて、今も尙賤しい召使を勤めて居る。斯ういふ身分で、御案内といふのも失禮とは思ふけれども、何うかして一日遊びに来て下さるなら、非常の光榮と存する、とのことであつた。其の書に振が、如何にも丁寧で、如何にも誠實に来て欲しいらしく見えたので、僕は漸く半日を都合して、今日しも此處へ来て見ると、瀬山先生此の三十年間に、全く日本語を忘れて仕舞つて、英語の外は一切話せぬといふ始末。

僕も仕方がないから、到頭英語を使つた。初めは、何だか馬鹿臭いやうな氣がして、動もすると、日本語が口元まで出かけて来たが、此地の町立病院を見たり、麥酒醸造場や馬車製造所に案内せられたり、クロムツエルが初めて教育を受けたといふ小學校や、其の洗禮を受けた教會堂などを見て、二時少し前、愈々夫人の宅へ着いた頃には、僕も何時しか

瀬山壽君

百二十

慣れて仕舞つて、夫人の前では、二人とも一向平気で英語を喋つて、却て夫人から笑はれた位であつた。英吉利に來てから、随分ゝゝのともあつたが、僕が三味線の引き方を教へたのと、日本人と終日英語で語り暮したやうなとは、恐く後にも前にもあんな有りませぬ。

バ夫人の宅は、クロムウエルの生れた家で、今も尚ほクロムウエル、ハウスと唱へて居る。平生は、其妹と二人暮したが、今日は何處かに片づいてゐる今一人の妹も、僕を見旁來て居る。息子の辯護士も、態々倫敦から來る筈であつたが、まだ見えぬといふ。家の中は、日本畫や日本刀や、其外日本から持て來た骨董品を一面に列べて、彼は何處で買ったもの、此は誰に貰つたものと、夫人は一々説明して聞かせる。言ふ迄もなく、夫人は大の日本好である。瀬山先生、自分も士の子だとして、刀を一本持つて來る。夫人が、何か二人で日本語をやつて見て呉れといふから、僕は其刀を指して、「之は君のですか」と問うたが、君には一向分らぬらしい。三十年前に恐らく「君」といふ代名詞がなかつたらうと思つて、今度は「此刀はアナタのものですか」と問うて見たら、僅に分つたと見えで、肯いた。

瀬山君は、盛岡の藩士で、其の弟さんは、今同地で盛に林檎栽培をやつて御座る。此處の瀬山君は、十五六の時當地へ來て、英吉利の婦人を娶つて、男女合せて三人の子を擧げ、今は英國に歸化して、英國の臣民となつて居る。本國と書面の往復がしたくても、日本文が分らぬので、丸龜の中學に居る親戚の某學士を介して、一々翻譯の上で送るのださうな。小さい町の中で三十年も居たことゝて、ハンチンドンの中の村中で、何處に行つても瀬山君を知らぬ者は殆どない位。サンドキツチ卿の邸を見に行つた時、門衛が居ないから、其儘無断で入つて、屋敷を一巡して後、又門を出やうとすると、後からコラ〜と呼ぶ者がある。英吉利でコラ〜は珍らしいと思つて、ふり返ると、雲を突く大男が立つて居る。瀬山君は打笑つて「泥棒でないよ」といふ。大男も笑つて、「ハ、ア君か、君ならば二十年來の友達」といふ。至る所之である。

バーナード夫人の宅で、午餐の御馳走になり、午後は瀬山君の娘等と近邊の名所を見て回つて、夕方僕はレミントンに向つた。(六月十五日)

瀬山壽君

百二十一

○汽車の乗替難

ハンチンドンからレミントンへ行くには、大西線と中央線と二つあつて、何れを行つても、途中で二三度乗り替へなければならぬ。先づ中央線の方で時間を聞き合すと、何うも當會社の線には、都合の宜い列車がないから、一度大西線を開き合せては何うだらうかと注意して呉れた。成程私立の會社が個々分立して居ても、斯う打明けて話して呉れると、分立の不便は餘程少くなる。去年和歌山市から名古屋へ出やうとしたことがあつたが、市驛では、關西線と連絡がないと言つて、中々手荷物の連絡輸送を引受けて呉れず。ヤツと驛長に懇願した上で、和歌山驛乗換のことを計らつて貰つた。和歌山驛と和歌山市驛と、互に目と鼻との間でありながら、會社が違ふと斯ういふ不愛想な取扱ひを受けるのである。大西線の方に行つて聞き合せると、驛長は時間表を彼此と引繰り返した後、ケタリングとレスターとラグビーとで乗り替へれば、十時にレミントンに着くが、通し切符の用意が

此驛にないから、ラグビー迄の切符を差上げやうとのことであつた。斯くて此由レミントンへ電報を打つて置いて、四時過に乗車したが、レスターに着いて聞くと、ラグビーを廻つて十時にレミントンに着くのは、土曜日の汽車に限るので、今日は生憎とそんな都合のよいのはないといふ。僕ははたと當惑した。居合せた驛夫に、何とか仕方があるまいかと相談すると、驛夫は、倫敦西北線の直通列車が八時に出るから、夫で行くが宜からうと教へて呉れて、件の倫敦西北線の停車場は、何のブリツヂを何う涉つて、何う曲つた所に在ると迄、細かく聞かせて呉れた。

教へられた通りに行つて、此處で又事情を話した所が、驛員は氣の毒がつて、之からレミントン迄の切符を買へば、ラグビー迄の切符は無効になるから、其由大西線の會社へ通じて料金の拂戻しをお受けなさいと言ひながら、僕の切符の裏へ、レスターとラグビー間を使用しなかつた由、書き入れて呉れた。差金は僅か一志位で、拂戻しを求むる程のこともないが、驛員の好意は謝せざるを得ぬ。

ヤツもツツさの揚句、とうとう十時にレミントンに着いた。停車場に来て居る筈の迎が誰も来て居ないので、一寸まどついで居ると、僕と同じ車に居た若い男が通りかゝつて、失敬だが道が分らぬなら案内しやうと言つて呉れる。厚く其好意を謝して、其後に尾いて、目ざす家迄着いたが、女中が出て来て、主人は僕の電報を見てから、時間表を調べると、ラグビーからそんな時間に來る汽車は見當らぬので、不案内の土地でまどついでは氣の毒だと言つて、能々ラグビー迄迎へに出かけたとのことであつた。成程、此處の主人のやりさうなことだ。翌朝になつて聞くと、ラグビーでは晚餐の用意迄して夜の十二時待つて居て呉れたのださうな。

主人といふは、デビス翁とて、四十年前日本に居つた大の日本好の老人である。「メー」に出た僕の投書から、つい知り合ひになつて此方も、五日ほど泊りがけに來て遊んだことがあるが、今度來たのは二度目に當る。

○デビス老人

滿地の青芝左ながら甍の如く、目も遙に敷きつめられて、其間を彩どるメーの花の紅なる、バーナムの黄色き、ライラックの香高き、バターカップの艶東なきなど、とりとりに咲き亂れたる此處レミントンの公園を、リームの流れに沿うて、僕はデビス老人と歩いて行く。實にも西歐羅巴に至る所花の都。今までは外國人のお世辭を眞に受けて、日本が世界一の花の國でもあるやうに思つて居たのが我ながら耻かしい。

今日は日曜日とて、打鳴らす鉦の音の遠く近くに聞えて、老いたるも若さるも、バイブル片手に教會堂に急いで行く。突如として一輛の馬車が、颯と風を斬つて通り過ぎる。

「アッ人殺し！」老人が呼ばゝる。デ君は醫者を「人殺し」辯護士を「泥棒」といふのが口癖である。自分は、大のクリスチアン、サイエンスの信者で、一切の病は邪念妄想から出るに過ぎぬと唱へて居る。『教會にも行かんで、彼奴は又人を殺しに行きおる』と、老人は、矢

テピス老人

百二十六

つぎ早に、後から遊矢を射かけた。

デ君は、維新前に六年日本に居たことがある。其の頃は、浪人が屋外人を斬つて鼻首の刑に處せられたものだが、デ君は、其の鼻首臺の前を通る毎に、必ず恭しく脱帽して、此の愛國の志士に敬意を表したといふ。日露戦争の初に、日本人は成算のない戦争をする者でないから、必ず勝つに相違ないと言つて、衆議に抗して、賭をやつて、大に勝つたといふ。又日本の騎兵が不足と聞いて、自ら一隊の騎兵を募つて哥薩克と戦はんことを申し出たが、國際の關係が何とか斯とか小面倒なことを言はれて、其の志を果さなかつたといふ。又露艦が上海へ逃げ込んだ時、夜中竊に碇網を切つて港外に押し出してやらうといふ大計畫を立てたが、生憎眼病が急に發して已めたといふ。濠洲から北米南阿と、世界中を駆け回つて、南阿では、セシル、ローズの下に、排英主義の蘭人にク、デタを食はせやうとしたことさへあるといふ。そんな人だけあつて、老人時々中々えらいことを言ふ。

金が欲しくはないかと問ふ。『ないこともないが、儲けるのが面倒臭い』と答へる。此に

テピス老人

百二十七

於て、老人は面倒臭からずして、金を儲ける法を二つ僕に教へて呉れた。日本の膨脹が望か夫とも今の分で安じて居る積かと問ふ。『夫は機會次第』と僕が答へる。此に於て、老人は、國の膨脹には弱者先づ打つべしといふ原則に基くべしと云ふ。今現に打つて亡ぼすべき國が、世界に二つあることを、諄々として説いて聞かせた。此奴は一寸此處に舊く譯に行かぬ。デ君は、猶太人が嫌ひ、亞米利加が嫌ひ、獨逸が嫌ひで、日本ほど氣に入つた國はないといふ。或朝僕が嘘をしかけて已めたら、出かけた嘘は出して仕舞はぬといけなないと、ナポレオン第一世とかい言つたといふので、僕を態々近所の烟草屋へ連れて行つて、嗅煙草を一包買つて呉れた。歸つて之を鼻に入れて見ると、滅法界痛い。こんな痛い思ひをするよりはず、僕は手早く有合せた半紙で紙捻を作つて、鼻に突ッ込んだら、事も見事に「はあくしやう」と出たので、老人大に感心して、之だから私は日本が好きだと仰せられる。僕も嘘をして感心して貰つたのは、今度が初めてである。

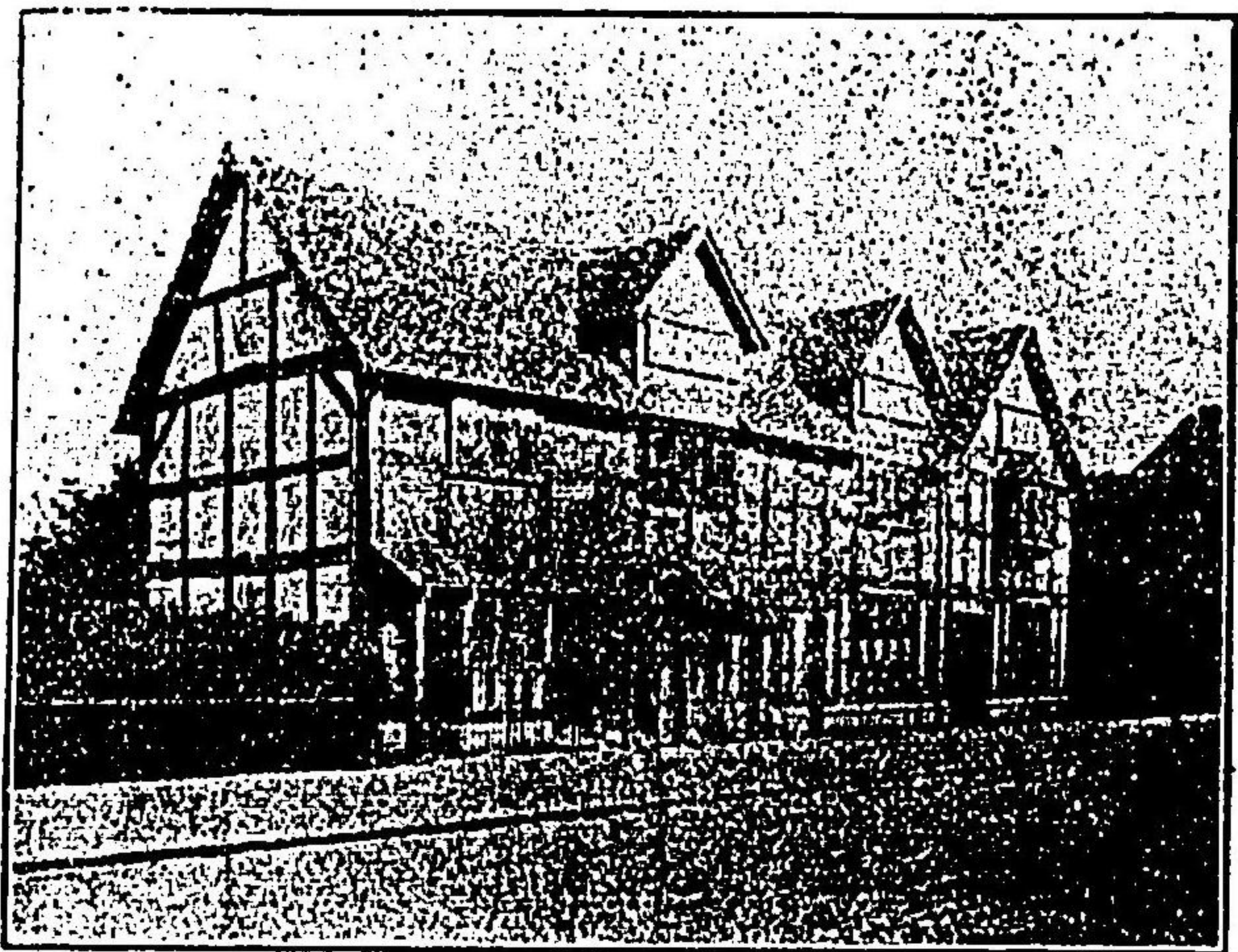
五大洲を丸呑みにしたやうな議論を吐くかと思ふと、老人忽ち嘘に感心する。恐ろしい

デビス老人

百二十八

元氣のいゝ話をするかと思ふと、一方には又極めて涙もろいことをいふ。此前もさる縁日に行つて、貧しい小供が、見世物にも入れずに立つて居るのを見ると、忽ち一掴みの金を木戸番に與へて、其處等に居合せた十幾人の小供を一度に入れてやつた。又ケニルウラーヌ城の敗墟の芝生に坐つて、昔横濱で葡萄牙人の某を殴つた時の話をして居たが、忽ち郭公が啼いて居ると、矢鱈に人を木橋の上に引つ張つて行つた。小羊を見て、彼奴を焼いたらといふ所は殺伐だが、晚餐の後老夫人にピアノを引かせて、己は朗々と戀の歌を歌つて、昔は斯なものを歌ひ合せたこともあつたのだと笑ふ所は、頗る罪がない。——今度若しわが讀者の中に、レミントン附近に出かける人があつたら「朝日新聞」で見たと云つて、是非尋ねて呉れ玉へ、老人必ず喜んで相違ない。尤も今度、嘘をして見せた所が、僕ほどにめてはします。

やゝ暫く公園で遊んで後、リム河を渡つて歸らうとすると、はや教會歸りの美人が追追やつて來た。デ君は、早く歸つて宅だけの禮拜をやらうと難有いことをいふ。



家 生 の 翁 沙

○アボンの流

一日、例のデビス老人と、沙翁の生地ストラトフアード・オン、アボンに出かけた。此の曠世の詩人が生れたといふ家を見舞ひ、其の遺骨を葬つたといふ墓に詣で、ぶらり〜其の邊を歩き回つた揚句、來るともなしに、何時しかアボン川の岸に出て來た。川に臨んで、氣のきいた小さなホテルがある。鵝の巢館といふ。何な巢だか一遍入つて見やうとデ君が言ふので、一所に其の酒場に入る。バーには若い小意氣な女が居る。バーの前

アボンの流

百二十九

には、大卓子があつて、其の兩側に腰掛が列んで居る。僕等が之に腰を下して、麥酒を注文すると、丁度僕等の前に、矢張り麥酒を飲んで居た一寸貴族の馬丁頭といふやうな風の男が、『何もお天氣がはつきりしませんな』と挨拶する。『昨日は折角のお出でしたが、生憎に雨でお困りでしたらう』といふ。合點の行かぬことを言ふと思つて聞けば、此の男は、昨等日僕が見に行つたレー卿の邸に居る者だと分つた。此處へ又一人、戸を排して來た若い男がある。身扮から、風采から、何だか此の邊の金持の子息らしい。バーの女に何やら冗談をささながら座に就て、ボンチを取り寄せた。後で聞くと、大學で電氣工學をやつて、卒業の後何處とかの技師になつたが、面倒臭くなつて、今では家へ歸つて遊んで居るのだといふ。大分のんきな方だ。

一所に飲まうぢやないかと、例の工學士が発言する。一同ボンチの盃を舉げる。老人だけに、話の緒がデ君の口から開けて、昨日レー卿の邸で催されたクリケットの評判から、馬丁頭が自分の生國蘇格蘭の自慢話となり、工學士の蘇格蘭攻撃の餘波が、蘇格蘭出身

の現首相の人物評となり、デ君が更に之を横道に飛ばして、自由黨内閣の無能を罵るやら、チエンバレンの關稅政策を辯護するやらで、とうとう一大混戦となつて來た。盃は幾度か乾されて、幾度か注ぎ直される。其の度毎に、デ君が金を拂はうとすると、何時の間にかやら例の工學士が拂つて居る。そんなことをしてはいかぬと、デ君が争へば『君が拂ひ損ふのが悪いのだ』とて、一向取り合はぬ。

『一體今の首相の名は何だい。』工學士が眼の縁を赤うして、意地悪く問ひかける。

『蘇格蘭人さ。』馬丁頭は傍へ外らせる。

『名を聞くんぞ、名を。』

『君は首相の名も知らないので、英吉利に居ながら「カンプルバナマン』と。』

『も一度、はつきりと言つて呉れ玉へ。』

『カムプ』と、今度は少し切つて、馬丁頭は『バナマン』と續ける。

『ソレ其處だ。』バナマンが何で「カムブル」を頭につけたか知つてゐるか。カムブル家の



トラスポートのニチチ會堂

財産が相続したさに、人の姓逆背負ひこんだのぢやないか。』

『さうか。馬丁頭が機嫌よく笑ふ。』

『さうかぢやないよ。』工學士も拍子ぬけがして笑ふ。

一同皆笑つた。バーの女迄吹き出した。蘇格蘭の話から、倫敦警視廳のことに轉じて、工學士は、倫敦で十二時過に酒を飲まうと思ふなら、警察のバーに行くが一等だと、不思議なことを言ひ出す。『そんな馬鹿なとはない』と馬丁頭が笑ふ。之でも亦一花咲せた。識れば親しき英吉利人の常として、僕を外國

人らしくも扱はず、打解けて、且酌み且つ語ることに、三時許りにして、僕等は此處を出た。アボンの流徐かに緑樹の間を流れて、トリニチ會堂の塔尖に、夕日の影微に紅を留めて居る。デ君忽ち上着を脱いで、シャツ一枚になり、岸邊の小舟に僕を誘ひ入れて、『僕が漕ぐから君は舵を取れ。』といふ。——先生宅へ歸れば細君に叱られるに定つて居る。

○ケニルウチース

コペンハーゲンのラツヂウオース自動車製造會社の案内に依つて、僕とデビス老人と會社の役員ソングース君と、三人連自動車で今しもバーミンガムに着いた。先づ同社の工場を一覽する。今丁度晝休みといふので、工場長自身が案内して、自轉車の小道具を製造する自動機械場を見せて呉れた。廣い工場に、器械が彼此二百臺も列んで居て、人一人居ない。工場長が、二つ三つ機械の脇にある槓杆を動かすと、幾十臺の機械が一時に運轉を初める。番人が一人も居なくて、どんなものが出來るかと思つて居ると、



ニケウリス城の敗墟

ケルウサチス

百三十四

自動機械の作用で、丸い鉄棒が順々に器械に喰はれて行つて、程よい加減に切れて取れる。取れた奴がぐる／＼と舞ふかと思つて居る中に、中が轆れて輪になる。其奴が又機械に喰はれて、暫く姿を見せぬと思つて居ると、今度はぱたりと下に落ちる。見れば輪の内側に牝螺線が出来て、外側にはギダ／＼が一杯についてゐる。其の途中に、油が自然に流れ出る。削られた鉄屑が自然に棄てられる。一つ出来ると、丸い鉄棒が又にゆうと喰はれて来る。斯くの如くにして、人一人の力を借らずして、釘が出来、スクルーが出来、輪が出来、自動

車につくべき一切のこざ／＼した小道具が、皆獨り手に出来て来るのである。成程、斯う人間が不用になつては、貧乏人も出来る筈だ。今でこそ労働問題など、問題の中にも「働」の字はつくが、此の次には遠からず遊食問題が出て来るに相違ないと、僕はつく／＼不快を感じて、此處を出た。

停車場脇のホテルで、會社から午餐の御馳走になり、老チエンバレンが死にかゝつて居るから見舞に行かうと、例の關稅政策の熱心家デビス老人が言ふので、又自動車をチ氏の宅へ飛ばして、名刺を門番に残しおき、夫から一度コベントリーに歸つた後、今度はケニルウフォース迄自動車を走らせた。

コベントリーからケニルウフォース迄は、先づ坦々たる大道の如く連なり、之を挟んで鬱葱たるポプラーの大樹が、目の届く限り立つて居る。行き盡すと一長坂の頂に出る。彼方を見やれば、道はだら／＼と下りに下つて、其の底から又だら／＼と上りに上る。丁度彼方の坂の頂が、此方と同じ程の高さなので、其の間の三四哩が程は、下る時は先細にな

ケニルウサチス

百三十五

ケニルウヲース

百三十六

り、上る時は先太になつて見える。ちとむづかしい形容だが、長〜二等邊三角形の白紙の片を頂點で合せて、べつたり青い紙の上に張りつけたやうな。之を自動車か唸り聲を立てて、全速力で走り下り走り上る快は、逆も、スナツフを喫いで嘔をすると同日の談でない。古い嘶だが、さる所で、さる時、英國中で最も散歩に面白い道を投票したことがある。投票を開いて見たら、投票者の半分は、コベントリーからケニルウヲースと書いてあつた。而して後の半分は、ケニルウヲースからコベントリーと書いてあつたといふ。之ほどに知られた道である。

ケニルウヲースに着いて、ソングラス君と分れて、又ケニルウヲース城の廢墟を見に行つた。之で此處へ来るのが二度目で、僕は英吉利中で、之ほど面白い所はないと思つて居る。崩れかゝつた城壁、蔦生ひ重なつた石柱、青芝の上に白を點する羊、昔は湖であつたといふ廓外の野、レスター卿の寵姫アミーが身を投げたといふ木橋、城門の跡、土牢の跡、見るとして、昔を偲ばせぬはない。若し夫れ、其の昔大饗宴場であつたといふ今は礎は

かりを存した廣庭に出て、エリサベス女王を主賓に、幾百のロードやレデーが、綺羅星の如く居流れた當年の盛況を想ひやると、今も尙、髮飾として、扇影の婆娑たると、劍光の燦爛たるとに接する思がする。

僕が斯んな事を考へて居る間も、デ君は滔々と、關稅政策を論じ、自由主義の愚を罵り、はては一轉して、日米の關係に及び、日本が亞米利加と戰爭するなら、今の中に限る、バナマが開通して、大西洋の船が自由に回航するやうになつたら、もう取り返しがつかぬなとと、まくし立てる。

○ナイチンゲール

ナイチンゲールの啼聲を聞かうといふことは、豫ての望みであつた。日本では、誰が間違へたか、之を怨と譯して居るが、大ささから言つても、小鳩ほどあるといふし、日が暮れて啼くといふし、夫に嘯り方も、流石に宗旨が違ふだけあつて、法法華經とは啼かぬさ

ナイチンゲール

百三十七

うな。然らば則ち一度は大に聞かざるべからずといふので、デビス老人を唆して、愈々今晩出かけることとなつた。

丁度此日、レミントンの電燈會社技師長ジョーンズ君から、晚餐の案内があつたので、先づデ君と會社の工場を一覽した上、其の足で直ぐ技師長の宅へ行つた。食事は主客三人ぎり、打解けて且つ語り且つ盃を舉げた。主人は、先年患を腦つてから、耳が遠くなつて、殆ど金盃同様、デ君は大の近視で、平生三四度位の眼鏡を掛けて居る位。斯いふのが二人寄つたのだから、一方が聞損つて、飛んでもない所で高笑ひをすれば、片方は見損つて、途方もないものを口の中へ煩ばる。デ君、ナイチンゲールは何の邊で聞けるだらうかと問へば、シ君、左様さ、今年の様な雨續きは、六十年振だといふ。シ君は、デ君が見失つたスプーンを指さし示せば、デ君、あたふたと其處等を探し回る拍子に、したゝか葡萄酒の盃に額をぶつける。堪へ兼ねて、僕が思はず吹き出せば、此の近い眼と、遠い耳とが、ひたゝと僕の顔の側へ寄つて来て、何が可笑いといふ。何が可笑しいも能く出来た。

此の頃此の邊では、暮ること甚だ遅くして、十時過に、尙人の顔が明に見える。食事が済んでも中々暮れさうにはないので、今度は三人連で、技師長の宅の向側に住む時計屋の主人チャンドラー君の宅に出かける。之は前以て技師長から話があつて、暮れる迄、此處で食後の音楽を聞かうといふのであつた。チャ君夫婦は快く出迎へる。妻君といふのは、英吉利風のきりつと締つた美人で、之が弾するピアノに合せて、十一になる娘がバイオリンを弾く。此娘の妹に當る小さい娘が、親類から来たといふ甘許の娘の膝に抱かれて聞いて居る。やがて、幾番かの絶なる調に、心時めき來つて、デビス老人は、濁聲高く、「ホーム、スキート、ホーム」を歌ひ出す。眞面目なジョーンズ君迄が、忽ち立つて、頻に首をふりながら歌ふ。嗚呼、光眩き電燈の下に、香高き花たわゝに挿した大花瓶を中にして、時候外れの暖爐の火快く燃ゆる傍に、僕等が安樂椅子に埋つて、シガー片手に聞き惚れた此の夜の樂かつた様を、あはれ、幾年か思ひ出さず居られやうか。

頼て、妻君や娘達は皆引き下つて、僕等四人だけ居残つた。ウキスキーが出る。例に依

つて「日英同盟」の祝杯が擧がる。デ君とジ君の要領を得ぬ話が始まる。チャンドラー君、頗るの悪戯すきで、デ君が酒を飲まぬといふのを、何とか彼とか言つて飲ませる。デ君が、例のクリスチアン、サイエンスで、近來烟草を已めて居るのを知つて居て、態々シガーを其の手近に置く。デ君は關稅政策か何かを滔々と辯じ立てた揚句、我を忘れて、うつかり之を手にする。チャ君は、眼縮兒でも捕るやうな氣になつて、僕の耳へ「そら來た〜」と囁く。デビス老人なかく〜喫はうとはせぬ。チャ君は、堪へ兼ねて様々に説き立て、やつと老人に喫はせて仕舞ふ。チャ君の喜びは一通りでない。

頗てポーカーが初まる。ポーカーなら、僕も聊か心得はあつたから、餘り負もしなかつたが、眼の悪いデ君は、思ひ違ひ許りして大分負けた。負ければ負けるほど尙續ける。いたづらなチャ君は、此の寒いのにナイチンゲールなどと啼くものかと言つて、引留める。夫や此やで、夜は深けて、此處を出たのは十二時過。暗を貫くライラックの香が、何處からともなく夜風に傳はつて來る。成程斯う寒くては、ナイチンゲールも出さうにない。

話が倫敦小品から、何やらレミントン小品になつて仕舞つたが、デビス老人とは一先之で分れる。

○日本人俱樂部

倫敦に日本人會と稱ふる俱樂部がある。誰も、ないとは言はぬ。言つた所が、矢張りある。有る者は有りとは、論理の定則である。有句無句は藤の樹に倚るが如し、忽然として樹倒れ、——いや、そんなことを言ふ積でない。

兎に角、ある。地下鐵道のレストー、スクエア停車場を下りて、或は上つて、其の邊でキング街の卅九番地と巡查に聞けば、「ハ、ア御國の俱樂部ですな」と言つて、教へて呉れる。細い入口から、二階に通れば、食堂と讀書室とがある。三階には、應接の間と手水場がある。四階に上れば、此に玉突場がある。丁度鰻が岩と岩との間に頭を突込んだ様に、二階三階がうね〜と人の家の間を潜り抜け九様な家だ。が先伯林のクラブよりは、大分

日本人俱樂部

小奇麗に出来て居る。荒川眞澄君といふ恐しい玉突の上手な辯護士が取締をやつて、英吉利の書記が獨り居て、給仕や厨夫は大抵日本人を使つてゐる。鰻の蒲焼、比良目の刺身、海老のテンブラ、菜の浸し物、大根の鹽漬、其外一寸した日本料理は何でも出来るので、此も「タイムス」のスコット君夫婦を招いて、午餐を饗したら、非常に旨いと言つて、「一つも残さず平らげた。二人ながら一つも残さなかつたところから見ると、まんざらお世辭でもなかつたらしい。日英同盟でやかましい折柄とて、倫敦の眞ん中の日本料理は存外にもてるのである。

日本の飯が食へ、日本の新聞が讀めるといふので、夕方からそろ／＼會員がやつて来る。會員許りか、倫敦に來た日本人は、必ず一度寄つて見る。僕の居た頃は、特使官の一行を初とし、遣米艦隊赤十字社興業銀行の連中などで大分賑つた。西大將は、松石宇高の兩將校を隨へて、殆んど毎晩出て來られる。赤十字大會に來られた有賀博士が見える。日本の教育制度の講義に來られた菊池男爵が見える。陸奥大使館書記官が来る。坂田總領事が来る。

村田與銀總裁秘書が来る。名優左團次が来る。大の劇通松居松葉先生が来る。殊に此頃は不思議に新聞記者の多い折で、右の松居君を初め「時事」の小山君「大毎」の高石君「二六」の小野瀬君「法律新聞」の高木君、之に「中央」に關係ある前の荒川君と、「日本」に關係ある某君と僕とを加へて總勢八人落合つたことさへある。其の折誰やらが、うかと口を滑して、新聞屋が何とかと言たとかで、一同から八方攻撃を受けたこともある。次手だから斷つておくが、世間では能く新聞記者と新聞屋とを一つにして、動もすると、人に新聞屋呼ばりをする者がある。關西に行くと、殊に多い。夫れ粗笨なる頭は、動もすれば差別を忘れるものである。悪意で言ふではあるまいが、聞く者は癩に觸る。以後屹度心得て貰ひたい。流石に英吉利人からは、一たびも、そんな扱を受けたことはない。

或夜、西大將が愈明日を以て、巴里へ出發と定まつた時、居合せた一同は、三鞭の杯を舉げて、坂田總領事の發聲で、大將の萬歳を祝した。其上大阪の某君が、すつくと立つて、朗々と大津繪節を歌つたので、大將も倫敦の眞ん中で、大津繪を聞かうとは思はな

つたと笑はれた。
異境に故國の面影を寫して、此に貴賤を亡みし、貧富を忘れて相語るの樂みは、斯の如き俱樂部に限る。日本人の足跡、天下に遍うして、世界至る所に、斯いふものが出来ると、餘程面白いに相違ない。

○晚餐とシガー

今日は、スタインバーグ老人から、晚餐の案内とある。先づそろり〜と参らう。
此前、日本協會の年次大會で、僕の隣へ白髮の老人が一人坐つた。隣づからのこととて、色々話して見ると、此人名をスタインバーグと言つて、何でも四五年前半年ばかり、日本に遊びに来て居たことがあるとかで、矢張り大の日本好きだ。見せたい物もある、聞きたい事もあるから、何れ其内宅に案内しやうとのことであつた。僕は例に依つて「日英同盟」の祝杯がちと利き過ぎて、夫切り老人のことを忘れて仕舞つて居たが、或日「自宅の者はか

りて晚餐を差上げたいから、略服で来て呉れ」との案内が来た。青い紙に青い状態の夫に手跡が何しても女とよりは見られぬ。合宿の人々に聞いて見ても、多分女だらうといふので、僕は一も二もなく、之を前日音樂會の招状を呉れた何かし夫人と早合點して、早速返事を出した。出した返事は、差支あつて断るといふのであつたから宜かつたもの、左もなければ、飛んでもない恥を掻く所であつた。其後又案内が来た。今度も矢張り晚餐に來いとはあるが、外のお客もあるから、日本協會の時の服装で来て呉れとある。僕は之で初めて氣がついて、帳面を調べて見ると、成程麗々とスタインバーグといふ名があつた。失敗つたとは思つても、今更取返しがつかぬ。日本なら、穴へでも入りたいといふ所を、倫敦だけに穴は地下鐵道で御免を蒙つて、愈今夜出掛ることゝなつたのである。何とか言つたら、日本では奥様に返事を出すのが禮だ、とやる積だ。

倫敦の北の北の端のスクキス、カテゴリー停車場を出て、並木道美しい通に馬車を走らすこと五分にして、早や其の家に着いた。案内せられて、客間に通ると、壁やらマントルビ

「スやりに、日本の細工が大分列んで居る。お客は、僕を合せて男が三人、女が二人。主人側には、スタインバーグ老人に、其の姉と妹と合せて三人、姉は六十位、妹も五十近い。ス君も、此年になつて獨身なら、姉も妹も獨身である。「日本の禮」に依つて僕が返事を出した筈の當のスタインバーグ夫人なる者は、蔭も形もない。僕に代つて穴へ入つて呉れたものと見える。」

一體、英吉利には女が多過ぎる。といつて別段喧嘩にもなる譯ではないが、實際の所、英吉利には女の数が男の三倍あるさうな。英吉利に美人の多いのも、之が爲ださうだが、之と同時に未婚の老女の多いのも之が爲だ。僕がス君を女と間違へたのも、畢竟するに亦之が爲である。全體老人の癖に、あんな女の様な字を書くのが悪いのだ。

お客が揃つて、食堂へ出かけるので、僕はス君の姉様の手を取つて行くこととなつた。僕は遠來の客といふので、能く諸方の宴會で、主人側の夫人の手を取らせられたが、凡そ天下に、女の手を取つて食堂に連れて行くほど、僕に取つて閉口を極むることはない。沙

翁の「メリー、ワイヴス、オブ、ウキンズル」の中の、シヤローといふ男は、何時も細長い手の置場に困つたさうな。女を右の腕に凭らせると、誠に手首の處置に困る。突ッ立て、も變だし、ぐにやりと垂れても可笑しいし、左ればとて拳骨を固めて、レデーの案内でもわるまい。誠に閉口を極める。

食堂に入る。数々の御馳走が、次から次へと出て来る。大分話に花がさく。幸ひにしてス君を女と間違へた話は、出ずに仕舞つて、漸くにして、食事は濟んだ。斯う言つては相すまぬが、僕は英吉利で御馳走に招ばれる毎に、最後の皿が仕舞つて、シガーが出て来て、レデーが一同席を外すと、やれ〜と思つた。後には男ばかり残る。シガーの煙草に棚ひく中に、ネチクチンか何かの盃を舉げる。丁度斯いふ時に、ス君は飯坂へ行つた時の話を初めた。曰く「或朝未明に起きて、温泉に入つた處が、又一人誰か来た。僕はノー〜と追ひ返す。頗て又一人来る。又ノー〜で追ひ返す。所が又一人来た、今度は女だ〜」。傍に居た一人の客が笑つて、「今度はイエス〜だらう。」ス君も笑つて、「其の女は無邪氣に湯

「タイムス」の索引部
百四十八

に入つた。女も笑ふ、僕も笑ふ。斯ういふ美しい習慣は、逆も英吉利にならぬ。一同は皆笑つた。老人だけは罪がない。

頓て再び女客と一所になつて、ブリッヂが初まる。夫が面白さに、つい夜を深して歸らうとする頃には、もう汽車がない。ス君は老體を扶けて、態々戸口迄出て、囁々と呼子を吹いて、馬車を呼んで呉れた。倫敦では、一つ吹けばカブ、二つ吹けばハンサムが來ると定つて居る。

○「タイムス」の索引部

倫敦「タイムス」が、世界第一の信用ある世界第一の新聞であることは、誰一人知らぬ者もあるまいが、其の「タイムス」の編輯局の一部に、世界第一の索引部のあることは、餘り世間に知られて居らぬ。

假に譯して、此に索引部といふのは、同社のインテリジエンス・デパートメントのこと

で、文字通に言へば、報告部と譯した方が宜いかも知れぬ。此の索引部の主任は、ジョン・チャータース君とて、同社で發行する「エンサイクロペヂア・ブリタニカ」の編輯の次手に、此事業を思ひ立つて、創立以來まだ四五年にしかならぬ。チャ君の下に、助手が八人ある。此等が、互に代り合つて、晝間から夜半にかけて、脳目もふらず、索引の編纂にはまり込んで居る。

一體其の索引とは、何の索引だといふと、一には新聞の切抜、二には公刊の書物、三には官報及青書で、此等を精讀して、一々之にアルファベット順の索引をつけるのである。成程、書物の索引ならば、既に大凡は夫々に附いても居るし、夫でなくても、一應の順序を立て、書き列べたものであるから、索引を附けるにしても、手がかりはつと易い。何事が何度何箇所に出て來るかも、豫め測り知られぬ數々の新聞切抜を、一々分類し標識して、之に索引をつくるに至つては、聞いた許りでもうんざりする。

我邦では、書物の索引でも、餘り行はれて居ない。索引らしい索引といふのは、法令

全書に附いてある位のものである。随つて、索引の便利も餘り知られて居なければ、之が編輯の困難も、亦無論知られて居らぬ。新聞切抜の索引など、聞いても、世間では下手な書物の目録位に考へて居る方も多からうが、何うして、そんな生優しいものでない。先づ此に切抜があるとする。「タイムス」のもあれば外の新聞もある。之を其記事の題目に依つて、政治なら政治、外交なら外交の中へ入れる。之が「日本」に關したることなら、政治部の日本に入れる。日露戦争に關したることなら、日本の日露戦争部に入れる。戦争前のことなら、前の部、後なら後の部に入れる。戦争前の中にも、戦争の原因部がある、列國の態度部がある、日露談判部がある、戦争の準備部がある、其外色々ある。其の又同じ戦争の準備部の中にも、海軍がある、陸軍がある、軍事以外のものがある。海軍の中に、軍艦部がある、將校部がある、色々ある。斯様に、ちやんと部類が備はつて、其の中に切抜を入れ行くだけなら、唯面倒といふだけで済むが、初に此部類を定めるまでの苦心は、一通りの苦心でない。夫に、同一の記事が彼の部にも、此の部にも跨つて來ることがある。

其の時は何れを見ても分るやうに、クロス、レフェレンスとて彼此参照の用に供すべき別の索引を用意しなければならぬ。又どの部類にも入れ兼ねるのがある。此の時は新に部類を作らなければならぬ。又均し、切抜といつた處が「タイムス」の切抜の中などには、僅か二三行位の短い小さい奴が屢々ある。夫でもちやんと分類する。其中に、うつかり人の名が二ヶ所にも出て居れば、記中は二三行でも、索引の方へは矢張二ヶ所に附けなければならぬ。此面倒を極めた索引部のある結果、世間に顯はれたものとしては「タイムス」の年次大索引目録がある。之は、日々頁數十五六頁を下らぬ「タイムス」の紙上に出た一年中の記事を一々アルファベット順に配列した總目録である。之さへ見れば、何の記事が何月幾日に出て居たか一目に知れる。週刊雑誌の索引目録なら、日本でも「ジャパン、メール」や何かでやつて居るが、日刊新聞に至つては、索引は愚か、單純な目録だけでも、之を發行するものは、世界中に唯我倫敦「タイムス」一つだけである。僕は此の大苦心の結果、成つた年次索引がどれだけ賣れるかと聞いて見たら、チャーターヌ君笑つて答へて曰く、夫は

「タイムス」の索引部

百五十二

お話しにもならぬ程の少政である。併し其少数の購讀者は、孰も之を必要とする真個の愛讀者ばかりである。社は初から大に賣れるとも思つて居なかつたし、又之で儲けやうとする念は毛頭ない。百年と経ち、二百年と経つ中には、追々知己が殖えて来るに相違ないと確信して居ると。知己は千歳に求むるチャータース君の意氣は、實に壯とせざるを得ぬ。而して、チャ君の話によると、此の所謂知己の中に、既に巴里の我日本大使館が真最初から加はつて居るといふのは、やゝ人意を強うするに足るものがある。

外に顯はれたのは之だが、内に在つては、此索引部が、殆ど編輯部の中心となつて居る。八方から様々のことを聞きに来る。チャ君は助手を指揮して、一々之に答へる。丁度僕が索引編輯に關するチャ君の講義を聴いてる最中にも、外報主任のチロル君が、白髯を掀しながらやつて来て、マセドニアの何とかは、何時頃だつたかと聞く。金切聲の財政主任フーパー君が、四五年前に、マンチエスターの何處とかでやつたチエンバレンの演説が見たと言つて来る。電報主任のスコット君が、兩肩を怒らせながら、今來た電報の中に斯う

いふ地名があるが、何の邊だらうといふ。さうかと思ふと、内報部から、何とか僧正の履歴を聞きに来る。主筆の秘書から、二月の幾日やらの社説が見たいと言つて来る。中々忙しい。チャ君、僕を顧みて、どんなに込入つた質問でも、五分間あれば必ず調べて見せませといふ。

○「タイムス」の編輯局

地下鐵道のブラック、フライアイアース停車場を出ると、直ぐ其の前に、巍然たる「タイムス」社が立つて居る。正面は、廣告と新聞注文の受附口であるが、之は八時以後閉鎖して誰も居ない。一體歐羅巴や亞米利加では、どんな店でも、八時過になると、皆仕事を仕舞ひ、日曜日の如きは、郵便迄が休んで仕舞ふか、配達を一二回に減する。夫から見ると、日本などは結構なもの、僕はいつも思つて居る。近來日本でも、之を真似やうとする阿呆があるさうな。休むことだけ西洋に真似たとて、何になる。

「タイムス」の編輯局

百五十三

社の左側の細い路次(と言つても日本の路次よりは大きい)を入つて、一寸とした空気を通り抜けて、突き當りに、工場の入口がある。此處で案内を求めると、編輯局の入口を開けて呉れる。其處を入れば、直ぐ昇降機があつて、三階の編輯局迄する(と釣り上げる。全體此の昇降機なるものは、誠に怪しからぬもので、此の前も夜深に歸らうとして、折悪しく給仕が居ないので、一廉心得顔に其中へ入つて見たが、先生一向動かうとはせぬ。自圓太踏んでも動かぬ。已むを得ず人を呼び立てたら、ボタンを押せといふ。命の如くボタンを押したら、下るべき筈のが上へ昇りやがる。忌々しなことも愚なりだ。所で、昇るだけなら我慢もなるが、どんく昇つて一向止らぬので、此奴天非裏迄突き貫けたら何うしやうかと気が氣でなかつた。幸ひにして、二階目かで止つたので、其處で人に問へば、ボタンの押し方があるとのことであつた。成程、ボタンもスタンブ見たやうな者かと悟つて、其の以來僕は其の昇降機通となつた。

二階には、主筆室、主筆秘書室、及内報部編輯室などがある。三階には、取附の左側に、

外報主任のチロル君の室があつて、此處にチ君が助手のブラウン君と一所に居る。お向ひが索引部の室で、夫から一軒おいて先が、外電主任のスコット君の室。夫から又一軒おいて隣に、財政主任のフーバー君の室がある。先づスコット君の室から素見して行かう。ス君は、助手一人と、續々到來する幾百通の電報を選分けて、筆を入れる、書き直す、標題をつける、工場に送る、重要なものが来ると、主筆と外報主任とに報ずる。中々忙しい。巴里伯林邊からは、別室の自働電信機で取つた青い細い紙が来る。彼得堡維也納からは、普通の電報が續々舞ひ込む。見れば、路透電報が、左ながら、日本、何々通信社から来る通信と同じやうに、机の片隅に堆く積まれてゐる。よく、特電の少い時の外は、大抵棄て、仕舞ふのだと、ス君がいふ。

此の室に限らず、「タイムス」では、受持々々夫々部屋が別に成つて、一室凡そ十坪ばかり。之を大抵一人か二人で占領して居る。五六人も居るのは、僕の見た所内報部ばかり。室毎に、夫々の参考用書が壁一面の書架に一杯ある。其の森として静かなこと、到底他社

のびわくしたのと比べものにならぬ。

ス君の室を出て、索引部でチャータース君の講義をきく。外報部でブラウン君と外國通信の話など聞く。財政主任の所で、油を賣る。時には自動電信機の室に行く。巴里へ「杉村君が来て居る。今何時か、天気はどうか。」など聞く。巴里から返事が来る。今頃は、大方巴里のオーニール君などが、オペラ通りの群集を見下しながら、忙しがつて居る所だらう。

僕は、八時に晚餐をすませた後出かけて、十二時に社を出る。餘り草臥れた時は、停車場のバーでウキスキー一盞を舉げる。汽車の中に居睡つて、停車場一つ乗り越す位のことには、必ずしも珍らしくない。宿では、僕が新聞社へ行くと言つて、毎晩夜深くて歸るのが問題になつて、とうとう夕方から外へ出かけることを、誰彼なしに、「一寸新聞社迄」と言ふことになつた。

○婚禮とブレイン君

婚禮の式は、滞りなくすんだ。

「タイムス」の總取締役ヘル君は、満面の笑を傾けて、列み居る人々を見渡して居る。三十分前までは、ミッス、アイリス、メリー、ベルであつたヘル君の一女は、今しも何がし夫人となつて、長裾地に曳く純白の装の神々しく、香り高き花束片手に、新郎と出て来る。階上階下の來賓は、そろそろと座を立ちかける。此處アナンシエーション教會の中は、暫し身動きもならぬ群集。

僕は、例の大山のゆるぎ出でたやうな大兵肥満のブレイン君と、右に左に人を避けて、入口に出る。「タイムス」の主筆バックル君が令嬢と出て来るのに會ふ。顔だけは、毎日見知り合つて居る内報部の某君が、夫人の手を携へて出て来る。彼方此方にタイムス、ブツク俱樂部で始終顔を見合す美人が大分見える。此等が互に入亂れて挨拶する。軽く目禮す

るがある。手を握るがある。何やら滔々と辯じ立てるがある。ブレイン君は、片頬に笑を
 合んだ儘、始終無言で、僕の手を引いてすん／＼と出て行く。
 外面には、道の両側に馬車が一杯。孰れも之から、ヘル君の宅のリセプションに向ふ所
 である。やつと、此處を通り抜けて、クベックの通りに出ると、ブレイン君は、初めて口
 を切つて、『變なものぢやないか』と、如何にも變な物らしいことをいふ。何が變だか、僕
 には分らぬ。

ブ君は、一息ついで、徐々と歩るさながら、語り出した。『今迄は娘の身で、親の許に居
 た者が、結婚の瞬間に、人の妻となつて、今日から他人と一所になる。實に變なものだ。』
 といふ。夫だけなら、格別變なことも何もない。見玉へ、會堂の中には、幾百人と集まつ
 てゐるが、夫が幾百の眼で見居るから變だ』といふ。一向變なことはありやしない。
 『今迄育て、來た娘を、之から手離さうといふ親の心もある。自分も早くあゝなつて見たい
 と苦勞する娘もある。嬉しさに何もかも忘れた當の新郎新婦もある。此婚禮で、いくらか

儲ける坊主もある。之を又新聞、喜かうといふ新聞記者もある。』といふ。成程、少し變な
 ものになつて來た。ブ君は聲を潜めて、『僕は實の所、まだ結婚したことはないのだ』とい
 ふ。成程、夫ならば、婚禮が變な物に見えるのも無理はない。

ブ君は、何う見ても五十をすつと越えて居る。夫が今に獨身である。此後とても結婚す
 る氣はないさうな。『人間の義務を果さぬといふ非難はあるだらうが、其の代り、僕は他の
 點で盡すべきだけは盡して、人間相當の務は立派に果して居る積だ。』とブ君は何時になく
 昂然として言つた。女房を持つことだけは、人間の務通りやつて居る人が、随分ある世の
 中に、僕はブ君の意氣に服せざるを得ない。前のスタインバーグ老人も、或は之と同じ意
 味の獨身であるかも知れぬ。

兎角して、僕等はヘル君の宅へ着いた。來賀の客が、家の外迄溢れて、其賑しさ一通りで
 ない。ヘル君夫婦と新婦とは、目早く僕を見つけて、頻に僕が贈つた七寶燒の禮をいふ。

○日本語の「君が代」

マンション、ハウスの伏見宮殿下歓迎式場で、ヨーク公陸軍幼年學校の生徒三十餘名が、日本語で君が代を歌つた。其の發音といひ、調子といひ、寸分日本人と變らぬのみか、其のたツぶりとゆとりのある聲で、落つて歌つた所は、能く日本でやる所走つた聲でさよら、とやつて仕舞ふのとは、大分違ふ。之には、列席の内外人共に均しく感心したのであるが、漢等は感心と同時に、此の遠い、外國で、故國の言葉が歌はれたのを聞いて、何とも言へぬ懐しさを感じた。英吉利人が日本に來たなら、至る所に英語が聞かれる。「お早う」「お休みの位の英語なら、大抵の小學生徒は皆な知つて居る。日本人の英吉利に來た時は、なかくさう行かない。荷も日英同盟など、唱へて、兩國の和親を計らうとするなら、英吉利人も、ちと「お早う」「お休み位の日本語は心得て置いて貰ひたいものだ。ホテルの喫煙室とか、公園のベンチとかで、突然見ず知らずの人から、日本語で挨拶せら

れたら、誰だつても、日本人なら嬉しいと思ふに相違あるまいと、僕は考へた。

或日「クロニクル」の元從軍記者であつたリンチ君に招かれて、サベーター俱樂部の午餐に行つた時、ふとブレイン君に會つて、此の事を話すと、ブ君大に賛成して、是非其の意味の投書を「タイムス」に出せといふ。今此處で書くなら、僕が持つて行つてやらうと違言ふ。此に於て、チームスの河面を見渡した俱樂部の三階の讀書室で、僕は筆を取り初めた。ブ君は側に居つて、例の片眼鏡越しに覗き込みながら、そんな字をそんな處へ使つては行かぬといふ。斯いふ風に言つた方がよくなるか、時々言つて呉れる。元來ブ君は名だゝる語學者で、佛蘭西語にかけては「タイムス」社中に一二を争ふ位。又英吉利の古文學にも造詣淺からぬ人で、新聞記者仲間でも評判の文章家である。ブ君は、いつも今の新聞記者が動もすれば、拙速主義を是れ事として、生硬な熟語を使つたり、確と當嵌らぬ文句を用ひて、いきなり千萬な文を綴るのを、此の上もない苦々しいと心得て居る。世の中に我が思ふ通りを、しつかりと寸分の違ひなく言ひ表はす言葉を見つけた時ほど、愉快なことは

ないと、ブ君は能く言つて居る。僕が「たッ、ふりとしたゆとりのある聲」といふものを譯し兼ねて、彼れもいけず、此も面白からずと考へに沈んだ時、僕の意味を十分に聴いた上、此の大兵肥満のブ君は、唯此の一兩語の爲に、眼を閉ぢ口を噤んで、長い間考へて呉れた位である。ブ君は「タイムス」の外勤主任で、日本ならば、探訪の親方といふ所、其れが此だ。

だから、社中でも、ブ君の重んぜられることは一通でない。ブ君一たび筆を提げて其の所謂「探訪」に出かけると、其の堂々たる風采といひ、其の温良なる調子といひ、而して外には知れぬが、其の胸に藏する萬巻の蘊蓄といひ、遂に衆同業を抜いて出て居る。停車場に宮殿下を迎へた時にも、マンション、ハウスに歓迎の式に列した時でも、氣のせい、此の人に依つて、わが親愛なる「タイムス」は、慥に他社を壓して見えるやうに思つた。漸くにして、此の二人が、りの投書が出来上る。ブ君は讀んで見て、好々々と言ふ。其處へ、リンチ君が来て、一體人の客を捉へて、何をして居たのだと言つて笑ふ。

倫 教 小 品

文は五月十三日の倫敦タイムスに出で居る。曰く

TO THE EDITOR OF THE TIMES.

Sir,—Will you permit me, as a Japanese present at the Guildhall yesterday, when an address was presented to his Imperial Highness Prince Fushimi, to express the pleasure which was experienced by all Japanese at the singing of their national anthem by the boys of the Duke of York's School. It was an agreeable surprise to the Japanese in the audience to hear the familiar strains of their own national anthem sung by English boys, and still more was it surprising to them that the boys should be able to sing the Japanese words with distinctness and purity of pronunciation. The voices of these boys are fuller than those of our Japanese children at home, and the effect of their singing was therefore richer, and, I may say, even more pleasing to a Japanese ear than the native rendering of the anthem.

May I add that we Japanese were all touched by hearing our much-loved anthem sung so far away from home, for there is nothing more moving than to hear one's own language spoken in a distant foreign land? And now that the boys of the Duke of York's School have proved conclusively that English tongues can frame the accents of the Japanese language, would it not be a happy idea, and one calculated to strengthen the sympathy already existing between our two allied nations, if English boys and girls were taught at least some simple phrases in Japanese? If English people could merely say to Japanese visitors to England "Good morning," "Good night," "Good-bye," "How do you do?" in Japanese, this little attention would be very highly appreciated and do much to create friendship between the people of the two countries. I may add that almost every child in our Japanese schools can utter these salutations in English.

Yours truly,
K. SUGIMURA, Correspondent, Tokyo Asahi. 68, Cromwell Road, South Kensington, May 11.

大 英 遊 記

此の投書が「タイムズ」に現はれて後、間もなく「メール」の時と同じやうに、僕はさまざまの書面を其の讀者から受取つた。先づ之に就ての批評は申す迄もなく「君が代」の文句を教へて呉れといふがある。其の英譯を聞きたいといふがある、音譜の書いたものがないかとお尋ねがある。「お早う」、「お休み」の日本語は何ういふのかといふのがある。中には、僕を音楽に精通した者とも考へたものか、ジエンキンス嬢の芬蘭瑞典音楽の講演會、ユナイテッド、アーツ俱樂部の合奏會、マダム、ヒルデブランドの獨唱會の案内などもあつた。

當のヨーク公陸軍幼年學校の校長マレー大佐からは、早速丁寧な禮狀が來た。之と同時に、「近日、當校へ西大將の臨場を仰ぐ積であるが、其の節は何とか少し奇抜なとをやつて見たいから、先づ生徒一同に聲を合せて、グード、モーニングを日本語で言はせ、夫から生徒中から、總代を選んで閣下の來校が當校及生徒一同の光榮とする所である」「日本語で謝辭を述べさせやうと思つて居る。汝は夫に就て何を考へなすか」とやつて來た。

成程、西大將の姿が見えると同時に、校長が一合の下に、一イニの三つか何かで、一同聲を合せて、「お早う」とでも怒鳴りつけたら、此の勇敢なる日本の大將をさへも面喰はすべく十分に奇抜であることを、私は確かめてある。併しながら、之は實行すべく、餘りに奇妙である。有り體に言ふ所で、私は賛成しなさんぬ。其處で、僕は早速之に答へて、何も「お早う」の一齊射撃は、日本でも聞いたことはないから、ちと變だらうと思ふが、挨拶を日本語でやる方は、至極結構であるから、若しお望とあらば、生徒一兩名僕の所へおこされたら、西大將には内々で、日本語の發音や調子を御傳授申さうと言ひ送つた。大佐からは、之に對しても、丁寧な返事が來て、西大將の事愈確定したら、是非日本語の口傳を頼みたいのと、及暇があらば一度僕にも學校へ來て見て呉れぬかとのことなど書いて、更に一轉して日英同盟に及び、「余は熱心に日英同盟の長へに續かんことを希望する者なり。此の同盟の續かん限りは、日本も、英國も、又他に如何の同盟をも求むるの要なかるべし。云々とあつた。但し日が無かつたので、僕も行かず、先方も來なかつたが、其の後

日本館の「君が代」
維也納で、西大將の一行に邂逅つて、此事を話したら、大將も夫は面白かつたらうとの仰
であつた。

此の投書以来、例のブレイン君が僕の所へおこす手紙は、必ず「イカトデスカ」で初まつ
て、「サヨナラ」で結ぶことになつた。或日ピクトリアの通りで、ブ君に會つた時、面白い
ことがあると言ふので、何事かと思つて聞いて居ると、ブ君の妹と云ふ、頻に日本語を知
りたいといふので、ブ君は其なけなしの臍線の中から「お休み」一つ教へ呉れた。斷つてお
くが、ブ君は總計四つしか知らぬのだ。所が、此の従妹が、ヘスチングスへ避暑中、或朝
海岸を散歩すると、日本の女に出逢つたので、早速「お休み」とやつた。其の意が先方に通
じたと見えて、其の女が莞爾と笑つたとかいふので、従妹先生大得意で、其の由こまゝと
手紙に書いて來たのであつた。朝ッばらからの「お休み」では、いくら暢氣なヘスチ
ングスの海岸だつて、面喰つたに相違ない。



アールスコートの博覧會館
(新嘉坡の風情)

アールスコートの日本村

○アールスコートの日本村

倫敦の西南隅、アールスコートの地に一區を劃
して、通稱アールスコート博覧會と唱へられて居
る者がある。倫敦博覧會會社の經營する所に係り、
主として世界各國の製造工業乃至風俗習慣を一般
に紹介するを目的とし、年々仕組を取り代へて、
或は印度博覧會、或は伊太利博覧會といふ風に、
一國々々づゝ開いて居る。設立以來既に十三年を
經過し、今後尙三十五年間の土地使用權を持つて
居るといふ。

今年此處で開いたのは、バルカン半島博覧會と